

『摧邪輪』卷中

(日本思想大系卷十五『鎌倉旧仏教』岩波書店刊)

於一向專修宗選択集中一摧邪輪卷中

至第五門
決一半

*39上

從此第四、破云「双觀經不說菩提心」、并云「弥陀一教止住時無菩提心過者、集曰、

末法万年後、余行悉滅、特留念仏之文。

無量壽經下卷云、當來之世、經道滅尽、我以慈悲、最惡特留

此經、止住百歲。其有衆生、値此經者、隨意所願、皆可獲得度。

私云、○此經止住者、即念仏止住也。所以然者、此經雖有

菩提心之言、未說菩提心之行相。○而說菩提心行相者、広

在「菩提心經等」。彼經先滅、菩提心之行何困修之。(已上集文。)

決曰、汝之所知菩提心者、其体は何物乎。此經說四十八願、

豈非菩提心耶。如「広釈菩提心論第一云」。菩提心有二種。一願

心、二分位心云云。又孔目章第二發菩提心章云、菩提心者、菩提

梵語、此翻名「果道」。果徳円通故、曰「菩提」。於「大菩提」、起意趣

求故、名「發菩提心」。然此發心經亦名願、要「大菩提」、令「來」属

己故、名「願」。天台觀經疏、釈「經發菩提心言」曰、菩提心是願「起

意趣向、名為「發心」。菩提是道、仏果円通、説為「菩提」。慧遠觀經

疏云、發菩提心明「起願」也。菩提是道、仏具円通、説為「菩提」。起

意趣向、名為「發心」。要而謂之、如「仏所得」。我亦當「得」、如是

等也。不空三藏(仁本・活本なし)菩提心義、引「大日經疏」云、發菩

提心者、謂生「決定誓願」、一向志「求一切智智」。必當「普度」法界衆

生。此心由如「幢旗」。是衆行尊首、由如「種子」、是万徳根本。若不

發「此心」、亦如「未託歌羅羅」。則大悲胎藏、何所「養育」云云。自

他宗顯密二教定判如是。約「淨土宗」、如「善導觀經疏第二云」、言「

發菩提心者、此明衆生欣心趣大」等云云。(具如上引。此又明「

一向專修宗選択集中に於いて邪を摧く輪 卷中

此れより第四、『双觀經』に菩提心を説かず、並びに弥陀一教止住の時に菩提心なしと云う過を破せば、『集』に曰く、

末法万年後、余行悉く滅して特に念仏を留めたまうの文

『無量壽經』の下卷に云く。「當來の世に、經道滅尽せんに、我慈悲を以て哀愍し、特に此の經を留めて、止住すること百歳せん。其れ衆生ありて、斯の經に値う者は、意の所願に隨いて、皆得度すべし」と。

私に云く、○此の經の止住というは、即ち念仏の止住なり。然る所以は、此の經に菩提心の言ありと雖も、未だ菩提心の行相を説かず。○而るに菩提心の行相を説くことは、広く菩提心經等にあり。彼の

經先滅しなば、菩提心の行、何に因てか之を修せん。(已上『集』の文)

決して曰く、汝の知る所の菩提心は、其の体は何物ぞや。此の經、四十八願を説く、豈に菩提心に

あらずや。又『孔目章』第二菩提心章に云く。菩提心は、菩提は梵語、此に翻じて果道と名く。果徳円

通の故に菩提と曰う。大菩提において、意を起こし趣求する故に、發菩提心と名く。然れば此の發心、

經に亦願と名く、大菩提を要め、己に來し属せしめる故に願と名く。天台の『觀經疏』に、『經』の發

菩提心の言を釈して曰く、菩提心、是れ意を願い起こし趣向するを、名けて發心と為す。菩提は是れ道、

仏果に円通するを、説きて菩提と為す。慧遠の『觀經疏』に云く、發菩提心は起願を明かすなり。菩提

は是れ道、仏果に円通するを、説きて菩提と為す。意を起こし趣向するを、名けて發心と為す。要とし

て之を謂えば、仏の所得の如き、我れも、亦、當に得べし、是の如き等なり。不空三藏の『菩提心義』

に、『大日經疏』を引きて云く、發菩提心は、謂く決定の誓願を生じて、一向に一切智智を志求せん。

必ず當に普く法界の衆生を度すべし。此の心由お幢旗の如し。是れ衆行の尊首、由お種子の如し、是れ

万徳の根本なり。若し此の心を發さずば、亦未だ歌羅羅に託(託?)びざるが如し。則ち大悲の胎藏に、

何ぞ養育せられん云云。自他宗顯密二教の定判、是の如し。淨土宗に約するに、善導『觀經疏』第二に

云うが如し、發菩提心と言うは、此れ衆生欣心趣大を明す等云云。(具さに上に引くが如し)此れ又菩

提心の義を明すに、善願を以て本となす。道綽『安樂集』に、又「淨土論」を引きて、此の義を明す。

唯、顯密二教の定判に限るにあらず、淨土宗亦以て之に同じ。是の故に當に知るべし、四十八願は弥陀

*39下

菩提心義、以善願為本。道綽安樂集、又引淨土論、明此義。非唯限顯密二教定判。淨土宗亦以同之。是故當知四十八願者、弥陀如來在因地時、以衆生為所緣、愛樂万德所成依正、撰取彼功德、令來屬己之故、名願也。此言非菩提心者、四十八願、其體是為何等乎。若言雖說弥陀如來自菩提心、未說困位行者菩提心者、諸經論中、明菩提心、說過去現在諸菩薩發心、勸進凡夫行者。仏道同故。此外更無異徹（活本「轍」）、雖有說因起之次第。是又不限一人、三世道同之儀式也。若爾以何簡別、可云不說菩提心乎。此言非罵詈阿弥陀如來、毀謗往生經乎。

次言彼經先滅、菩提心之行何因修之、此言何謂乎。念仏行者、立不可有菩提心之事、此言彌顯然也。既立念仏止住之義、然撥去菩提心。非唯限汝之在世。令万年以後念仏者悉斷仏子之稱。是斷衆生之慧命大賊也。夫菩提心者、不可求外、即己心性故、未可必為難起也。菩提心者、若約法、此云覺心、或云智心。若約法喻者、或云果道。如前出。果徳円通故、謂於果徳、通入之道路也。果者は涅槃果、即法也。道者は因、即喻也、即果之道也、依主釈也。如法界無差別論云、彼果者即涅槃界、何者為涅槃界、謂諸仏所有転依相不思議法身。文。此果性応得等三因、仏性中即名応得因。以菩提心、名加行因。如仏性論第二云、復次仏性体有三種三性所撰義。応知、三種者、所謂三因三種仏性。三因者、一応得因、二加行因、三円満因。応得因者、二空所現真如、由此空故、応得菩提心及加行等乃至道後法身故、稱応得。加行因者、謂菩提心由此心故、能得三十七品十地十波羅密助道之法乃至道後法身、是名加行因。円満因者、即是加行。由加行故、得因円満及果円満。因円満者、謂福慧行。果円満者、謂智断恩徳。已上解曰、応得因義、易知レ之。加行因者、有依主持業兩釈。依初義者、加行者、即論下所出三十七品十地等諸加行功德也。依菩提心得此功德故、云加行因。如論云、由此心故、能得三十七品等云云。加行

* 已上

如來、因地に在りし時、衆生を以て所縁と為し、万徳所成依正を愛樂して、彼の功徳を撰取して、己に來し屬せしむる故に、願と名くるなり。此れ菩提心にあらずと言は、四十八願、其の体何等と為すや。若し弥陀如來自ら菩提心と説くと雖も、未だ困位の行者の菩提心を説かずと言わば、諸經論中に菩提心を明し、過去現在諸仏菩薩發心を説きて、凡夫行者を勸進したまう。仏と仏と道同じ故に。此の外に更に異徹（活本「轍」）なし、因起の次第を説くことありと雖も、是れ又一人に限らざることは、三世道同の儀式なり。若し爾れば何を以て簡別して、菩提心を説かずと云ふべきや。此の言、阿弥陀如來を罵詈し、往生經を毀謗するにあらずや。

次に彼の經先ず滅しなば、菩提心の行、何に因てか之を修せんとするは、此の言何の謂ぞや。念仏行者は菩提心あるべからずと立てる事、此の言彌顯然たり。既に念仏止住の義を立てて、然も菩提心を撥去す。唯、汝の在世に限るにあらず。万年以後の念仏者をして悉く仏子の稱を断せしむ。是れ衆生の慧命を断ずる大賊なり。夫れ菩提心は、外に求むべからず、即ち己の心性の故に、未だ必ず起し難しと為すべからず。菩提心は、若し法に約せば、此に覺心と云う、或いは智心と云う。若し法喻に約せば、或いは果道と云う。前に出すが如し。果徳円通する故に。謂く、果徳において通入の道路なり。果は是れ涅槃の果、即ち法なり。道は是れ因、即ち喻なり、即ち果の道なり、依主釈なり。『法界無差別論』に云うが如し、彼の果は即ち涅槃界なり、何をか涅槃界と為んや、謂く諸仏の所有の転依の相、不可思議法身なりと。文。此の果性応得等の三因、仏性中に即ち応得因と名く。菩提心を以て、加行因と名く。『仏性論』第二に云うが如し、復次に仏性の体に三種三性所撰の義あり。応に知るべし、三種は、所謂三因三種仏性なり。三因は、一には応得因、二には加行因、三には円満因なり。応得因は、二空所現の真如、此の空に由る故に、応に菩提心および加行等乃至道後の法身を得べき故に、応得と稱す。加行因は、謂く菩提心は此の心に由るが故に、能く三十七品十地十波羅密助道之法乃至道後の法身を得、是れを加行因と名く。円満因は、即ち是れ加行なり。加行に由るが故に、因円満および果円満を得るなり。因円満は、謂く福慧の行なり。果円満は、謂く智断の恩徳なり。已上解して曰く、応得因の義、之を知り易し。加行因は、依主持業の兩釈にあり。初義に依らば、加行は、即ち論の下に出す所の三十七品十地等の諸の加行功德なり。菩提心に依りて此の功徳を得るが故に、加行因と云う。『論』に云うが如し、此の心に由るが故に、能く三十七品を得る等云云。加行の因なり、依主釈なり。後の義に依らば、謂く此の心に依りて、因円満なり。其の果満は、即ち法身を得るなり。『論』に云うが如し、乃至道後の法身等云云。加行即ち因なり、持業釈なり。円満因は、唯、依主名を得るなり。其の体と謂う

之因也、依主釈也。依後義者、謂依此心、因円果満。其果満者、即得法身也。如論云、乃至道後法身等云云。加行即因也、持業釈也。円満因者、唯依主得名。謂其體者、是十地十波羅密等加行功德也。如論云、円満因者、即是加行等也云云。依此加行得二円満故、云円満因。円満之因也、依主釈也。因円果満、徳俱在果位故、不可云円満即因也。義准可知、良以我法二執、必依妄縁生。畢竟無自性、無自性故、畢竟真空。指此真空理、名二空所現真如。此真如中、有不空恒沙性功德。此性功德始顯現、名加行因。即是菩提心也。如論云、加行因者、謂菩提心等云云。終顯現名円満因。即是三十七品等加行功德也。如論云、因円満者、即是加行等云云。

然則真如性在下、如白布、於此上有我法二執之假文。假文必無實體故、於真如性上、無擁塞。是故聞薰習水、洗真如性徳地、自性顯發、假文速滅。假文依地故、無體義成。以文無體故、妄執即不生。淨水与白地和合無二。理智冥合、離能取所取。是名不思議法身。果徳円通義、大旨如是。是故菩提心亦名道心。苦言其體者、智也。若約喩者、即是中間無擁之稱也。譬如世人若向牆壁等有問。為道耶、為非道耶。可答言、是即為非道、中間擁塞不可通故。若有向門戸問道非道者、可答言、此為道、中間無擁塞可通行故。此亦如是。応得因性、法爾有之。加行円満二因、待因縁顯發。其因縁非一、触類繁多。是故經中說發心因縁、出慈心悲心慳心等種種不同。是故有宿善人、自然感動。見聞悉為道心因縁。猶如解宝之人研石見宝。無福之人雖聞教、不發心。猶如盲者遇日光無所見。既說瞋恚貪等、猶為發心因縁。何況有弥陀一教時、何不發菩提心修菩提行耶。設雖無余事、彼時若有大種姓人、聞弥陀名号、有生下大信心生中大歡喜。此即可為大菩提心。念仏号、乃至不惜身命等、此即可為大菩提行。問曰、所言経道滅尽時者、指何時乎。答。諸師異説。且依群疑論第三、有三家説。一出信行禪師義破之。二云指刀兵

*三下

は、是れ十地十波羅密等の加行功德なり。『論』に云うが如し、円満因は、即ち是れ加行等なり云云。此の加行に依りて二の円満を得る故に、円満因と云う。円満の因なり、依主釈なり。因円果満、徳は俱に果位にあるが故に、円満即ち因と云うべからざるなり。義准じて知るべし、良以て我法の二執、必ず妄縁に依りて生ず。畢竟じて自性なし、無自性の故に、畢竟じて真空なり。此の真空の理を指して、二空所現の真如と名く。此の真如の中に、不空恒沙の性功德あり。此の性功德の始めの顯現、加行因と名く。即ち是れ菩提心なり。『論』に云うが如し、加行因は、謂く菩提心等云云。終わりの顯現を円満因と名く。即ち是れ三十七品等加行功德なり。『論』に云うが如し、因円満は、即ち是れ加行等云云。

然れば則ち真如の性は下にありて、白布の如し、此の上において我法二執の假文あり。假文必ず實體なき故に、真如の性の上において、擁塞なし。是の故に聞薰の習水、真如性の徳地を洗う、自性顯發し、假文速やかに滅す。假文地に依る故に、無体の義成ず。文は無体を以ての故に、妄執即ち生ぜず。淨水と白地和合し無二なり。理智冥合し、能取所取を離る。是れを不可思議法身と名く。果徳円通の義、大旨是の如し。是の故に菩提心、亦道心と名く。若し其の体を言わば、智なり。若し喩に約せば、即ち是れ中間無擁の稱なり。譬えば世人の若し牆壁等に向いて問うことあるが如し。道と為すや、非道と為すや。答えて言うべし、是れ即ち非道と為す、中間に擁塞ありて通ずべからざる故に。若し門戸に向いて道・非道を問うことあらば、答えて言うべし、此れ道と為す、中間に擁塞なく通行すべきが故に。此れ亦是の如し。応得因性、法爾として之あり。加行円満の二因、因縁を待ちて顯發す。其の因縁一にあらず、類に觸るるに繁多なり。是の故に『經』の中に發心の因縁を説くに、慈心・悲心・施心・慳心等の種種不同を出す。是の故に宿善あるの人、自然に感動す。見聞、悉く道心の因縁と為す。猶如解宝の人、石を宝と見るが如し。無福の人、教を聞くと雖も、發心せず。猶如盲者の日光に遇うも所見なきが如し。既に瞋恚貪等、猶し發心の因縁と為す。何に況んや弥陀一教ある時、何ぞ菩提心を發して菩提行を修せざらんや。設い余事なしと雖も、彼の時に若し大種姓人あらば、弥陀の名号を聞きて、大信心を生じ、大歡喜を生ずることあり。此れ即ち大菩提心と為すべし。仏号を念じて、乃至身命を惜しまず、此れ即ち大菩提行と為すべし。

問うて曰く、言う所の経道滅尽の時は、何れの時を指すや。答う。諸師に異説あり。且く『群疑論』の第三に依るに、三家の説あり。一には信行禪師の義を出して之を破す。二に云く、刀兵劫時を指す、

劫時、彼時人壽十歲、身長二肘、更不修甚深成定慧字、唯念仏生極樂云云。三引慶友所說法住記云、刀兵劫後、人壽漸增長、至百年、十大羅漢以三藏教法流行世間、至人壽六萬歲末七萬歲初、諸阿羅漢集仏舍利造宝塔供養。說辭謝語、一時俱入無余涅槃。其塔即陷入地、至金輪際方乃得住。其三藏教在舍利前已滅沒。經二百年、唯此淨法与舍利塔及諸阿羅漢一時滅沒。爾時無上正法永滅不現云云。(取意)

問曰、若如此兩說者、何故善導禮讚等、云「万年三宝滅此經住百年等」乎。答、分正像末三時者、約証行興廢一途說也。非惣尽仏法住世時也。是故若約第二家說、從二百年以後、至刀兵劫時。若約第三家說、從二百年以後、至七萬歲時也。是以環興師釈此止住百歲文云、有說釈迦正法五百年、像法千年、末法萬歲、一切皆過故、云滅尽。法雖滅已、仏以慈悲、憐苦衆生、獨留此經、百年濟度。此恐不然、非唯法住違諸聖教、事亦未盡故。今依法住記云、仏滅度時、以無上法附嘱十六大阿羅漢并諸眷属。令其護持、便不滅没。刀兵劫時、暫雖法滅、人壽漸增至百歲位、羅漢与眷属頭說正法。乃至此州人壽六萬歲時、無上正法流行世間、熾然不息。至人壽七萬歲時、無上仏法永滅没。時阿羅漢造七宝塔、釈迦如来遺身、都集其内。時(仁本「阿」あり、傍注「イ无」)羅漢与諸眷属、遶塔供養已、昇虚空、作如是言、敬礼世尊釈迦如来正等覺、我受教勅護持正法、及与天人作諸饒益。法蔵已没、有縁已周、今辞滅度。說此語已、一時俱入無余涅槃時、率都婆便陷入地、至金剛(仁本・活本「輪」、仁本傍注「剛イ」)際、方乃得住。爾時仏法永滅不現。此無間有七万俱胝獨覺、一時出現。至人壽八萬歲時、獨覺聖衆復皆滅没。次復弥勒如来出世。以此言之、当人壽七萬歲時、無上正法方永滅没。故云經道滅尽。十大大聖取仏遺身、立一塔時、唯弘此淨土之教。至滿百年、方取滅度時、率都婆便陷入地。(取意略鈔)此師義亦同論第三家。義准可知。依此等說、雖時節有異、俱非限淨土教、有仏舍利有護持

彼の時に人壽十歳、身長二肘、更に甚深の戒定慧字を修せず、唯、念仏して極樂に生る云云。三には慶友の所説『法住記』を引きて云く、刀兵劫の後、人壽漸く増長し、百年に至りて、十六羅漢、三藏の教法を以て世間に流行す、人壽六萬歳の末七萬歳の初めに至りて、諸の阿羅漢、仏舍利を集め宝塔を造りて供養す。辞謝の語を説きて、一時に俱に無余涅槃に入る。其の塔は即ち地に陥入し、金輪際に至りて、方に乃ち得住す。其の三藏教は舍利の前にありて已に滅没す。一百年を経て、唯、此の淨法と舍利塔および諸の阿羅漢と一時に滅没す。爾の時に無上の正法、永く滅して現せず云云。(取意)

問うて曰く、若し此の両説の如くならば、何の故か善導の『礼讚』等に「万年に三宝滅し此の経住すること百年」等と云うや。答。正像末の三時を分かつは、証行の興廢に約しての一途の説なり。惣じて仏法が住世の時を尽くすにあらず。是の故に若し第二家の説に約せば万年より以後、刀兵劫の時に至る。若し第三家の説に約せば、万年より以後、七萬歳の時に至るなり。是を以て・興師、此の「止住百歳」の文を釈して云く、有る説に釈迦正法五百年、像法千年、末法萬歳、一切皆過ぐる故に、「滅尽」と云う。法は滅し已わると雖も、仏慈悲を以て、苦の衆生を憐れみ、独り此の経を留め、百年濟度したまうと。此れ恐らくは然らず、唯、法の住すること、諸の聖教に違するにあらず、事亦未だ尽きざる故に。今、『法住記』の云うに依るに、仏滅度の時に、無上法を以て十六大阿羅漢并びに諸の眷属に附属したまう。其の護持をして、滅没せしめざる。刀兵劫の時、暫く法滅すと雖も、人壽漸く増して百歳に至る位、羅漢は眷属と正法を頭說せん。乃至此の州、人壽六萬歳の時、無上正法、世間に流行せんこと、熾然にして息まず。人壽七萬歳の時に至りて、無上仏法永く滅没せん。時に阿羅漢は七宝塔を造りて、釈迦如来の遺身、都て其の内に集む。時に(仁本「阿」の字あり)羅漢は諸の眷属と、塔を遶り供養し已わりて、虚空に昇り、是の如きの言を作さく、敬礼世尊釈迦如来正等覺、我れ教勅を受け正法を護持し、及び天人と諸の饒益を作さんと。法蔵已に没し、有縁已に周り、今、辞して滅度せん。此の語を説き已わりて、一時に俱に無余涅槃に入る時に、率都婆便ち地に陥入し、金剛(仁本「剛」の字、仁本「輪」の字)際に至りて、方に乃ち得住す。爾の時に仏法永く滅して現われたまわず。此の無間に七万俱の獨覺あり、一時に出現せん。人壽八萬歳の時に至りて、獨覺聖衆復皆滅没せん。次に復弥勒如来世に出たまう。此を以て之を言わば、人壽七萬歳の時に當りて、無上正法方に永く滅没せん。故に經道滅尽と云う。十大大聖は仏の遺身を取りて、一塔を立つる時、ただ此の淨土の教を弘む。百年を満つるに至りて、方に滅度を取りたまうとき、率都婆、便ち地に陥入す。(取意略鈔)此の師の義は亦『論』の第三家に同じ。義准じて知るべし。此れ等の説に依るに、時節異ありと雖も、俱に淨土教に限るにあらず、仏舍利あり、護持聖衆あり。此の三種は法滅後、百歳を満つるに至りて共に滅す。発心の勝縁は唯、一種に限らず。且く此の事を置く。若し第二家の義に依るに、唯、三災苦逼の衆生を見て、大慈悲心を起

*以下

聖衆。此三種至法滅後滿百歲共滅。發心勝緣唯不限一種也。且置此事。若依第一家義、唯見三災苦逼衆生、起大慈悲心、修慈悲行等、此等豈可非菩提行乎。如我世尊釈迦牟尼最初發心因縁中説。報恩經第二發菩提心品云、爾時喜王菩薩復白仏言、世尊、菩薩知恩自發菩提心、報恩教一切衆生、令發菩提心者、如來世尊於生死時、初發菩提心、因何事發。仏言、善男子、過去久遠不可計劫生死中時、以重煩惱起身口意業故、墮在八大地獄、所謂阿訶訶地獄阿婆婆地獄阿達多地獄銅釜大銅釜黑石大黑石乃至火車地獄。我於爾時墮在火車地獄中、共二人并挽火車。牛頭阿傍在車上坐。繫脣切齒張目吹火、口眼耳鼻烟炎俱起。身体殊大臂脚蟠結。其色赤黑、手執鐵杖、隨而鞭之。我時苦痛努力挽車。力勵前進時、我徒伴劣弱少力、劣弱在後。是時牛頭阿傍以鐵刀刺腹、鐵杖鞭背、血出沐浴、隨體而流。其人苦痛、高声大喚、苦痛難忍、稱父母、或或稱妻子。雖作如是唱喚、無益於己。我時見是受大苦惱、心生哀愍。因慈心生故、發菩提心。為此衆罪人故、勸請牛頭阿傍。比罪人者、甚可憐愍、少復加哀垂慈憐愍。牛頭阿傍聞已、心生瞋恚、尋以鐵刀、前刺我頸、尋時命終。即得脫於火車地獄百劫中罪。我以發阿耨多羅三藐三菩提心故、即脫火車地獄之罪。仏告喜王、挽火車者、今我身是。因菩提心故、疾得成仏。是故當知、一切衆生發菩提心、其事非一、或因慈心、或因悲心、或因施心、或因慳心、或因歡喜、或因煩惱、或因恩愛別離、或因怨憎和合、或因親近善知識、或因惡友、或因見仏、或因聞法。是故當知、一切衆生發菩提心各各不同。(此經上文、亦説縁法滅為發心因縁、可見之)此則積尊為罪人之昔、見衆生苦發菩提心、有慈悲人、皆以可同之。經文既云以重煩惱起身口意業故等。全非變化相也。謂為積尊因事、莫作過分思而已。又前所出縁發心、行相麤頭故、纔聞仏教名字、即可為發心因縁、未必可待文句。

如大日經第六三三摩(仁本「昧」)耶品第二十五云、仏言、有三

*313上

こして、慈悲の行を修する等、此れ等豈に菩提の行にあらざるべきや。我が世尊釈迦牟尼、最初の發心因縁の中に説くが如し。『報恩經』第二發菩提心品に云く、「世尊、菩薩は恩を知りて自ら菩提心を發し、恩に報いて一切衆生を教えて、菩提心を發さしむる者なり、如來世尊も生死の時において、初めて菩提心を發したまは、何の事に因りてか發したまは。仏の言わく、善男子、過去久遠不可計劫の生死の中の時、重煩惱を以て身口意の剛を起す故に、八大地獄に墮在す、所謂阿訶訶地獄・阿婆婆地獄・阿達多地獄・銅釜・大銅釜・黑石・大黑石乃至火車地獄なり。我れ爾の時に火車地獄の中に墮在して、二人と共に并に火車を挽く。牛頭阿傍は車上に在りて坐す。脣を繫じ齒を切り目を張り火を吹く、眼耳鼻に烟炎俱に起る。身体・大にして臂脚蟠結す。其の色赤黒にして、手に鐵杖を執り、隨いて之を鞭つ。我れ時に苦痛にして力を怒りて車を挽く。力勵みて前進する時、我徒伴は劣弱少力なり、劣弱を後に在く。是の時に牛頭阿傍は鐵刀を以て腹を刺す、鐵杖にて背を鞭つ、血出て沐浴し、体に隨いて流る。其の人苦痛にして、高声に大いに喚び、苦痛忍び難し、父母を稱し、或いは或いは妻子を稱す。是の如き唱喚を作すと雖も、己に益なし。我れ時に是の大苦惱を受くるを見て、心に哀愍を生ず。慈心生ずるに因る故に、菩提心を發す。此の衆罪人の為の故に、牛頭阿傍に勸請す。此の罪人は、甚だ憐愍すべし、少しく復哀を加え慈を垂れ憐愍したまへ。牛頭阿傍は聞き已りて、心に瞋恚を生ず。尋ち鐵刀を以て、前んで我が頸を刺し、尋時に命終す。即ち火車地獄百劫の中の罪を脱するを得。我れ阿耨多羅三藐三菩提心を發すを以ての故に、即ち火車地獄の罪を脱す。仏、喜王に告げたまわく、火車を挽くは、今の我が身是れなり。菩提心に因る故に、疾く成仏を得」と。是の故に當に知るべし、一切衆生の發菩提心、其の事一にあらざり、或いは慈心に因る、或いは悲心に因る、或いは施心に因る、或いは慳心に因る、或いは歡喜に因る、或いは煩惱に因る、或いは恩愛別離に因る、或いは怨憎和合に因る、或いは善知識に親近するに因る、或いは惡友に因る、或いは見仏に因る、或いは聞法に因る。是の故に當に知るべし、一切衆生の發菩提心、各各不同なり。(此の經の上の文、亦法滅を縁じ發心の因縁と為すと説きたまへり、之を見るべし)此れ則ち積尊、罪人たりしの昔、衆生の苦を見せなわして菩提心を發したまは、慈悲ある人、皆以て之に同じかるべし。經文既以重煩惱起身口意業故等と云へり。全く變化の相にあらざるなり。積尊の因事の為と謂いて、過分の思を作すなからぬのみ。又前に出す所の縁發心、行相麤頭の故に、纔かに仏教の名字を聞きて、即ち發心の因縁と為すべし、未必必ずしも文句を待つべからず。

『大日經』の第六三三摩(仁本「摩」の字「昧」)耶品第二十五に云うが如し、「仏の言わく、三種の

種法、相續除障、相応生、名三三摩（仁本「昧」耶）。云何彼法相續生。所謂初心不觀自性、從此發慧、如實智生離無分別網、是名第二心菩提相無分別正等覺句。秘密主、彼如實見已、觀察無盡衆生界、悲自在轉、無緣觀菩提心生。所謂離一切戲論、安置衆生、皆令住於無相菩提、是名三三昧耶句。（已上經文。）同經疏第十九云、此三中最初、但能發心、誓欲成仏。然未正觀如來功德、不能了知以何法、而得成仏、未能具有觀照之慧、但有求仏之心、而未達自己身之本性有何功德。但有此惠性、能於生死中、最初發心、而求仏果。此是初三昧耶也。從此心後、得如實智生、謂能以慧決扱、了知此是功德、此非功德等、是處非處邪正之相。以得如實智故、離無分別志（仁本・活本「妄」見之網、善滅諸戲論、安住真実相中）。然此実智、即是菩提心。三昧耶、是等義。然此心等發、名三昧耶也。初心雖未具美智、然亦誓成仏度人。即是等心故、亦得三昧耶名也。從此心第二心相續、無間無障故、次即於此真実句中、了真仮已、一切無盡衆生而起大悲心。是第三三昧耶也等云云。

〔解曰、如初菩提心、第二智、第三大悲也。上所謂三句義中、菩提心為因、大悲為根、方便為究竟云云。第二第三前後會尺（仁本「釈」具如此次疏文、恐煩不引。）〕

此中所説菩提心、四發心中當緣發心。未分別邪正是非。但有求仏之心、良以有称性信心者、誰何不如之乎。如我等者、恣飽法味、徒分別上下仏法。猶如漏初三昧耶。於仏法有何所得乎。至相大師於真正住持仏法、出顛倒見過、有三十二種偏病。彼中出一偏病云、上下空見有見衆生、唯欲得學上仏法、不首學下仏法云云。嗚呼臨飢欲食、寧嫌麤糲乎。剩色香珍於常、美味滋於舌。良道心行者、仏境何物不珍乎。為彼恋在世而捨命、思遺跡以折身之人、童窟之真影、石面之双輪、如遇在世、置而不論之。至灌器之池曝衣之石、恋慕銘心肝、渴仰徹骨髓。此心遂出三有之焚籠、永遊四徳之涼宮。華嚴經云、若有衆生、供養如來所經土地及塔廟者、亦具

法あり、除障を相續し相応して生ず、三三摩（仁本「摩」の字「昧」耶と名く。云何が彼の法相續して生ぜん。所謂初心に自性を觀ぜず、此れに従い慧を生ず、如實の智生じて無盡の分別の網を離る、是れを第二心菩提相無分別正等覺句と名く。秘密主、彼れ實の如く見已りて、無盡の衆生界を觀察す、悲自在に轉ず、無緣觀の菩提心生ず。所謂一切の戲論を離れ、衆生を安置して、皆をして無相の菩提に住せしむ、是れを三三昧耶句と名く」と。（已上經文）同經疏の第十九に云く、「此の三の中の最初、但能く發心し、誓いて成仏を欲す。然るに未だ能く正しく如來の功德を觀ぜず、何れの法を以て成仏を得るやを了知する能わず、未だ能く具さに觀照の慧あらず、但求仏の心ありて、而も未だ能く自己の身の本性に何の功德あるやを了達せず。但此の惠性ありて、能く生死の中において、最初に發心して、仏果を求む。此れは是れ初めの三昧耶なり。此の心より後、如實の智生ずるを得、謂く能く慧を以て決扱し、此れは是れ功德、此れは非功德等、是處非處邪正の相を了知す。如實の智を得るを以ての故に、無盡の分別の忘（仁本「忘」の字「妄」見の網を離る。善く諸の戲論を滅し、真実の相の中に安住す。然るに此の実智、即ち是れ菩提心なり。三昧耶、是れ等の義なり。然れば此の心等しく發すを、三昧耶と名くるなり。初心未だ実智を具せずと雖も、然るに亦成仏して人を度せんと誓う。即ち是れ等心の故に、亦三昧耶の名を得るなり。此の心より第二心相續す、無間無障の故に、次に即ち此の真実句の中において、真仮を了し已りて、一切無盡の衆生に大悲心を起こす。是れ第三の三昧耶なり」等云云。〔解して曰く、次の如き初菩提心、第二智、第三大悲心なり。上の所説の三句の義の中、菩提心を因と為す、大悲を根と為す、方便を究竟と為すと云云。第二第三の前後の會尺（仁本「尺」の字「釈」具さに此の次の疏文の如し、煩わしきを恐れて引かず。）〕

此の中の所説の菩提心、四發心の中の緣發心に當る。未だ邪正是非を分別せず。但求仏の心ありて、良に以て称性の信心ある者、誰か何ぞ之にしかざらんや。我等の如きは、恣のままに法味に飽き、徒らに上下の仏法を分別す。猶お初三昧耶に漏るるが如し。仏法において何の所得あらんや。至相大師は真正の住持の仏法において、顛倒の見過を出すに、三十二種の偏病あり。彼の中に一の偏病を出して云く、「上下の空見、有見の衆生、唯、上の仏法を學ぶを得んと欲して、下の仏法を學ぶを肯なわず」と云云。嗚呼飢えに臨みて食を欲するに、寧んぞ麤糲を嫌わんや。剩え色香は常に珍にして、美味舌に滋し。良に道心の行者、仏境の何物か珍ならずや。彼の在世を恋して命を捨て、遺跡を思いて以て身を折るの人の為に、童窟の真影、石面の双輪、在世に遇うが如し、置きて之を論ぜず。器に灌ぐの池、衣を曝すの石に至りて、恋慕は心肝に銘じ、渴仰は骨髓に徹る。此の心遂に三有の焚籠を出で、永く四徳の涼宮に遊ぶ。『華嚴經』に云く、「若し衆生ありて、如來の所經・土地及び塔廟を供養せん者は、亦善根を具し、一切の諸の煩惱の患を滅除し、賢聖の樂を得」と。宗家釈して云く、「此れ遺跡の利益を明かすなり」

善根、滅除一切諸煩惱患、得賢聖樂。宗家釈云、此明遺跡利益也云云。宝積經中、説信仰遺跡功德云、彼雖不見仏、而與見仏同云云。雖有如此勝利、唯是有心之令然也。道人心底、未必待此文句也。然如我等者、不見金容、不聞梵音、希生乎辺夷殊俗、適值於如来遺教。須聞一字一句如嘗甘露、空論上下之勝劣、徒懷空有之辺執。剩汝輕諸大乘宗、撥大菩提心。是偏依被催厭苦欣樂之心、無愛仏樂法之志也。如華嚴經云、設求出離、心下劣捨於最上仏智慧云云。我等有此過、仏法惟無主、恥哉悲哉、奈何奈何矣。今恨汝雖有求出離心、未下有樂仏智之思。無大乘宿善、初三昧耶未萌。依比無党乎菩提心之思、反致違背之過。豈非為無漸乎。若汝生法滅時、雖遇弥陀教、尚如今時。若於余類、未必一途須止汝之非理教訓。隨自之因縁感發。何況若有信欲、海水劫火猶不障、宿成堅種、三途猶聞法。是經論定説也。開法已易、何無道心乎。三途猶聞、何況人間乎。海水劫火尚不障、況有弥陀教時乎。是故言經道滅尽等者、惣約時処説、非別約人機説。此又經論定説也、不能委曲耳。又当知、弥陀一教至彼時着、依今時有經道故也。然執法滅化儀、撥去菩提心等者、今時經道即可滅。然者弥陀一教不可及滅時、何憑止住百歳文乎。

問。既云慈悲哀愍故、何依今時經道乎。答。既云經道滅時、不云留無仏世界。無仏世界、經道不行、不留念仏。明知彼時念仏止住、今時經道興行之等流也。此約相生因力辨。慈悲

縁力。惣言之、利生化儀、皆無非慈悲所起。於法滅時、難可化故、殊辨縁力也。苦依第三家説、以七万俱胝獨覺為縁、可發菩提心。雖為二乘聖者、如上經説發心諸縁中云、或因親近善知識、或因惡友等云云。即親近善友、是順縁門、即為成法因也。親近惡友、是違縁門、即為相違因也。若為大種姓人、善友惡友、俱是二門之發心縁也。不善惡友、尚為縁、何況於獨覺聖者乎。隨其所宜、可發菩提心。或復彼中と云云。『宝積經』の中に、遺跡を信仰する功德を説きて云く、「彼れ仏を見たてまつらずと雖も、仏を見たてまつると同じ」と云云。此の如き勝利ありと雖も、唯、是れ有心の然らしむるなり。道人の心底、未だ必ずしも此の文句を待たざるなり。然れば我等の如きは、金容を見たてまつらず、梵音を聞かず、希に辺夷殊俗を生じて、適たま如来の遺教に値う。須く一字一句を聞きて甘露を嘗るが如くすべきに、空しく上下の勝劣を論じて、徒らに空有の辺執を懐く。剩え汝は諸の大乘宗を軽んじ、大菩提心を撥す。是れ偏に厭苦欣樂の心に催されて愛仏樂法の志なきに依るなり。『華嚴經』に云うが如し、「設い出離を求むるも、心下劣にして最上の仏の智慧を捨つ」と云云。我等に此の過あり、仏法惟れ主なし、恥かしきかな、悲しきかな。いかんせん、いかんせん。今、恨むらくは汝は出離を求むる心ありと雖も、未だ仏智を樂うの思ひあらざることを。大乘の宿善なし、初めの三昧未だ萌さず。此れに依りて菩提心に党するの思ひなく、反つて違背の過を致す。豈に無漸と為すにあらざるや。若し、汝、法滅の時に生れて、弥陀の教に遇うと雖も、尚お今の時の如し。若し余類において、未だ必ずしも一途にあらざる。須く汝が非理教訓を止むべし。自の因縁に隨いて感發す。何に況んや若し信欲あらば、海水劫火猶し障らず、宿し堅種を成せば、三塗に猶お法を聞く。是れ經論の定説なり。開法已に易し、何ぞ道心ならんや。三塗に猶お聞かぬ、何に況んや人間をや。海水劫火猶お障らず、況んや弥陀教ある時をや。是の故に「經道滅尽」等と言うは、惣じて時処に約する説にして、別して人機に約する説にあらず。此れ又經論の定説なり、委曲する能わざるのみ。又当に知るべし、弥陀の一教、彼の時に至るは、今の時に經道あるに依る故なり。然れば法滅化儀を執りて、菩提心等を撥去するは、今時の經道も即ち滅すべし。然れば弥陀の一教も滅時に及ぶべからず、何ぞ止住百歳を憑まんや。

問う。既に慈悲哀愍の故にと云う、何ぞ今時の經道に依るや。答う。既に經道滅時と云う、無仏の世界に留むと云わず。無仏の世界に經道、行ぜず、念仏、留まらず。明らかに知んぬ、彼の時の念仏止住は、今の時の經道興行之等流なり。此れ相生の因力に約して弁す。慈悲、縁力を挙げ。惣じて之を言わば、利生の化儀、皆慈悲の所起にあらざるはなし。法滅の時に於いて、化すべきこと難きが故に、殊に縁力を弁するなり。若し第三家の説に依らば、七万俱胝獨覺を以て縁と為して、菩提心を發すべし。二乗の聖者なりと雖も、上の經の發心諸縁に説く中に云うが如し。「或いは善知識に親近するに因りて、或いは惡友に因りて」等と云云。即ち親近善友は是れ順縁門なり、即ち成法の因と為す。親近惡友は是れ違縁門なり、即ち相違の因と為す。若し大種姓人ならば、善友惡友、俱に是れ二門の發心の縁なり。不善惡友、尚お縁と為す、何に況んや獨覺聖者においてをや。其の所宜に隨いて、菩提心を發すべし。或いは、復、彼の中に多く大菩薩衆あるべし。一六聖衆等の如きは、多く是れ深位の菩薩なり、小聖形

多可有「大菩薩衆」。如「二十六聖衆等」、多是深位菩薩、現「小聖形」、護持佛法、利益衆生等是也。

*35上

問。然者群疑論三家義中、第一家義、論破之、後二家義、論不評之。今准「環興師解釈」、論第二家、非「尽理說」、以「第三家義」可爲「尽理說」。然者彼時実有「淨土教」、有「遺身舍利」、有「護持聖衆」、良可爲「發心勝緣」。如「第二家義」者、從「人壽十歲」至「百歲」以來、既云「佛法暫滅」。此時以「何爲勝緣」乎。答。有「種姓」人、於「地獄中」尚發心。如「前出」經文。「地獄尚然、況於人間」乎。況復彼時「三藏教等雖滅」、護持聖衆未入「無余」、是故聖衆可「施冥顯方便」。或復舍利從「金剛際」出、現「神變」出「種種法音」。衆生聞之、皆發「菩提心」、得「三乘不退之益」。即如「悲華經第七說」。法炬滅、法幢倒、正法滅已、我之舍利、尋沒於地至「金剛際」。爾時娑婆世界空無「珍寶」。我之舍利、變爲「意相瑠璃宝珠」。其明炎盛、從「金剛際」出於世間、上至「阿迦尼吒天」。雨「種種華曼陀羅華摩訶曼陀羅華波利質多華曼殊沙華摩訶曼殊沙華」。有「淨光明」、大如「車輪」。百葉千葉、或百千葉、其光遍照。亦有「好香」、微妙常敷、觀者無厭。其明炎盛、不可「稱計」。微妙之香、無量無辺、純雨如「是無量諸華」。當「其雨時」、復出「種種微妙音声」、仏声法声比丘僧声三帰依声優婆塞戒声成就八戒声出家十戒声布施声持戒声清淨梵行具大戒声助佐衆事声説経声禅思惟声觀不淨声念出入息声非想非非想声有想無想声識処声空処声八勝処声一切入声定慧声空声無想声無作声十二縁声具足声聞蔵声学縁覚声具足大乘六波羅密声。於「其華中」、出「如是等声」。色界諸天、皆悉聞之、本昔所作諸善根本、各自憶念、所有不善尋自悔責。即便來「下娑婆世界」、教化世間無量衆生、悉令「得住」於「十善中」。欲界諸天亦得「聞受」、所有愛結貪恚五欲諸心教法、悉得「寂靜」。本昔所作諸善根本、各自憶念、所有不善尋自悔責。即便來「下娑婆世界」、教化世間無量衆生、悉令「得住」於「十善中」。世尊、如是諸華、於「虛空中」、復當「化作」種種「珍寶」、金銀摩尼真珠瑠璃珂貝璧玉真宝偽宝馬瑙珊瑚天冠宝飾如「雨而下」。一切遍「滿娑婆世界」。爾時人民其心和悅、無「諸鬪諍飢

*35下

を現じて、仏法を護持し、衆生を利益する等是れなり。

問う。然れば「群疑論」の三家の義の中に、第一家の義、論じて之を破し、後の第二家の義、論じて之を評せず。今、興師の解釈に准ずるに、論の第二家、尽理の説にあらず、第三家の義を以て、尽理の説と爲すべし。然るに彼の時に実には淨土教あり、遺身の舍利あり、護持の聖衆あり、良に發心の勝縁と爲すべし。第二家の義の如きは、人壽十歳より百歳に至るまで以來、既に佛法暫滅と云えり。此の時に何を以て勝縁と爲んや。答う。種姓ある人、地獄の中において尚お發心す。前に經文に出すが如し。地獄尚お然なり、況んや人間においてをや。況んや復彼の時に三藏教等しく滅すと雖も、護持聖衆、未だ無余に入らず、是の故に聖衆、冥顯方便を施すべし。或いは復、舍利は金剛際より出て、神變を現じ種種の法音を出す。衆生は之を聞きて、皆菩提心を發して、三乘不退の益を得。即ち「悲華經」第七の説の如し。「法炬滅し、法幢倒れ、正法滅し已りて、我れの舍利は尋ち地に没し金剛際に至る。爾の時に娑婆世界は空無にして珍寶なし。我れの舍利は變じて意相瑠璃宝珠と爲る。其の明炎盛んにして、金剛際より世間を出で、上は阿迦尼・天に至りて、種種の華・曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・波利質多華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華を雨ふらす。淨光明ありて、大なること車輪の如し。百葉千葉、或いは百千葉、其の光遍照す。亦好香あり、微妙に常に敷き、觀る者厭なし。其の明炎盛んにして、稱計すべからず。微妙の香は無量無辺にして、純ら是の如き無量の諸華を雨ふらす。其の雨時に當りて、復種種微妙の音を出す、仏声・法声・比丘僧声・三帰依声・優婆塞戒声・成就八戒声・出家十戒声・布施声・持戒声・清淨梵行具大戒声・助佐衆事声・説経声・禅思惟声・觀不淨声・念出入息声・非想非非想声・有想無想声・識所声・空処声・八勝処声・一切入声・定慧声・空声・無想声・無作声・十二縁声・具足声聞蔵声・学縁覚声・具足大乘六波羅蜜声なり。其の華の中において、是の如き等の声を出す。色界の諸天、皆悉く之を聞き、本昔所作の諸善の根本、各の自ら憶念し、所有の不善、尋ちに自ら悔責す。即便ち娑婆世界に來下して、世間無量の衆生を教化して、悉く十善の中に住することを得しむ。欲界の諸天も亦聞受を得て、所有の愛結・貪恚・五欲・諸心の教法、悉く寂靜を得。本昔所作の諸善の根本、各の自ら憶念し、所有の不善、尋ちに自ら悔責す。即便ち娑婆世界に來下して、世間無量の衆生を教化して、悉く十善の中に住することを得しむ。世尊、是の如き諸華、虚空の中において、復當に化して種種の珍寶と作るべし、金・銀・摩尼・真珠・瑠璃・珂貝・璧玉・真宝・偽宝・馬瑙・珊瑚の天冠宝飾、雨の如くして下る。一切は娑婆世界に遍滿す。爾の時に人民の其の心和悦にして、諸の鬪諍・飢餓・疾病・他方の怨賊・悪口の諸毒なし。一切消滅し皆寂靜を得。爾の時に世界に是の如きの樂あり。若し衆生ありて、諸の珍寶を見、爲し触れ若し用いるは、三乘の中において、退転あることなし。是の諸の珍寶は是の利益を作し已りて、還りて地に没し本の住処金剛地際に至る。世尊、娑婆世界に兵劫起る時、我が身の

餓疾病他方怨賊惡口諸毒。一切消滅皆得寂靜。爾時世界有如。是樂。若有衆生、見諸珍寶、為觸若用、於三乘中、無有退轉。是諸珍寶作是利益已、還沒於地、至本住処金剛地際。世尊、娑婆世界兵劫起時、我身舍利、復當作紺瑠璃珠、從地而出、上至阿迦尼吒天、雨種種華、曼陀羅華摩訶曼陀羅華波利質多華。乃至、還沒於地、至本住処金剛地際、亦復如是。世尊、如刀兵劫、飢餓疾病亦復如是。世尊、如是大賢劫中、我般涅槃後、是諸舍利、作如是仙事、調伏無量無辺衆生、於三乘中、得不退轉。如是當於五仏世界微塵數等大劫之中、調伏無量無辺衆生、令於三乘、得不退轉。世尊、若後滿千恒河沙等阿僧劫、於十方無量無辺阿僧劫、余世界、成仏出世者、悉是我修阿耨多羅三藐三菩提時、所可教化初、發阿耨多羅三藐三菩提心、安住六婆(仁本・活本「波」羅密)者。世尊、我成阿耨多羅三藐三菩提已、所可勸化、令發阿耨多羅三藐三菩提心、安止令住六波羅密。及涅槃後、舍利變化、所化衆生、令發阿耨多羅三藐三菩提心者、是諸衆生過千恒河沙等阿僧劫、於十方無量無辺阿僧劫、世界、成仏出世、皆當稱我名字而説讚歎。過去久遠有劫名賢。初入劫時、第四世尊、名曰某甲。彼仏世尊勸化我等、初發阿耨多羅三藐三菩提心。我等爾時燒滅善心、集不善根、作五逆罪、乃至邪見、彼仏爾時勸化我等、令得安住六波羅密。因是即解了一切陀羅尼門、轉正法輪、離生死輪、令無量無辺百千衆生安住勝果。復令無量百千衆生安止天人乃至解脫果。若有衆生求菩提道、聞讚歎我已、各問於仏、彼仏世尊見何義利、於五濁惡世之中、成阿耨多羅三藐三菩提。是諸世尊、即便向是求菩提道善男子善女人、説我往昔所成大悲、初發阿耨多羅三藐三菩提心、莊嚴世界、及妙善願本起因縁。是人聞已、其心驚愕、歎未曾有、尋發妙願、於諸衆生、生大悲心。如我無異。作是願言、其有如是重五濁世、其中衆生作五逆罪、乃至成就諸不善根。我當於中而調伏之。彼諸世尊、以是諸人成就大悲、於五濁世、發諸善願。隨其所求、而與

*26上

舍利は復當に化して紺瑠璃珠と作り、地よりして出て、上は阿迦尼・天に至り、種種の華を雨らす、曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・波利質多華なり。乃至、還りて地に没し本の住処金剛地際に至る。世尊、刀兵劫の如きは、飢餓・疾病亦復是の如し。世尊、是の如き大賢劫の中に、我れ般涅槃の後、是の諸の舍利、是の如き仙事を作し、無量無辺の衆生を調伏し、三乘の中において、不退轉を得。是の如く當に五仏世界微塵數等の如き大劫の中において、無量無辺の衆生を調伏し、三乘において不退轉を得しむべし。世尊、若し後に千恒河沙等阿僧祇劫を満ちて、十方無量無辺阿僧祇余世界において、成仏して世に出る者は、悉く是れ我れ阿耨多羅三藐三菩提を修する時に、教化すべき所の初めに、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、六婆(仁本「婆」の字「波」)羅密に安住する者なり。世尊、我れ阿耨多羅三藐三菩提を成じ已りて、勸化すべき所、阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、安止して六波羅密に住せしむ。及び涅槃の後、舍利變化して、所化の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむる者は、是の諸の衆生は千恒河沙等阿僧祇劫を過ぎて、十方無量無辺阿僧祇世界において、成仏して世に出で、皆當に我が名字を稱して説きて讚歎すべし。過去久遠に劫ありて賢と名く。初めの入劫の時、第四の世尊、名けて某甲と曰う。彼の仏世尊、我等を勸化したまいて、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發したまう。我等爾の時に善心を燒滅し、不善根を集め、五逆罪を作し、乃至邪見なり、彼の仏、爾の時に我等を勸化したまいて、六波羅密に安住することを得しめたまう。是れに因りて即ち一切の陀羅尼門を解了して、正法輪を轉じ、生死の輪を離れ、無量無辺百千の衆生を勝果に安住せしめたまう。復無量百千の衆生をして天人乃至解脫の果に安止せしめたまう。若し衆生ありて菩提の道を求め、我れを讚歎するを聞き已りて、各の仏に問わまく、彼の仏世尊、何の義利を見んとて、重ねて五濁惡世の中において、阿耨多羅三藐三菩提心を成じたまうや。是の諸の世尊、即便ち是れ菩提道を求むる善男子善女人に向いて、我が往昔の所成の大悲、初めて阿耨多羅三藐三菩提心を發して、世界を莊嚴し、及び妙善の願・本起の因縁を説きたまへり。是の人聞き已りて、其の心驚愕し、未曾有と歎ず、尋ち妙願を發して、諸の衆生において、大悲心を生ず。我れの如きも異なりなし。是の願を作して言わく、其れ是の如く重ねて五濁の世にありて、其の中の衆生は五逆罪を作し、乃至諸の不善根を成就す。我れ當に中において之を調伏すべし。彼の諸の世尊、是の諸人の大悲を成就するを以て、五濁の世において、諸の善願を發したまう。其の所求に隨いて、受記を与えたまう。世尊、彼の仏世尊も復大乘を修學する諸人の為に、我が舍利所作の變化・本起の因縁を説きたまう。過去久遠に仏世尊まします、号字某甲なり。般涅槃の後、刀兵疾病飢餓の劫起き、我等は爾の時に其の劫中において諸の苦惱を受く。是の仏舍利は我等の為の故に、種種神足師子の遊戲を作す。是の故に我等は即ち阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを得て、諸の善根を種え、精勤に六波羅密を修習すること、上に広く説くが如し。(已上)

受記。世尊、彼仏世尊復為修學大乘諸人、說我舍利所作變化本起因緣。過去久遠有仏世尊、号某甲。般涅槃後、刀兵疾病飢餓劫起、我等爾時於其劫中受諸苦惱。是仏舍利為我等故、作種種神足師子遊戲。是故我等即得發阿耨多羅三藐三菩提心、種諸善根、精勤修習於六波羅密、如上廣說。(已上)

依此文証、無量無辺衆生、皆依舍利勸化、發菩提心、乃至成仏。於十方無量無辺阿僧・世界・出世、為衆生亦說本緣。非唯於法滅後、為發心因緣、成道後亦為衆生、說舍利勸化本緣、即云即得發阿耨多羅三藐三菩提心等、非唯限此劫末調伏衆生。於五仏世界微塵數等大劫中、亦復如是。此為十二部一經也。是時亦可有随機聞淨土行得往生衆生。是故二家義、俱非無發心勝緣也。若有發心者、聞法得道亦不疑。是故止住百歳等文、赤約經道與廢一途說也。更非謂約人機無如此諸門也。又前所說宿成堅種三途聞教海水劫火不能為障等義、此中可廣說。若如汝所解者、止住百歳後、不可有往生淨土因緣。若信如此等文理者、未必可限執也。汝說此邪義授所化故、如虫之若女、如泡之少童、皆悉撥大聖本意。雖不知有憑者、是為器。善種終可開發。汝皆將抑之、苦乎痛乎矣。又如前說。正像末三時、多約証行與廢說。然聖教大綱、正為兼為等五為、五為本意。悉皆成果道故。然此結緣德、設雖不生解而能信向、以成堅種、如下食金剛終竟不銷。設因余過墮於三途、聞經(仁本・活本「法」、仁本傍注「經」)信力、速能証悟。故地獄天子因光生矢、三重頓円十地功德。深有信欲、海水劫火不能為障。外道闡提、雖聞生謗墮於地獄、一薰耳識功不唐捐、終令獲益。乃至成仏、如狂罵藥服必病除、如毒塗鼓聞者皆死。是故經云、譬如生盲不見日、日光亦為作饒益。令知時節受飲食永離衆患身安穩。無信衆生不見仏、而仏亦為興義利、聞名及以蝕光明、因此乃至証菩提等云云。此利益三世無改易。然汝令諸人廢退經道、甚以不可也。

*346ト

*345上

此文証に依るに、無量無辺の衆生、皆舍利の勸化に依りて、菩提心を發し、乃至成仏す。十方無量無辺阿僧祇世界に出世して、衆生の為に亦本緣を説く。唯、法滅後において發心の因縁と為すにあらざる。成道の後に亦衆生の為に、舍利勸化本緣を説きて、即ち即得發阿耨多羅三藐三菩提心等と云う、唯、此の劫末に限りて衆生を調伏するにあらざる。五仏世界微塵數等の大劫中において、亦復是の如し。是れ十二部一經と為すなり。是の時に亦機に隨いて淨土の行を聞きて往生を得る衆生あるべし。是の故に二家の義、俱に發心の勝緣なきにあらず。若し發心ある者は、聞法得道亦疑わず。是の故に「止住百歳」の文、亦經道の興廢に約する一途の説なり。更に人機に約して此の如きの諸門を謂うにあらざるなり。又前の所説、宿成堅種三途聞教海水劫火不能為障等の義、此の中に広く説くべし。若し汝の所解の如くなれば、止住百歳の後に、往生淨土の因縁あるべからざる。若し此の如き文理を信する者は、未だ必ずしも限執すべからざる。汝、此の邪義を説きて所化に授くる故に、虫の如きの若女、泡の如きの少童、皆悉く大聖の本意を撥す。知らずと雖も憑むことある者は、是れ器と為す。善種終いに開發すべきが故に。汝、皆將に之を抑うべし、苦しきかな、痛きかな。又前説の如し。正像末の三時、多く証行の興廢に約して説けり。然れば聖教の大綱、正為兼為等五為、皆本意と為す。悉く皆仏道を成ずる故に。然れば此の結縁の徳、設い解を生ぜずと雖も能く信向すれば、以て堅種を成ずること、金剛を食し終竟りて銷けざるが如し。設い余過に因りて三塗に墮すとも、聞經(仁本「經」の字「法」)の信力、速やかに能く証悟す。故に地獄の天子、光に因りて天に生じ、三重の頓に十地の功德を円す。深く信欲あらば、海水劫火も障ること能わず。外道闡提は聞きて謗を生じて地獄に墮すと雖も、一たび耳識に薰するの功は唐捐ならず、終に益を得しむ。乃ち成仏に至るまで、狂罵の藥を服して必ず病除くるが如し、毒鼓に塗りて聞く者の皆死するが如し。是の故に『經』に云く、「譬えば生盲の日を見ずとも、日光亦為に饒益を為すが如し。時節を知りて飲食を受け永く衆患を離れ身をして安穩ならしむ。無信の衆生は仏を見ざれども、而も仏亦為に義利を与う、名を聞きおよび光明に触るる、此れに因りて乃至菩提を証す」等云云。此の利益は三世に改易なし。然るに汝は諸人をして經道を廢退せしむ、甚だ以て不可なり。

問。我以當機念仏為先、望遂順次往生。汝執過分聖道、唯期結緣益。誰謂於仏法都無利益乎。唯今所論者、順次生出離、生死不定也。汝列結緣益、我全不諍無之也。如何。答。若許有結緣益者、順次出離、更非不定。若就人言不定者、淨土門亦可同。淨土門未必即身遂往生。汝等又未望即身得念仏三昧。若期順次利益着、諸教皆有此益。於淨土者、或欲往生十方仏刹者、是亦可任意樂。又雖不生淨土、於生死中、有無量大益。且約華嚴宗、出解行益云、於第二解行生、住世界性等以上處、得自淨宝網轉輪王位。得普見肉眼、見十仏刹塵數世界海等、即是十地位也。值遇無量塵數諸仏世尊、受持無量阿僧・深妙法藏、与一切衆生為大善知識、即如善財善知識是也。

問日、此可為上代勝事。於末代者、不可有此順次勝益。如何。答。如前說、判正像末三時、約現身証行興廢說、順次解行益、未必闕上代。唯可依見聞善根有無。即如前所出地獄天子三重頓円益等、又如前出海水劫火不能為障宿成堅種三途聞教等、此等皆宗家盛談也。若有其根機者、雖為惡世、必發心。若發心者、必可有其果也。不可依惡世惡處。何況善趣乎。

問。爾者何故、安樂集等中、云於末代唯有淨土一門可通入一路等乎。答。彼等就淨土門立一分理。若無此理者、淨土門有何益乎。彼文所言聖道一種、今時難証等之言、亦約現生証道說之。即下文云、那含羅漢、斷五下除五上、無問道俗、未有其分等者、即此意也。更非簡順生順後益也。彼中所引大集月藏經文、亦同此意也。然祖師立宗、為令人知其道。其道已興、劇遣偏滯過。若取此捨彼、如惡水愛火。皆忘機為妙藥、莫執一捨一。

問。祖師設雖不偏執、若有一辺道理者、須依憑之。時屬末代、諸行皆陵遲。設雖覺余行、可有何益乎。答。淨土門祖師解釈、非不依憑之、皆以仰信之。但破此書者、即為成立聖道淨土二門義也。若成立菩提心者、二門仏道亦以可

問う。我れ當機の念仏を以て先と為て、順次の往生を遂げんと望む。汝は過分の聖道に執して、唯、結縁の益を期す。誰か謂う、仏法において都て利益なしと。唯、今、論ずる所は順次の生の出離、生死の定・不定なり。汝は結縁の益を列ぬ、我れ全く之なしと諍わず。いかん。答う。若し結縁の益ありと許さば、順次の出離は更に不定にあらず。若し人に就いて不定と言わば、淨土門亦同じかるべし。淨土門、未だ必ずしも即身に往生を遂げず。汝等、又未だ即身に念仏三昧を得るを望まず。若し順次の利益を期するは、諸教に皆此の益あり。淨土において、或いは十方仏刹に往生せんと欲うは、是れ亦意樂に任すべし。又淨土に生ぜずと雖も、生死の中において、無量大益あり。且く華嚴宗に約して、解行の益を出して云く、第二解行の生において、世界性等以上の處に住して、白淨宝網轉輪王の位を得。普見の肉眼を得て、十方刹塵數世界海等を見るは、即ち是れ十地の位なり。無量塵數の諸仏世尊に值遇したてまつり、無量阿僧祇深妙の法藏を受持し、一切衆生の与に大善知識と為る、即ち善財善知識の如き是れなり。

問うて曰く、此れ上代の勝事と為すべし。末代においては此の順次の勝益あるべからず。いかん。答う。前説の如きは、正像末の三時を判じて、現身の証行の興廢に約する説にして、順次の解行の益は未だ必ずしも上代に闕わらず。唯、見聞の善根の有無に依るべし。即ち前に出す所の地獄天使三重の頓円益等の如し、又前に出す海水劫火不能為障宿成堅種三途聞教等の如し、此れ等皆宗家の盛談なり。若し其の根機あらば、惡世と為すと雖も、必ず發心す。若し發心せば、必ず其の果あるべし。惡世惡處に依るべからず。何に況んや善趣をや。

問う。爾れば何が故ぞ、『安樂集』等の中に、末代において「唯、淨土の一門ありて通入すべき路」と云うや。答う。彼等は淨土門に就いて一分の理を立つ。若し此の理なくば、淨土門は何の益かあらん。彼の文に言う所の「聖道一種今時難証」等の言は、亦現生証道に約して之を説く。即ち下の文に云く、「那含・羅漢、五下を断じ五上を除くこと、道俗を問うことなく、未だ其の分にあらず」等は、即ち此の意なり。更に順生順後の益を簡ぶにあらず。彼の中に引く所の『大集月藏經』の文も、亦此の意に同じきなり。然れば祖師の宗を立つるは、人をして道をしらしめんが為なり。其の道は已に興りて、劇しく偏滯の過を遣る。若し此れを取り彼を捨つるは、水を惡んで火を愛するが如し。皆機に應じて妙藥と為す、一を執りて二を捨つることなかれ。

問う。祖師設い偏執せずと雖も、若し一辺の道理あらば、須く之を依憑すべし。時は末代に属して、諸行は皆陵遲なり。設い余行を覺れども、何の益かあるべきや。答う。淨土門の祖師の解釈、之を依憑せざるにあらず、皆以て之を仰ぎ信すべし。但此の書を破するは、即ち聖道淨土の二門の義を成立する為なり。若し菩提心を成立せば、二門の仏道亦以て光顯すべし。中に就いて菩提心は、法滅を縁とし

*以下

光顯。就中菩提心者、緣法滅為發起因緣。如下十住毘婆娑(仁本「沙」論第三說發菩提心七因緣)中云。一者諸如來令發菩提心。二見法欲壞守護故發心。三於衆生中大悲而發心等云云。論長行第二因緣云、或復有人、生在惡世、見法欲壞、為守護故發心。(広本略之)又下文云、如是三心、必得成就、根本深故云云。又起信論云、或因正法欲滅、以護法因緣、能自發心。又華嚴中有大王、見法滅發菩提心。依此力故、於六十千歲中、仏法得興盛云云。如是經論說非一。良以無上仏法難遇一遇。如盲龜得浮木。滿界財宝不如此一句法、恒沙身命不比四句偈。若聞一字正法、洞燃猛火之底、未必厭之。若無仏法名字、深禪欲樂之天、不足為樂。如華嚴云、菩薩摩訶薩求仏法藏、恭敬尊重、生難得想。有能說者、來語之言、若能投身七仞火坑、當施汝法。菩薩聞已、歡喜踊躍、作是思惟。我為法故、尚慮久住阿鼻獄等一切惡趣受無量苦。何況纒入人間火坑、即得聞法。奇哉、正法甚為易得。不受地獄無量楚毒、但入火坑、即便得聞、但為我說。我入火坑。如求善法王菩薩金剛思惟菩薩、為求法故、入火坑中云云。

*338上

て發起の因縁と為す。『十住毘婆娑(仁本「娑」の字「沙」論)第三の發菩提心七因縁を説く中に云く、一には諸の如來、菩提心を發さしむ。二には法の懷せんと欲すを見て守護する故に發心す。三には衆生の中において大悲して發心す』等云云。『論』の長行に第二の因縁を積して云く、「或いは復、人あり、惡世に生在して、法の懷せんと欲すを見て、守護の為の故に發心す」(広本に之を略す)又下の文に云く、「是の如き三心、必ず成就を得、根本深き故に」と云云。又『起信論』に云く、「或いは正法の滅せんと欲するに因りて、法を護る因縁を以て、能く自ら發心す」と。又『華嚴』の中に「大王あり、法滅を見て菩提心を發す。此の力に依る故に、六十千歲の中において、仏法の興盛を得」と云云。是の如き經論は一つにあらず。良に以て無上仏法に遇い難くして一たびも遇わん。盲龜の浮木を得るが如し。滿界の財宝は一句の法にしかず、恒沙の身命は四句の偈に比せんや。若し一字の正法を聞かば、洞然猛火の底にも、未だ必ずしも之を厭わざらん。若し仏法の名字なくば、深禪欲樂の天も、樂と為すに足らず。『華嚴』に云うが如し、「菩薩摩訶薩は仏の法藏を求め、恭敬尊重し、難得の想を生ず。能説の者ありて、來たりて之を語りて言わく、若し能く身を七仞の火坑に投げ、當に汝が法を施すべし。菩薩、聞き已りて、歡喜踊躍して、是の思惟を作さく。我れ法の為の故に、尚お當に久しく阿鼻獄等の一切の惡趣に住して無量の苦を受くべし。何に況んや纒かに人間の火坑に入り、即ち法を聞くことを得。奇なるかな、正法甚だ得易しと為す。地獄の無量の楚毒を受けず、但火坑に入り、即便ち聞くことを得。但我れの為に説きたまえり。我れ火坑に入る。求善法王菩薩・金剛思惟菩薩の如く、求法の為の故に、火坑の中に入る」云云。

*338下

當に知るべし、三惡極重の苦、尚お法の為に難と為す。況んや余事においてをや。四句の為にして身に千釘を受け、半偈を求めて高殿より命を捨つ。王身を羅刹の床と為し、天衣を野干の坐と為す。天王の勝位を輕んじ、鬼畜を敬いて尊高と為す者は、皆是れ法を重くし先と為ざるはなし。此の如き大心の行者は法滅の音を聞くに、幾許ぞ患いと為んや。發心の中において、堅固の因縁と為す、良に所以あるかな。是の故に仏法滅時までと雖も、發心の人あらば、尚お復繁興す。汝、我れと共に惡世に生在して、見聞する所、唯、法滅の相あり。此れに縁りて發心せずとは、何ぞ其れ悲しきかな。設い汝、木石に類すと雖も、有心の人の為に、此の不忍の言を出すことなけれ。又設い教法なしと雖も、見聞敬養の益、是れ十門性起功德の中に、第十門性起功德なり。彼の見聞境界種類(仁本「信」の字あり)無辺なり。或いは形像を供(仁本「供」の字「信」)え、或いは遺跡を敬う、其の善は皆性起の法門にあらざることなし。然れば如來の遺跡、処処に之あり。或いは盤石上の千輪は光を耀かし、或いは經の行跡華文は異を標わす。しかのみならず五百塵点往劫の行事、今にありて炳然たり。薩・の身を捨つる流血は尚お存す。達拏が子に与うる杖捶は跡を留む。髪を布き泥に掩わるるの所、身を捨て偈を求むるの地、月光首を斬り、尸毘鷹を飼う。此れ等の遺蹤は五天に弥綸す。外道の凶人に鑿削あり、其の文復(底本・仁本

首、尸毘飼鷹。此等遺蹤彌綸於五天。外道凶人有鑿削、其文復。〔底本・仁本附訓「カヘテ」、活本「復」現。若有「投」江河、還來「本」処。水火不「焚漂」、風災不「破壞」、久留「後代」、永為「衆生帰仰」。皆是如來隨染業幻自然大用也。若約「衆生」、為「衆生縁感之功徳」。若約「如來」、為「如來性起之大用」。縁性無二、終同「法界」。無「作者」無「成者」、法性隨縁甚深不思議応用也。

是故信「仰遺跡」之人、得「如來愛子名」、復有「見仏吉慶」。又為「現世明澄」、又号「當來導師」。如「宝積經」云。我之所愛子、謂「諸善比丘」、見「仏所遊方」、昔曾安止処、經行宴坐地、若石及空閑、集已共咨嗟、為「之數涕泣」。〔乃至〕時往「道場中最勝菩提地」、同來共集会、當「如理思惟」。世尊於「是処」成「無上仏果」。〔乃至〕七日跏趺坐、諦觀「菩提樹」。〔乃至〕是等照「世燈」、〔乃至〕當「成」大覺尊。〔乃至〕我說「誠実言」、安「慰如」是輩、彼雖「不見」仏、而「与」見「仏同」。〔已上〕辺地衆生雖「行而不」見、尚有「恋慕思」者、即是為「如來愛子」。覺王「処」於「中国」、垂「聖化」於「辺方」。我等為「如來愚子」、何作「過分思」乎。雖「於」三藏教法論興廢不同、未「云」於「此等大用無」益乎。如「彼」三「道宝階没」地、竜窟「眞影難」見者、宝階「約」一時化儀、眞影為「惡竜」留之。未「必」為「通相方便」。機根有「兼正」、化儀有「隱顕」、莫「以」之例「余耳」。此等豈非「菩提心勝縁」乎。汝強於「末世」立「菩提心無縁義」、無「情」之至、不可説不可説也。

又汝勸「菩提心經滅時」、殊撥「菩提心」。見「出生菩提心經所説」、汝之言殊難「忍」。如「彼經説」。比丘「樂」蘭若、手得「此經典」、於「後常」現前。比丘聞「此經」、悲泣而雨「涙」。我先作「何業」、今世得「此利」。我於「如」是經、未「曾」善思惟。我已得「授記」、何業獲「此果」。文。此中我已得授記者、上文授記云、所「聞」此經者、今現在「我前」、彼等於「後世」、此經當「現前」。文。解曰、仏智知「三際無障礙」、悉皆如「現在」。於「如來滅後」、衆「欲」此經「人」、無礙智前現在「仏前」。此經於「滅後」、亦當「現」前於「彼人前」。比上文又説、得「聞」此經者、到「六度彼岸」。此經典、於「如來滅後」、入「彼人」之手。即經云、説「此修多羅」、令「発」大菩提。〔上文云、道於「道無」有「差別」。〔已上〕若有「

*399上

附訓「カヘテ」、活本「復」現ず。若し江河に投ずるあらば、還りて本処に来る。水火焚漂せず、風災破壊せず、久しく後代に留め、永く衆生の帰仰と為る。皆是れ如來の隨染業幻自然の大用なり。縁性無二にして、終に法界に同ず。作者なく成者なく、法性隨縁甚深不可思議の応用なり。

是の故に遺跡を信仰するの人、如來の愛子の名を得、復見仏の吉慶あり。又現世の明灯と為し、又當來の導師と号す。『宝積經』に云うが如し。「我が所愛の子、諸の善比丘に謂う、仏所の遊方、昔曾の安止の処、經行宴坐の地、若しは石及び空閑を見て、集り已りて共に咨嗟せん、之が為に數しば涕泣す。〔乃至〕時に道場の中の最勝菩提地に往き、同じく來たり共に集会して、當に理の如く思惟すべし。世尊は是の処において無上仏果を成じたまう。〔乃至〕七日跏趺坐して、諦らかに菩提樹を觀ず。〔乃至〕是れ等の世を照す灯、〔乃至〕當に大覺尊を成ずべし。〔乃至〕我れ誠実の言を説きて、是の如き輩を安慰す、彼れ仏を見たてまつらずと雖も、而も仏を見たてまつると同じ。〔已上〕辺地の衆生は行じて見ずと雖も、尚お恋慕の思ひあるは、即ち是れ如來の愛子と為す。覺王の中国に処して、聖化を辺方に垂る。我等は如來の愚子なれども、何ぞ過分の思ひを作さんや。三藏の教法において興廢の不同を論ずと雖も、未だ此れ等の大用において益なしと云わず。彼の三「道宝階」の地に没するに、竜窟の眞影の見難きが如きは、宝階は一時の化儀に約し、眞影は惡竜として之を留む。未だ必ずしも通相の方便と為さず。機根に兼正あり、化儀に隱顕あり、之を以て余を例とすることなかれ。此れ等は豈に菩提心の勝縁にあらずや。汝、強ちに末世において菩提心無縁の義を立てたり。情なきの至り、不可説なり、不可説なり。

又、汝は菩提心經の滅時を勸え、殊に菩提心を撥す。『出生菩提心經』の所説を見るに、汝の言は殊に忍び難し。彼の經に説くが如し。「比丘、蘭若を樂い、手に此の經典を得て、後において常に現前せん。比丘、此の經を聞き、悲泣して涙を雨さん。我れ先に何の業を作して、今世に此の利を得んや。我れ是の如き經において、未だ嘗つて善く思惟せず。我れ已に授記を得、何の業か此の果を獲んや。」文。此の中に「我れ已に授記を得」とは上文の授記に云く、「此の經を聞かざる者は、今、現に我が前にあり、彼等の後世において、此の經當に現前すべし」と。文。解して曰く、仏智は三際を知ること障礙なし、悉く皆現在の如し。如來の滅後において、此の經を樂欲せん人、無礙智の前に現じて仏前にあり。此の經、滅後に、亦當に彼の人の前に現前すべし。此の上の文に又説けり、此の經を聞くことを得る者は、六度の彼岸に到る。此の經典、如來の滅後において、彼の人の手に入れり。即ち『經』に云く、「此の修多羅を説きて、大菩提を發さしめん」と。〔上の文に云く、道は道において差別あることなし。已上。若し

差別者、雖不起菩提心、可有成仏人、無此理故、成仏法必須發菩提心。經說此無二菩提心、為一道故、聞說此經、發菩提心也。梵志、(指迦葉婆羅門) 仏菩提未會有分別。菩提無相故也。說此修多羅、令發大菩提。准上可知。能斷一切疑、隨順衆生問。

(衆生不知上無二道義。是故有一切疑。今說一道義、令斷之也。是故此一道隨順迷執衆生說也。乃至) 得聞此經者、彼於未來世、能行大布施、至於檀彼岸。(既發一道心故、須修一道行。其一道行、究竟有布施等六度彼岸。依聞此經、皆究竟之也。已下五度經文略之。已曾作供養。上供諸仏。憐愍衆生者。下愍衆生。得開此經典、後世到其手。此大人於如來滅後、愛敬此經典也。比丘住蘭若、意欲仏菩提。厭六塵喧雜、愛寂靜練若、欲樂無上菩提也。得聞此經者、於後最先得。依聞信此經、於滅後、最先得仏菩提也。過去數億仏、已持此經典。如文可知。為利諸菩薩、發起意欲故。聞此經一道義、欲樂菩提故。若有婆羅門欲樂仏菩提、彼時得信己、是經至其手。愚人難信此經。有欲樂者、是智人故、出沙門婆羅門二人。理實撰一切信樂人。是故下文出女人。彼人聞此經、生信欲。此經至其人手住也。我、仏也。見彼衆生、(仏限見於滅後信欲此經衆生形也。) 悉知彼所行、(仏智知信樂此經衆生受持誦誦等所行也。) 亦知彼名字、(仏智知信樂此經衆生名字也。) 我見悉無礙。(結上文也。舉眼見撰智照也。)

一切願具說、(信欲此經衆生、欲仏菩提、修六度行大願等也。此又結上文也。於二句中、上句結我見彼衆生等三句、下句惣結上文也。恐迷未來人、懼彼起諸過、(如來懼滅後愚人迷此經一道義作異見過。即如汝等捨菩提心立別念仏心等者、是即失此經所說一道義也。是故少分說。重惣結上諸義也。)

解曰、汝非唯愛樂此經、反失無二道義。然者終不可到六度彼岸、二転妙果期何時乎、可悲可悲矣。經又云、彼等(指上樂欲此經人也) 住此智。(愚人難生樂欲。生樂欲人、即是智人故也。此智者即知此一道之智也) 為誰之所說。(一切世間中、無如仏世尊知彼人(仁本なし) 所行名字人。若我不說者、為誰人所

*349下

差別あらば、菩提心を發さずと雖も、成仏の人あるべし、此の理なき故に、成仏の法は必ず須く菩提心を發すべし。經に此の無二菩提心を説きたまいて、一道と為すが故に、此の經を説くを聞き、菩提心を發すなり。梵志、(迦葉婆羅門を指す) 仏菩提、未だ曾つて分別あらず。(菩提は無相の故なり) 此の修多羅を説きて、大菩提を發さしむ。(上に准じて知るべし) 能く一切の疑を斷じて、衆生の問いに隨順す。(衆生は上の無二道の義を知らず。是の故に一切の疑あり。今、一道の義を説きて、之を斷たしむるなり。是の故に此の一道は迷執の衆生に隨順する説なり) (乃至) 此の經を聞くことを得る者は、彼れ未來世において、能く大布施を行じ、檀彼岸に至る。(既に一道心を發す故に、須く一道の行を修すべし。其の一道の行、究竟して布施等六度の彼岸あり。此の經を聞くに依りて、皆之を究竟するなり。已下五度の經文之を略す) 已に曾つて供養を作す。(上に諸仏に供う) 衆生を憐愍する者なり。(下に衆生を愍れむ) 此の經典を聞くことを得て、後世に其の手に到る。(此の大人は如來の滅後において、此の經典を愛敬するなり) 比丘、蘭若に住して、意に仏菩提を欲す。(六塵の喧雜を厭い、寂靜の練若を愛し、無上菩提を欲樂するなり) 此の經を聞くことを得る者は、後において最も先に得。(此の經を聞信するに依りて、滅後において、最も先に仏菩提を得るなり) 過去數億の仏、已に此の經典を持つ。(文の如く知るべし) 諸の菩薩を利して意欲を發起せる故に。(此の經の一道の義を聞き、菩提を欲樂する故に) 若し婆羅門ありて仏菩提を欲樂せば、彼れ時に信を得已りて、是の經其の手に至る。(愚人は此の經を信欲し難し。欲樂ある者、是れ智人の故に、沙門・婆羅門の二人を出す。理は實に一切の信樂の人を撰するなり。是の故に下の文に女人を出す。彼の人は此の經を聞き、信欲を生ず。此の經其の人の手に至り住まるなり) 我れ、(仏なり) 彼の衆生を見て、(仏の眼に滅後において此の經を信欲する衆生の形を見ぞなわす) 悉く彼の所行を知り、(仏智は此の經を信樂する衆生の受持誦誦等の諸行を知ろしめすなり) 亦彼の名字を知り、(仏智は此の經を信樂する衆生の名字を知ろしめすなり) 我れ見ること悉く無碍なり。(上の文を結ぶなり。眼見を挙げ智照を撰するなり) 一切の願を具さに説く、(此の經を信欲する衆生、仏菩提を欲して、六度の行を修する大願等なり。此れ又上の文を結ぶなり。二句の中において、上の句は我見彼衆生等の三句を結ぶ、下の句は上の文を惣結するなり) 恐らく迷いの未來の人、彼の諸の過を起すを懼る、(如來は滅後の愚人の此の經一道の義に迷いて異見の過を作すを懼れたまう。即ち汝等が菩提心を捨てて別して念仏心を立つる等の如きは、是れ即ち此の經の所說の一道の義を失するなり) 是の故に少分に説く」と。(重ねて上に諸の義を惣結するなり)

解して曰く、汝は唯、此の經を愛樂せざるのみにあらず。反つて無二道の義を失せり。然れば終に六度彼岸に到らず、二転の妙果、何れの時をか期するや、悲しむべし、悲しむべし。『經』に又云く、「彼等(上に此の經を樂欲する人を指すなり) 此の智に住す。(愚人は樂欲を生じ難し。樂欲を生ずる人、即ち是れ智人の故なり。此の智は即ち此の一道を知るの智なり) 誰の為にか之を説かるや。(一切の世間の中に、仏世尊の如く彼の人(仁本「人」の字なし) 所行の名字を知る人なし。若し我れ説かざらば、誰の人の為に記せら

「記乎。」已知「彼心行」。〔世尊正知於「滅後樂」欲此經人心行也。〕我今當「記」彼。〔任「仏智所知」、當「授記」。上文既云「仏智欲人所行名字」。此一行文、結「彼前文」、生「後記別文」也。〕即世尊正授「記別」云、「所聞」此經者、今現在「我前」。彼等於「後世」、此經當「現前」。〔如上解可知。〕

*330上

若有「諸女人」、抄「写」此經典、「此經當」在「手」、能生「大菩提」。〔若有「生信樂」女人者、即此經典之主也。如「女人等」一切准知。〕我於「先」已說。〔指「上文」也。〕比丘樂「蘭若」、〔簡「有」邪求過「人」也。〕手得「此經典」、於「後常現前」。〔此經典於「女」〔仁本・活本「如」〕來滅後、至「無」邪求過之「比丘手」、常可「現前」也。〕比丘聞「此經」、悲泣而雨「沢」。〔此記「前練若比丘耽嗜此經」之形也。此即身業也。〕我先作「何業」、〔自「此」下六句、正記「比丘歡喜」之語也。此下文可「通」語意、具有「三業」可知之。即今世遇「此大利」、必依「宿善」也。〕今世得「此利」。〔此經所說善提心、一切知因故、云「利」也。如「經上文具說」。〕我於「如」是經、「未」曾善思惟。〔大「喜徹」骨作「希寄」〔仁本「奇」、活本「求」〕思也。〕我已得「授記」。〔指「上」今現在我前等文也。〕何業獲「此果」。〔前練若比丘、雖「恨」重障之身生「滅後」、得「此經典」、而感涙難「禁」、非「唯」所行名字聞「如來知見」、重障之身亦現在「仏前」。是雖「為」如來神力之所為、「定亦可」有「我善業」。多句經文、惣記「比丘歡喜踊躍之行相」也。〕

問曰、大菩提心、是為「諸仏」之一道故、信「樂」此經之人、即親屬「如來智身」故、非「云」今現在我前乎。何必可「云」滅後之凡身在「仏前」乎。答。不然。上文既云「我見彼衆生、悉知彼所行、亦知彼名字、我見悉無礙」、正授記時、云「今現在我前等」、即是在「仏前」也。如「彼蓮華面經」上卷說。告「阿難」言、汝今欲「見」未來事「不」、我見「來世」如「觀」現在。〔乃至〕爾時阿難作「如」是念、「以「仏力」故、可「令」我見「未來之世」如「是事」不。爾時如來以「神通力」、即令「阿難」悉見「未來諸惡比丘」、以「兒坐」膝、置「婦」其傍、「復見」種種「非法事」。爾時阿難見「此事」已、心大怖畏、身毛皆豎。即白「仏言」、世尊、如來速入「涅槃」。今正是時、何用見「此未來之世」如「是惡事」。〔已上〕此經說亦如是、滅後衆生樂「欲」此經人、正在「仏前」也。謹依「上下文意」、仰推「仏言」、於「如來滅後」、此經典流通。比丘獨

*330下

れんや。〕已に彼の心行を知れり。〔世尊は正しく滅後において此の經を樂欲する人の心行を知ろしめすなり。〕我れ今、當に彼を記すべし。〔仏智の所知に任せて、當に授記すべし。上の文に既に樂欲人所行名字を知ろしめすと云えり。此の一行の文、彼の前文を結び、後の記別の文を生ずるなり。〕即ち世尊、正しく記別を授けて云く、此の經を聞く者は、今、現に我が前にあり。彼等の後世において、此の經當に現前すべし。〔上の如く解して知るべし。〕若し諸の女人ありて、此の經典を抄写せば、此の經當に手にあるべし、能く大菩提心を生ず。〔若し信樂を生ずる女人あらば、即ち此の經典の主なり。女人等の如き一切准知す。〕我れ先において已に説けり。〔上の文を指すなり。〕比丘は蘭若を樂い、〔邪求の過ある人に簡ぶなり。〕手に此の經典を得、後において常に現前す。〔此の經典は女〔仁本「女」の字「如」〕來滅後において、邪求の過なき比丘の手に至り、常に現前すべきなり。〕比丘は此の經を聞き、悲泣して涙を雨さん。〔此れ前の練若比丘の此の經に耽嗜するの形を記するなり。此れ即ち身業なり。〕我れ先に何の業を作して、〔此れより六句、當に比丘の歡喜の語を記すなり。此の下の文は語意に通ずべし、具さに三業あり、之を知るべし。即ち今世に此の大利に遇う、必ず宿善に依るべきなり。〕今世に此の利を得ん。〔此の經の所説の善提心、一切智の因の故に、利と云うなり。經の上の文に具さに説くが如し。〕我れ是の如き經において、未だ曾つて善く思惟せず。〔大「喜徹」に徹り希寄〔寄〕の字、仁本「奇」活本「求」〕思ひを作すなり。〔我れ已に授記を得。〔上の今現在我前等の文を指すなり。〕何の業か此の果を獲んや。〔前の練若比丘、重障の身にして滅後に生るるを恨むと雖も、此の經典を得て、感涙難じ難し。唯、所行の名字の如來の知見に関わるにあらず、重障の身亦現に仏前にあり。是れ如來神力の所為と為すと雖も、定んで亦我が善業あるべし。多句の經文、惣じて比丘の歡喜踊躍の行相を記すなり。〕

問うて曰く、大菩提心、是れ諸仏の一道とする故に、此の經を信樂するの人、即ち親しく如來の智身に属する故に、今、現在の我れの前と云うにはあらざらん。何ぞ必ず滅後の凡身の仏前にありと云うべきや。答う。然らず。上文に既に我見彼衆生、悉知彼所行、亦知彼名字、我見悉無碍と云う。正授記の時に、今現在我前等と云う、即ち是れ仏前にあるなり。彼の『蓮華面經』上卷の説の如し。「阿難に告げて言わく、汝今、未來の事を見んと欲するや、不や、我れ來世を見て現在を觀るが如し。〔乃至〕爾の時に阿難、是の如き念を作さく、仏力を以ての故に、我れ未來の世に是の如き事を見せしめたまうべきや、不や。爾の時に如來、神通力を以て、即ち阿難に悉く未來の諸の惡の比丘を見せしめたまう、兒を以て膝に坐り、婦を其の傍に置き、復種種の諸の非法の事を見る。爾の時に阿難、此の事を見已りて、心に大いに怖畏し、身の毛皆豎つ。即ち仏に白して言わく、世尊、如來は速やかに涅槃に入りたまわん。今、正しく是の時なり、何を用ありてか此の未來の世の是の如き惡事を見せたまうや」と。〔已上〕此の經說亦是の如し、滅後の衆生の此の經を樂欲する人、正しく仏前にあるなり。謹んで上下の文意に依るに、仰いで仏言を推するに、如來滅後において、此の經典流通せん。比丘獨り練若に処して、適たま

如_レ練若_一、適得_レ此經典_一、見_レ所聞此經者_一、今現在我前、彼等於後世、此經當現前記文_一、比丘悲泣雨_レ淚、當言_レ、我已得_レ授記_一、何業獲_レ此果_一等。（為言）泣註_レ經文_一、筆跡忽如_レ暗。南無大恩教主釈迦牟尼世尊、南無諸部甚深菩提心經、願我縱雖_レ焦_レ洞燃猛火之炎_一、堅固寒氷之底_一、若有_レ口者、唱_レ此記文_一、若有_レ心者、念_レ此妙典_一。金口所_レ記、忝如_レ是。哀哉悲哉乎。汝雖_レ不加_レ悲泣隨喜之言_一、莫_レ作_レ滅時無益之論_一。滅時隔_レ乎數万億歲_一、經典當今住_レ世。若以_レ值遇_レ為_レ幸者、滅時亦值遇。汝不_レ然故、手触_レ卷軸_一、心不_レ生_レ樂欲_一。萌_レ仏樹芽莖_一、期_レ何時_一乎。

又此經典、弥陀願力加被、於_レ五濁惡世中_一得_レ聞。即如_レ經云_一。我昔婆羅門、依_レ於比丘_一活。時比丘、放逸、說_レ此修多羅_一。梵志於_レ彼聞、時至而乞食、泣淚已_一、行出。是時心作_レ願。我於_レ修多羅_一、抄_レ義及文字_一。後世作_レ証明_一、亦復行_レ擁護_一。以_レ彼善業果_一、於_レ彼後末世_一、得_レ此修多羅_一、執持在_レ其手_一。彼時有_レ比丘_一、悲泣淚滿_レ目。當時作_レ懺悔_一、後得_レ此經法_一、於_レ先業_一滅尽。彼時有_レ相現_一。於_レ其睡夢中_一、得_レ此修多羅_一、生死諸流轉、欺誑大恐怖、斯由_レ阿弥陀願力_一、如是果。文。解曰、二人悲泣、深起_レ值遇願_一、依_レ念願甚深_一、終得_レ此經法_一。彼依_レ自善根力_一、於_レ末世_一得_レ值遇_一。薄福衆生、生死流轉、欺誑大恐怖中、得_レ聞_レ此經_一、此由_レ阿弥陀願力_一也。加_レ是果者、如_レ二人依_レ願力_一得_レ開經果_一、諸衆生亦依_レ弥陀願力_一、於_レ末世大恐怖中_一、可_レ得_レ聞經果_一也。

問曰、見_レ經文相_一、非_レ指_レ上二人所得聞經果_一、云_レ依_レ弥陀願力_一乎。何作_レ此積_一乎。答。上二人中婆羅門者、即是釈迦如来因位也。不可_レ云_レ對_レ迦葉婆羅門_一之語_一。下文云_レ梵志於彼聞時至而乞食_一等者、梵志者即婆羅門、出_レ上能聞人_一也。然者弥陀如来、依_レ釈迦勸化_一、值_レ宝藏仏_一、發_レ菩提心_一。豈彼聞經果可_レ云_レ依_レ弥陀乎。是故當_レ知、言_レ如_レ我依_レ願力_一於_レ末世_一得_レ此經_一、未來末世衆生、依_レ弥陀願力_一、亦可_レ得_レ此經_一也。若設雖_レ言_レ結_レ上文_一、若言_レ末世得聞依_レ弥陀願力_一者、此亦可_レ同。然者感_レ弥陀願力_一時、同依_レ弥陀願力_一、可_レ聞_レ此經_一也。欺誑大恐怖者、出_レ末世感_レ遺法果_一衆生

此の經典を得て、「所聞此經者、今現在我前、彼等於後世、此經當現前記」の文を見て、比丘悲泣して涙を雨し、當に言うべし、「我れ已に授記を得て、何れの業か此の果を獲ん」等と。（為言）泣きて經文を註するに、筆跡忽ち暗きが如し。南無大恩教主釈迦牟尼世尊、南無諸部甚深菩提心經、願わくは我れ縱い洞燃猛火の炎に・かれ、堅固寒氷の底に閉らると雖も、若し口あらば、此の記文を唱う、若し心ある者は、此の妙典を念ぜん。金口の記する所、忝くも是の如し。哀しきかな、悲しきかな。汝は悲泣隨喜の言を加えずと雖も、滅時無益の論をなすことなかれ。滅時數万億歳を隔てて、經典當に今世に住す。若し值遇を以て幸いと為さば、滅時に亦值遇せん。汝は然らざる故に、手に卷軸に触るるも、心に樂欲を生ぜず。仏樹の芽莖を萌すこと、何れの時をか期せん。

又此の經典、弥陀の願力の加被によつて、五濁惡世中に聞くことを得。即ち『經』に云うが如し。「我れ昔婆羅門たりしに、比丘に依りて活く。時に比丘、放逸に、此の修多羅を説けり。梵志、彼において聞き、時に至りて乞食し、泣淚し已りて、行じて出でり。是の時に心に願を作さく。我れ修多羅において、義および文字を抄む。後世に証明と作りて、亦復擁護を行ぜん。彼の善業の果を以て、彼の後の末世において、此の修多羅を得て、執持して其の手にあり。彼の時に比丘あり、悲泣して、涙目に満つ。當に時に懺悔を作して、後に此の經法を得、先業において滅尽す。彼の時に相、現ずることあり。其の睡夢の中において、此の修多羅を得、生死の諸の流轉、欺誑の大恐怖、斯れ阿弥陀の願力に由りて、是の如く果さん」と。文。解して曰く、二人の悲泣、深く值遇の願を起こし、念願の甚深なるに依りて、終に此の經法を得。彼は自の善根力に依り、末世において值遇を得。薄福の衆生は、生死流轉して、欺誑大恐怖の中に、此の經を聞くことを得。此れ阿弥陀願力に由りてなり。是の如きの果は、二人とも願力に依りて聞經の果を得るが如し、諸衆生も亦弥陀願力に依りて、末世大恐怖の中に、聞經の果を得るべし。

問うて曰く、經文の相を見るに、上の二人の所得聞經の果を指して、弥陀の願力に依ると云うにあらず。何ぞ此の積をなすや。答う。上の二人中の婆羅門は、即ち是れ釈迦如来の因位なり。迦葉婆羅門に對しての語と云うべからず。下の文に「梵志於彼聞時至而乞食」等と云うは、梵志は即ち婆羅門、上の能聞の人を出すなり。然れば弥陀如来、釈迦の勸化に依りて、宝藏仏に値いて菩提心を發せり。豈に彼の聞經の果は弥陀に依ると云うべきや。是の故に當に知るべし、我れ願力に依りて末世に此の經を得る如きは、未來末世の衆生、弥陀願力に依りて亦此の經を得べきと云うなり。若し設い上の文を結すと云うと雖も、若し末世の得聞は弥陀の願力に依ると云うこと、此れ亦同じかるべし。然れば弥陀の願力を感ずる時に、同じく弥陀の願力に依りて、此の經を聞くべきなり。「欺誑大恐怖」は、末世に遺法の果を感ずる衆生の過を出すなり。『法華』に云うが如し、「恐怖惡世中」等と。又『大般若』に云うが如し、

過也。如「法華云」、恐怖惡世中等。又如「大般若云」、後五百歲無上
 正法、將欲壞滅時、有大恐怖、有大險難、有大暴惡、當於
 彼時、諸有情類、多分成就感遺法果等、諸經中有此文。良以
 阿彌陀大願中云「發菩提心修諸功德等」。若無「菩提心」着、往生淨
 土行難立。依此「彌陀願力」、為「增上緣」、留此經典、令「衆生勸
 發菩提心」也。彌陀教止「末世」、良有「所由」乎。以此而言、若此經
 亦法滅時可言「止住」乎。何者、止住百歲文、雖「依」積尊慈悲、法
 滅時衆生、往「生淨土」、亦依「彌陀願力」也。若爾者、既依「彌陀願
 力」、於「末世」聞此經、二俱依「願力」者、此經何不至「法滅時」乎。
 經道流布時、何必限「彌陀願力」彼「願力」者、出「難聞時」也。
 下經文云「於後當顯曜者」、此經依「彌陀願力」、於「末世」顯曜也。

問曰、無量壽經云、特留此經、止住百歲。文。若兼「余經」着、
 不可云「特留小知何」。答。教体無相、何滯「卷軸」而君依「彌陀願力」
 而留者、即是彌陀一教止住也。更勿守「卷數加減」。何必立「余經
 名」乎。但此義不「必定執」。若非「道理」者、且為「汝非理執」、我
 亦致「非理難」。是為「婆娑論」一問答例法。尽「理妙術」、顯「義方軌」也。
 苦彼此俱非「實義」者、其得失如何。謂若以「滅為留」、我有「遊心
 之得」、亦有「勇」有人「之益」。若以「留為滅」、汝有「無情之慳」、亦
 深法非「我分」。經既云「斯由阿彌陀願力如是果」。汝為「西方導師」者、
 須「顯揚此經典」。然抑「諸人欣樂心」、此豈非「違害彌陀願力」乎。
 悲哉悲哉。聞「比丘聞此經悲泣而雨淚等金言」、雖「破戒質」、悲淚洗
 面、雖「無漸心」、歡喜刺身。汝對「此經」、強勸「滅時損益」、為「有
 何詮」乎。無「情之至」、不可「稱計」。設雖「師子虎狼」、聞「此金言」、
 蓋「仁本・活本」蓋「生哀悲」乎。此事匪「直爾」也。設雖「汝自不
 覺悟」、決定被「執縛天魔」、出此不忍之言也。即如「此經言」、爾時
 迦葉婆羅門復白「仏言、希有世尊、若諸衆生無「有智慧」、若聞「如
 是無上無辺」、乃至如「是等衆生當無「有智慧」、若如「是等無辺無
 上修多羅聞已、不能於「此法中不「生堅固樂欲」。大徳世尊、有
 何因縁」、既有「如是妙法」。然彼衆生而當「虚過」也。爾時「仏告」彼婆
 羅門「言、此三千大千世界、有「百俱致（凡言俱致者隨數千万）」諸魔宮

*31下

「後の五百歳に無上の正法、將に壞滅せんと欲する時、大恐怖あり、大險難あり、大暴惡あり、當に彼
 の時に當りて、諸の有情の類、多分に遺法を感じる果を成就せん」等と、諸經の中に此の文あり。良に
 以て阿彌陀大願中に「發菩提心修諸功德」等と云えり。若し菩提心なくば、往生淨土の行は立て難し。
 此れに依りて彌陀の願力を、増上縁と為して、此の經典を留めて、衆生をして發菩提心を勧めしむるな
 り。彌陀の教を末世に止める、良に所由あるか。此を以て言わく、若し此の經、亦法滅時に止住と言
 うべきか。何者か、止住百歳の文、釈迦の慈悲に依ると雖も、法滅時の衆生、淨土に往生するは、亦彌陀
 の願力に依るなり。若し爾れば、既に彌陀の願力に依りて、末世に此の經を聞くこと、二つ俱に願力に
 依るは、此の經何ぞ法滅時に至らざらんや。經道流布の時に、何ぞ必ず彌陀の願力に限りて彼の願力に
 依ることは、聞き難き時を出すなり。下の經文に「於後當顯曜」と云うは、此の經は彌陀の願力に依り
 て、末世に顯曜するなり。

問うて曰く、『無量壽經』に云く、「特に此の經を留むること、止住百歲せん」と。文。若し余經を兼
 ぬるは特留と云うべからず、いかん。答う。教体は無相なり、何ぞ卷軸に滯こおらん。若し彌陀の願力
 に依りて而も留むるは、即ち是れ彌陀一教の止住なり。更に卷數の加減を守るべからず。何ぞ必ず余經
 の名を立てんや。但し此の義は必ずしも定んで執せず。若し道理にあらずば、且く汝が非理執に對して、
 我れ亦非理の難を致さんとす。是に『婆娑論』の一問答の例法を為さん。理を尽くすの妙術、義を顯わ
 すの方軌なり。若し彼此俱に實義にあらずば、其の得失いかん。謂く、若し滅を以て留と為さば、我れ
 遊心の得あり、亦行人を勇むの益あり。若し留を以て滅と為さば、汝に情なきの・あり、亦深法我が分
 にあらず。經に既に「斯由阿彌陀願力如是果」と云う。汝、西方導師ならば、須く此の經典を顯揚すべ
 し。然るに諸人の欣樂心を抑う、此れ豈に彌陀の願力を違害するにあらずや。悲しきかな、悲しきかな。
 「比丘聞此經悲泣而雨淚」等の金言を聞きて、破戒の質と雖も、悲涙して面を洗う、無慚の心なりと雖
 も、歡喜身に刺る。汝は此の經に對して、強ちに滅時の損益を勸う、何の詮かありとするや。情なきの
 至り、稱計すべからず。設い師子虎狼と雖も、此の金言を聞かば、蓋（仁本・活本「蓋」）し哀悲を生
 ぜん。此の事は直爾を匡すなり。設い汝自ら覺悟せずと雖も、決定して天魔に執縛せられて、此の不忍
 の言を出すなり。即ち此の經言の如し、「爾の時に迦葉婆羅門、復仏に白して言さく、希有なるかな世
 尊、若し諸の衆生に智慧あることなきに、若し是の如き無上無辺を聞く、乃至是の如き衆生等は當に智
 慧あることなかるべきに、若し是の如き等の無辺無上の修多羅を聞き已りて、此の法の中において堅固
 の樂欲を生ぜざる能わず。大徳世尊、何の因縁ありてか、既に是の如き妙法あらん。然るに彼の衆生、
 而も當に虚しく過ぐべきや。爾の時に仏、彼の婆羅門に告げて言わく、此の三千大千世界に、百俱致（凡
 そ俱致と言うは數千万に隨う）の諸の魔の宮殿あり、彼の一一の魔、俱致數の魔衆眷屬あり、彼の諸の

*31上

殿、彼一魔、有俱致數魔衆眷屬、困遶彼諸魔軍。常勤方便、欲滅此經、作種種因緣。彼因緣隨所在處、作諸障礙。所以者何、若以三千大千世界所有衆生、悉得於阿羅漢果、若有善男子善女人、聞此修多羅已、當發阿耨多羅三藐三菩提心。婆羅門以是因緣、令俱致數諸魔勤求方便、欲滅此經。所以者何、此修多羅、是一切諸法種性根本。以是義故、俱致諸魔、勤求方便、欲滅此經。〔已上〕解曰、此中言皆悉得於阿羅漢果者、小乘極果聖者、指難發大乘菩提心人也。設三千大千界衆生、皆悉雖証此小果、聞此經者、可發大乘菩提心。以有此功力故、諸魔依障礙菩提心、將破滅此經也。此經即菩提心經根本也。婆羅門請問語云、有何因緣、既有如是妙法、然彼衆生而當虛過也。文。次仏答如此、汝為仏弟子、何無樂欲、然作此說。即如經說、被迷亂彼俱胝數魔儻也。此經不待法滅時、依汝邪言速可滅。雖然如來為防此障難、說破魔衆會陀羅尼、加持之。即如此經云、爾時仏告婆羅門、今有修多羅、名曰破魔衆會。汝等受持誦誦、即得破魔天衆會。〔乃至〕爾時世尊、即說陀羅尼曰云云。當知、汝雖作邪說、此經典不滅者、依此陀羅尼威力也。今為加持汝魔縛故、雖須唱陀羅尼、其秘密章句、不可不密。若不傳受灌頂阿闍梨、而自誦誦之、師弟俱得重罪。恐男子女人輒誦誦故、不出之。如來既云知樂欲人所行名字、亦可知不樂欲人所行名字。為防彼障難說陀羅尼。當今男子女人、須持念此陀羅尼也。汝既有此大過、聖道淨土二門行者、先須遠離汝。次可棄捨此選択集也。從此第五、破菩提心云抑念仏過者、集曰、

*32下

魔軍を圍繞す。常に方便を勤めて此の經を滅せんと欲して、種種の因縁を作す。彼の因縁の所在の処に隨いて、諸の障礙を作す。所以は何ん、若し三千大千世界の所有の衆生を以て、悉く阿羅漢の果を得、若し善男子善女人ありて、此の修多羅を聞き已りて、當に阿耨多羅三藐三菩提を發すべし。婆羅門、此の因縁を以て、俱致數の諸の魔に方便を勤求せしめ此の經を滅せんと欲せしむ。所以は何ん、此の修多羅、是れ一切の諸法、種性の根本なり。此の義を以ての故に、俱致の諸魔、方便を勤求して、此の經を滅せんと欲す。と〔已上〕解して曰く、此の中に皆悉得於阿羅漢果と言は、小乘の極果の聖者、大乘の菩提心を發し難き人を指すなり。設い三千大千界の衆生、皆悉く此の小果を証すと雖も、此の經を聞く者は、大乘の菩提心を發すべし。此の功力あるを以ての故に、諸魔の菩提心を障礙するに依りて、將に此の經の破滅せんとするなり。此の經は即ち菩提心經の根本なり。婆羅門の請問の語に云く、「何の因縁ありてか、既に是の如きの妙法をあり、然れば彼の衆生は而るに當に虚しく過ぐべきや」と。文。次に仏の答えたまふこと此の如し、汝は仏弟子と為ば、何ぞ樂欲なからん、然るに此の說を作す。即ち經の說の如し、彼の俱・數の魔儻に迷亂せらるるなり。此の經は法滅の時を待たず、汝の邪言に依りて速やかに滅すべし。然りと雖も如來は此の障難を防がん為に、破魔衆會陀羅尼を説き、之を加持したまう。即ち此の經に云うが如し、「爾の時に仏、婆羅門に告げたまわく、今、修多羅あり、名けて破魔衆會と曰う。汝等受持誦誦して、即ち魔天衆の會を破すを得べし。〔乃至〕爾の時に世尊、即ち陀羅尼を説きて曰く」と云云。當に知るべし、汝は邪說を作すと雖も、此の經典の滅せざるは、此の陀羅尼の威力に依るなり。今、汝が魔縛を加持せん為の故に、須く陀羅尼を唱うべきと雖も、其の秘密章句、密さざるべからず。若し灌頂阿闍梨に伝受せして、而も自ら之を誦誦せば、師弟は俱に重罪を得。男子・女人の輒誦誦を恐るる故に、之を出さず。如來、既に樂欲人所行の名字を知らしめすと云えり、亦樂欲せざる人の所行の名字を知るべし。彼の障難を防がん為に陀羅尼を説く。當今の男子・女人、須く此の陀羅尼を持念すべきなり。汝は既に此の大過あり、聖道・淨土の二門の行者、先に須く汝を遠離すべし。次に此の『選択集』を棄捨すべきなり。

此れより第五に、菩提心は念仏を抑うと云う過を破するに、『集』に曰く、

釈尊定散の諸行を付屬したまわず、唯、念仏を以て、阿難に付屬したまうの文

『觀無量壽經』に云く。「仏阿難に告げたまわく。汝好く是の語を持て。是の語を持てといは、即ち是れ無量壽仏の名を持てとなり」と。

同じき經の『疏』に云く。「仏告阿難汝好持是語より已下は、正しく弥陀の名号を付屬して、退代に流通すること明す。上來定散兩門の益を説くと雖も、仏の本願の意を望まんには、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を稱するにあり」と。

私云、○次散善中有「大小持戒行」、世皆以為、持戒行者、是入真要也。破戒之者、不可「往生」。又有「菩提心行」人皆以為、菩提心是淨土綱要。若無「菩提心者」、即不可「往生」。又有「解第一義行」、此是理觀也。人亦以為、○若無「理觀者」、不可「往生」。又有「誦誦大乘行人」皆以為、誦誦大乘經、即可「往生」。若無「誦誦行人者」、不可「往生」。○凡散善十一人皆雖「貴」、而於「其中」、此四箇行、當世之人、殊所欲之行也、以「此等行」、殆抑「念仏」。(已上集文。)

決曰、先須「辨定念仏定散義」。問曰、依「善導意」、今所言念仏者、為「是定善」、亦為「散善」耶。設爾何失、兩方俱不審。若云「為定善者」、觀經疏、以「十三定觀」名「定善」、以「三福九品」名「散善」。於「彼九品中」、所說「稱名行」也。豈為「定善」乎。若云「為散善者」、善導解、引「文殊般若經」等文、多為「定善」加行、稱名純熟位、必可得「心念成熟」故。又觀經并觀「念仏三昧經」等、觀「念仏三昧」、念「念仏三昧」、其體是無「差別」。善導解、亦以同之。又善導於「稱名行」立「念仏三昧名」、何可「成立」耶。答。立「念仏三昧名者」、是名「於定善」也。然稱名者、是念「念仏三昧」加行也。雖「稱名位」是為「散善」、從「根本」立「名」、云「念仏三昧」也。是故從「其根本」言之、撰「定善」也。惣分「別定散」、有「四句」。一「唯散非定」、謂世間孝養父母等善、乃至出世禮仏造塔等善。二「唯定非散」、謂諸定根本心。三「有通定散」、謂諸定加行善。四「非定善非散善」、謂不善無記法是也。於「此中」、就「諸善」分「別其品類」、有「定散二位」。以「唯定不通散善」、名「定善」。以「唯散不通定善」、名「散善」。雖「稱名通二位」、定善為「勝」。以「其根本是定」故、撰「定善」名「念仏三昧」也。其義如「第一門決說」。但疏九品散善中列之者、約「下輩臨終稱名人」、不論「根本得定義」、唯取「至心稱名義」。此約「人位」取「散善義」。若約「善體者」、是撰「定善」也。是故觀經疏第四散善義云、五從「若念仏者」下、至「生諸仏家」已來、正顯「念仏三昧功能超絶」、實非「雜善得レ為レ比煩」云云。此中既於「散善義中」、立「三昧名」。此約「善體」立「名」也。此義如「禮讚等積」、於「第一門決」之。約「人位」取之、終「不發定心」故、撰「散善」也。

*33上

私に云く、○次に散善の中に、大小持戒の行あり、世皆おもえらく、持戒の行は是れ入真の要なり、破戒の者は往生すべからずと。又菩提心の行あり。人皆おもえらく、菩提心は淨土の綱要なり、若し菩提心なくば、即ち往生すべからずと。又解第一義の行あり。此は是れ理觀なり。人亦おもえらく、○若し理觀なくば、往生すべからずと。又誦誦大乘の行あり。人皆おもえらく、大乘經を誦誦して、即ち往生すべし、若し誦誦の行なくば、往生すべからずと。○凡そ散善の十一人、皆貴しと雖も而も其の中心において、此の四箇の行は、當世の人、殊に欲する所の行なり。此等の行を以て、殆ど念仏を抑う。(已上「集」の文)

決して曰く、先ず須く念仏定散の義を弁定すべし。問うて曰く、善導の意に依るに、今、言うところの念仏は、是れ定善とやせん、亦散善とやせん。設し爾れば何れの失、兩方俱に不審なり。若し定善と為すと云わば、『觀經疏』は十三定觀を以て定善と名け、三福九品を以て散善と名く。彼の九品の中に於いて、稱名の行を説く所なり。豈に定善とせんや。若し散善と為すと云わば、善導の解に『文殊般若經』等の文を引き、多く定善の加行と為す、稱名の純熟位、必ず心念の成熟を得べきが故に。又『觀經』并に『觀念三昧經』等、觀念三昧、念念三昧、其の體是れ差別なし。善導の解、亦以て之と同じ。又善導は稱名行において念念三昧の名を立つ、何ぞ成立すべきや。答う。念念三昧の名を立つるは、是れ定善に名くるなり。然れば稱名は、是れ念念三昧の加行なり。稱名の位は是れ散善と為すと雖も、根本に從りて名を立て、念念三昧と云うなり。是の故に其の根本に從りて之を言わば、定善に撰するなり。總じて定散を分別するに四句あり。一には、唯、散にして定にあらざ、謂く世間の孝養父母等の善、乃至出世の禮仏・造塔等の善なり。二には、唯、定にして散にあらざ、謂く諸定の根本心なり。三には、定散に通じてあり、謂く諸定の加行善なり。四には、定善にあらざ散善にあらざ、謂く不善無記の法是れなり。此の中において諸善に就いて其の品類を分別するに、定散の二位あり。唯、定にして散に通ぜざる善を以て、定善と名く。唯、散にして定に通ぜざる善を以て、散善と名く。稱名は二位に通ずと雖も、定の義を勝と為す。其の根本は是れ定なるを以ての故に、定善に撰して念念三昧と名くるなり。其の義は第一門の決説の如し。但し『疏』の九品散善の中に之を列ぬるは、下輩臨終の稱名人に約して、根本得定の義を論ぜず、唯、至心稱名の義を取るのみ。此れ人位に約して散善の義を取れり。若し善體に約せば、是れ定善に撰するなり。是の故に『觀經疏』第四の散善義に云く、「五に若念仏者より下、生諸仏家に至る已來は、正しく念念三昧の功能超絶して、實に雜善をして比類と為すを得るにあらざることを頭わす」と云云。此の中に既に散善義の中において、三昧の名を立て、此れ善體に約して名を立てるなり。此の義は『禮讚』等の積の如し、第一門において之を決す。人位に約して之を取るは、終に定心を發さざる故に、散善の中に撰するなり。

*33下

問。言三昧者、具名三摩地。光法師俱舍論記云、梵名三摩地、此云等持、通定散通三性云云。爾者、依云三昧、不可必為定善。況散善中出之。明知稱名唯為散善。何以定善可言為本乎。答。凡言三昧者、其義非一途。如汝所出光法師積、通定散通三性。雖然光師解積、唯取大地法中三摩地心所為本故、其体不通慧心所等。然此三昧名字、亦有以慧為本。華嚴經中、天鼓為兜率天子說法中云、如我天鼓不生不滅、色受想行識亦復如是。汝等若能於此悟解、心知則入無依智印三昧。疏積云、言無依印者、既悟解無生、則能所双絶、儼然摩挲故、曰無依。以斯智印、印定方法不收不撰。任心自安故、稱三昧。〔已上〕如此例非一。

又於念仏名言、有各種義。或念仏名字、或念仏相好、或念光明、或念本願等、如諸經說。雖有如此語義不同、依善導御意、以稱名念仏三昧者、源依定善也。何以得知、往生禮讚等中、引文殊般若經等、取定心加行稱名。又觀經、說像觀真身觀等、名念仏三昧。善導觀經疏、因此義便、多明稱名功德、又引華嚴經功德雲比丘所得念仏三昧文、明念仏功德。明知是以根本定心為本也。若不爾者、所引証拠等、皆不可成立。是以觀經疏第一、云雖言未証。〔前第一門決引之。未証之言、指定心根本也。又觀念法門、明見仏浄土三昧増上縁義中云、如此想者、名為粗見。此謂覺想中見故、云粗見。若得定心三昧及口稱三昧者、心眼即開、見彼浄土一切莊嚴等云云。此中既粗見覺想外、口稱三昧成就、心眼見浄土前、影像成就也、此本質成就也。前加行成満、此根本成満也。又處處示念仏行儀、皆修定方法也。謂令止余縁者、多是修禪軌則也。謂修禪要法、必須正其方法一心一境為先。若其方法不正、是為邪觀。若雜縁、難得一心。若得与正境合一心相応、信敬漸愧転多、名利貪愛稍輕。不待順次、法利且先。雖在生死、漸異凡心。華相既現前。果報何有疑。此誠策初心秘要也。若相翻此者、其行可為虚偽。雜縁乱動、失正念、与仏本願不相応、何得

問う。三昧と言うは、具さに三摩地に名く。光法師の『俱舍論記』に云く、「梵に三摩地と名く、此に等持と云う、定散に通じ三性に通ず」と云云。爾れば、三昧と云うに依りて、必ずしも定善と為すべからず。況んや散善の中に之を出す。明らかに知りぬ、稱名は唯、散善と為す。何ぞ定善を以て本と為すと云うべきや。答う。凡そ三昧と言うは、其の義は一途にあらず。汝が出す所の光法師の積の如きは、定散に通じ三性に通ず。然りと雖も光師の解積、唯、大地法の中の三摩地的心所を取りて本と為す故に、其の体は慧心の所等に通ぜず。然るに此の三昧の名字、亦慧を以て本と為す。『華嚴經』の中に、天鼓の兜率天子の為に法を説く中に云く、「我が天鼓は不生不滅の如し、色受想行識も亦復是の如く不生不滅なり。汝等若し能く此れにおいて解悟せば、心知るべし、則ち無依智印三昧に入る」と。『疏積』に云く、「無依印と言うは、既に無生を悟解し、則ち能所双びに絶し、儼然として拠なき故に、無依と曰う。斯の智印を以て、方法に印定して収めず、撰せず。任心に自ずから安んずる故に、三昧と稱すと。〔已上〕此の如きの例は一にあらず。

又念仏の名言において、各種の義あり。或いは仏の名字を念ず、或いは仏の相好を念ず、或いは光明を念ず、或いは本願を念ず等、諸經の説の如し。此の如きの諸義の不同ありと雖も、善導の御意に依るに、稱名を以て念仏三昧に名くるは、源は定善に依るなり。何を以て知ることを得るとならば、『往生禮讚』等の中に、『文殊般若經』等を引きて、定心の加行の稱名を取れり。又『觀經』に、像觀・真身觀等を説きて、念仏三昧と名く。善導の『觀經疏』に、此の義便に因りて、多く稱名の功德を明かす、又『華嚴經』功德雲比丘所得の念仏三昧の文を引きて、念仏の功德を明かせり。明らかに知りぬ。是れ根本の定心を以て本と為すなり。若し爾からずば、引く所の証拠等、皆成立すべからず。是を以て『觀經疏』の第一に、「雖言未証」と云えり。〔前の第一門に決して之を引くが如し。〕「未証」の言、定心の根本を指すなり。又『觀念法門』に、見仏浄土三昧増上縁の義を明かす中に云く、「此の如き想は、名けて粗見と為す。此れ謂く覺想の中の見なるが故に、粗見と云う。若し定心三昧および口稱三昧を得る者は、心眼即ち開け、彼の浄土の一切の莊嚴を見たてまつる」と云云。此の中に既に粗見は覺想の外、口稱三昧の成就は、心眼に浄土を見たてまつる前の、影像の成就なり、此れ本質の成就なり。前の加行の成満、此れ根本の成満なり。又處處に念仏の行儀を示すに、皆修定の方法なり。謂く余縁に止めしむるは、多くは是れ修禪の軌則なり。謂く修禪の要法、必ず須く其の方法を正しくして一心一境を先と為すべし。若し其の方法正しからずば、是れ邪觀と為す。若し雜縁ならば、一心を得難し。若し正境と合して一心相応するを得れば、信敬漸愧転た多く、名利貪愛稍や輕し。順次を待たず、法利且く先んず。生死にありと雖も、漸く凡心と異なる。華相既に現前す。果報何ぞ疑いあらんや。此れ誠に初心を策する秘要なり。若し此に相い翻せば、其の行虚偽と為すべし。雜縁乱動す、正念を失い、仏の本願と相応せず、何ぞ往生を得んや。善導の教誡、専ら此の条にあり。此の禪門の一行、諸の縁務を息めて、永く

往生乎。善導教誡、專在干此条。此禪門一行、息諸緣務、永絕散亂、心澄於靜境、身離乎喧雜。如此人、所當其根也。

問曰、依善導意、以十三定觀、為定善。是即可為禪門。以稱名行、撰散善中、何云為禪門乎。答。如前會釈。下輩臨終、不可發根本定心、唯假稱名功、得滅罪往生、以此撰散善也。此人兼聞大乘十二部經首題名字。如觀經下品上生説。善導於此不設專修要行。當知、止余行、稱名為先者、

約一期久習人、惣示如法念仏行儀也。設雖不發三昧、無間相續、必為令成就念心也。如觀經疏第三示地觀方法云。即向靜処、面向西方、正坐跏趺、一同前法。既住心已、徐徐轉心、想彼宝地雜色分明。初想不得亂想多境、即難得定、唯觀万寸一尺等。或一日二三日、或四五六七日、或一月一年二年三年等、無間日夜、行住坐臥、身口意業、常与定合。唯万事俱捨

由如失音〔觀經疏定善義〕意〕聾音〔仁本・活本〕盲〕癡人者、比定必即易得。若不如是、三業随緣轉、定想逐波飛、縱尽千百年、法眼未曾開云云。示別定方法如此。稱名是念仏三昧惣方便也。准修定方法、示稱名軌儀。其本意專在于令堅住心念。設雖不迄發三昧、必望專注一境心也。凡不限善導、諸

示禪門軌則、必令止余緣住一境。如天台止觀第四、釈修禪五緣、解第四息諸緣務中云。緣務有四。一生活、二人事、三技能、四者學問。〔乃至〕四學問者、讀誦經論、問答勝負等是也。領持記憶、心勞志倦。言論往復〔活本〕復、水濁珠昏。何暇更得

修止觀耶。此事尚捨、況前三務云云。如求那跋摩遺文云。放捨余聞思、依止林樹間。是夜專精進、正觀常不忘、境界恒在前、猶如對明鏡。如彼我亦然、由是心寂靜云云。如此非一。示修禪軌則、令止余緣撰心於一境、聞思學問等、亦在所捨中。善導解釈、以准此可知。

若如善導解釈、以口稱三昧為行之人、必以堅固寂靜心可為本。其靜心法、先須離不善境界。次可止生活乃至學文等緣務。若止息緣務、得一心不乱、口稱与心念和合、往生淨土

散亂を絶ち、心を静境に澄まし、身は喧雜を離る。此の如きの人、其の根に当る所なり。

問うて曰く、善導の意に依るに、十三定觀を以て、定善と為す。是れ即ち禪門と為すべし。稱名の行を以て、散善の中に撰するに、何ぞ禪門の行と為すと云うや。答う。前の會釈の如し。下輩の臨終、根本の定心を發すべからず、唯、稱名の功を仮りて、滅罪の往生を得、此を以て散善に撰するなり。此の人は兼て大乘十二部經首題名字を聞けり。『觀經』の下品上生の説の如し。善導は此において專修要行を設けず。當に知るべし、余行を止めて稱名を先と為すは、一期の久行人に約して、惣じて如法念仏の行儀を示すなり。設い三昧を發さずと雖も、無間に相續して、必ず念心を成就せしめんが為なり。『觀經疏』の第三に地觀の方法を示して云うが如し。『即ち静処に向いて、面を西方に向け、正坐跏趺すること、一に前法に同じ。既に心を住し已りて、徐徐に心を転じて、彼の宝地雜色の分明なるを想え。初

めの想に多境を亂想することを得ざれ、即ち定を得難くば、唯、方寸一尺等を觀ぜよ。或いは一日二日三日、或いは四・五・六日、或いは一月一年二年三年等、日夜を問うことなく、行住坐臥に、身口意業、常に定と合せよ。唯、万事俱に捨てて、由お失音〔音〕の字『觀經疏』定善義〔意〕聾音〔音〕の字、仁本・活本〔盲〕癡人の如くするは、此の定は必ず即ち得易し。若し是の如くならずば、三業は縁に随いて転じ、定想は波を逐いて飛ぶ、縦い千年の寿を尽すとも、法眼未だ曾て開けず』と云云。別

定の方法を示すこと此の如し。稱名は是れ念仏三昧にして、惣じては方便なり。修定の方法に准じて、稱名の軌儀を示す。其の本意は専ら心念を堅住せしむるにあり。設い三昧を發すまでにならずと雖も、必ず專注一境を望むなり。凡そ善導に限らず、諸の禪門軌則を示すに、必ず余縁を止めて一境に住せしむ。天台の『止觀』の第四に、修禪の五縁を釈するに、第四の息諸緣務を解す中に云うが如し。『緣務に四あり。一には生活、二には人事、三には技能、四には學問なり。〔乃至〕四の學問は、經論を讀誦し、問答勝負する等は是れなり。領持記憶せんに、心勞志倦なり。言論往復〔復〕の字、活本〔復〕するに、水濁珠昏なり。何の暇か更に止觀を修するを得んや。此の事すら尚お捨つ、況んや前の三務をや』と云云。『求那跋摩遺文』に云うが如し。『余の聞思を放捨して、林樹の間に依止せよ。是の夜に専ら精進して、正觀を常に忘れず、境界恒に前にあり、猶お明鏡に対するが如し。彼れの如く我れも亦然なり、是れに由りて心寂靜なり』と云云。此の如く一にあらざ。修禪の軌則を示すに、余縁を止めて心を一境に撰せしむ、聞思學問等、亦所捨の中にあり。善導の解釈、以て之に准じて知るべし。

若し善導の解釈の如きは、口稱三昧を以て行と為すの人は、必ず堅固寂靜の心を以て本と為すべし。其の靜心の法、先ず須く不善の境界を離るべし。次に生活乃至學文等の緣務を止むべし。若し緣務を止息せば、一心不乱を得て、口稱は心念と和合して、往生淨土の行、決定を得。此の一心の念仏を以て、

若し善導の解釈の如きは、口稱三昧を以て行と為すの人は、必ず堅固寂靜の心を以て本と為すべし。其の靜心の法、先ず須く不善の境界を離るべし。次に生活乃至學文等の緣務を止むべし。若し緣務を止息せば、一心不乱を得て、口稱は心念と和合して、往生淨土の行、決定を得。此の一心の念仏を以て、

若し善導の解釈の如きは、口稱三昧を以て行と為すの人は、必ず堅固寂靜の心を以て本と為すべし。其の靜心の法、先ず須く不善の境界を離るべし。次に生活乃至學文等の緣務を止むべし。若し緣務を止息せば、一心不乱を得て、口稱は心念と和合して、往生淨土の行、決定を得。此の一心の念仏を以て、

若し善導の解釈の如きは、口稱三昧を以て行と為すの人は、必ず堅固寂靜の心を以て本と為すべし。其の靜心の法、先ず須く不善の境界を離るべし。次に生活乃至學文等の緣務を止むべし。若し緣務を止息せば、一心不乱を得て、口稱は心念と和合して、往生淨土の行、決定を得。此の一心の念仏を以て、

若し善導の解釈の如きは、口稱三昧を以て行と為すの人は、必ず堅固寂靜の心を以て本と為すべし。其の靜心の法、先ず須く不善の境界を離るべし。次に生活乃至學文等の緣務を止むべし。若し緣務を止息せば、一心不乱を得て、口稱は心念と和合して、往生淨土の行、決定を得。此の一心の念仏を以て、

行得決定。以此一心念仏、善導為決定往生業。若如善導解釈者、往生速疾行、良称名一行為可足。例如下彼証真之念慧名陀羅尼門、即惣持無量功德也。此亦如是。雖未証真、称名位、必或有淨觀、或有淨念。依此義故、立專念名。若得一心專念位、可含藏無尽仏法於一念。更以下非一心專念、余雜善上比校之、豈得為一類乎。百即百生千即千生義、更不待言。此約如法修行念仏者說也。然如法修行、二門俱難有之。若自有之者、設雖為聖道門行者、可云百即百生等。何者、善導於雜行判千希得五三等者、意云、末代行者、多分入雜行門人、如說修行難有之。或恃慧業、或眩呪驗、求名利、增貪嗔。若無此邪求過人、千人中希有三五。此人必可得往生、非謂千人如說雜行人中三五得往生。其三五往生人、是如說行人、其余皆有邪求過人也。或云千中無一者、皆約不法人說也。然念仏行入、皆必染極樂往生。苦樂往生人、必厭離現世名利等。不染名利故、念仏心増進。如法行是得立。如法行立故、百即百生也。入雜行門人、或少兒若僧等、其種類多之、未必以如法淨心為先。是故難期出離也。(為言)

若云不爾者、無有是處。謂就雜行如說行人、且約華嚴宗者、極樂等九仏刹者、是界外解行処也。一乘見聞人、解行善根純熟位、於界内、尚得十眼十耳德、到離垢定前。是人生極樂等九仏刹、名界外解行。生第十賢首仏刹、名証果海生。此約界内通見聞解行出世唯解行之人說也。或有界内唯見聞、出世唯解行、出出世唯証入之人。受持華嚴往生淨土之人、撰此中一也。貞元華嚴經第四十、明持者五果中、說淨土果云、唯此願王、不相捨離、於一切時、引導其前。一刹那中、即得往生極樂世界等云云。至心誦誦人、百即百生千即千生、若不生者、即為不如法行人。若云千人如說行人千人不生者、一人亦不可生。何以故、一人得生、如說故為生。若以如說行為因者、千人亦可生。若雖如說千人不生者、雖為如說、一人亦不可生也。若如此云者、即是撥無因果大邪見也。称名往生、亦准

*35上

善導は決定往生の業と為す。若し善導の解釈の如きは、往生速疾の行、良に称名の一行にて足んぬべし。例えば彼の証真の念慧を陀羅尼門と名け、即ち無量の功德を総持するが如し。此れ亦是の如し。未だ真を証せずと雖も、称名の位に、必ず或いは淨觀あり、或いは淨念あり。此の義に依る故に、專念の名を立つ。若し一心專念を得る位、無尽の仏法を一念に含藏すべし。更に一心專念にあらざる余の雜善を以て、之に比校すれば、豈に一類と為すを得んや。百即百生千即千生の義、更に言を待たず。此れ如法の修行の念仏者に約しての説なり。然れば如法の修行、二門俱に之あること難し。若し自ら之あるの者は、設い聖道門の行者と為すと雖も、百即百生等と云うべし。何者か、善導、雜行において千希得五三等と判ずるは、意に云く、末代の行者、多分に雜行門に入るの人、如説の修行は之あること難し。或いは慧業を待み、或いは呪驗に眩みて、名利を求めて、貪嗔を増す。若し此の邪求の過なき人は、千の中に希に三五あり。此の人は必ず往生を得べし、千人の如説の雜行人の中に三五往生を得と謂うにあらざ。其の三五の往生人は、是れ如説の行人、其の余は皆邪求の過ある人なり。或いは千中無一と云うは、皆不法人に約する説なり。然れば念仏の行人は、皆極樂往生を樂う。若し往生を樂う人、必ず現世の名利等を厭離す。名利に染らざる故に、念仏の心、増進す。如法の行、是れ立つるを得。如法の行立つる故に、百即百生なり。雜行門に入るの人、或いは少兒若僧等、其の種類の多し、未だ必ずしも如法の淨心を以て先と為す。是の故に出離期し難きなり。(為言)

*35下

若し爾らずと云わば、是の処あることなけん。謂く雜行如説の行人に就いては、且く華嚴宗に約せば、極樂等の九仏刹は、是れ界外の解行処なり。一乘見聞の人、解行善根純熟の位、界内において、尚お十眼十耳の徳を得、離垢定前に到る。是の人は極樂等の九仏刹に生る、界外解行生と名く。第十賢首仏刹に生るるを、証果海生と名く。此れ界内の見聞解行に通ずる出世唯解行の人に約する説なり。或いは界内唯見聞、出世唯証入の人あり。『華嚴』を受持し淨土に往生するの人、此の中に撰するなり。『貞元華嚴經』の第四十に、持者の五果を明かす中に、淨土の果を説きて云く、「唯、此の願王、相い捨離せず、一切の時において、其の前に引導す。一刹那の中に、即ち極樂世界に往生することを得」と等云云。至心誦誦の人、百即百生千即千生にして、若し生れざれば、即ち不如法の行人と為す。若し千人の如説の行人、千人生れずと云わば、一人亦生ずべからず。何を以ての故に、一人生を得るは、如説の故に生と為す。若し如説の行を以て因と為さば、千人亦生るべし。若し如説と雖も千人生れずば、如説と為すと雖も、一人も亦生るべからざるなり。若し此の如く云わば、即ち是れ因果を撥無する大邪見なり。称名往生、亦此れに准じて知るべし。百即百生等と言は、如法深心の行人に約する説なり。然れば世を挙げて眼前の利を営む人、皆世路の繼きずなに纏われり。汝は雜行を制して純念を勧むと雖も、念

此可_レ知。言_二百即百生等_一者、約_二如法深心行人_一說也。然_レ拳_レ世
 營_レ眼前之利_一人、皆纏_二世路之纏_一。汝雖_レ制_二雜行_一勸_二純念_一、念心
 若不_レ純利_一者、恐無_二百即百生憑_一歟。若爾者、非_レ唯限_二念仏一行_一、
 設雖_レ為_二法華誦誦_一、雖_レ為_二真言修行_一、若勸_二一行_一者、未_レ知_二機縁_一
 生熟_一。若許_二自所_一好者、自可_レ遇_二於有縁妙行_一。若然者、是有縁故、
 修心自明利。若望_二往生_一者、是可_レ為_二千中五三類_一、或於_二此中_一、可_レ
 有_レ經_二恒河沙大劫_一、如_二三世諸仏_一修行大菩薩_一也。是故善導設_二
 如法念仏軌儀_一、云_二百即百生等_一。輕_レ不如法雜行、云_二千得五三_一、
 云_二千中無_一等也。若於_二雜行_一許_二如說_一者、如_二前說_一、可_レ云_二百
 即百生等_一、置_レ此而不_レ論也。是故善導出_二千得五三等所由_一云、貪
 瞋諸見煩惱來間斷故、無_レ有_二慚愧懺悔心_一故等。專修若有_二此過_一
 者、當_レ如_二雜行人_一。若同不_レ如法者、汝止_二有縁余行_一、有_二何益_一乎。
 非_レ唯無_レ益、倍滅_二當根仏法_一。此過如_二諸經論說_一、不_レ違_二具出_一。然
 汝等惡_二聖道_一、己心癖、猶如_二對敵人_一。修_二念仏_一、念心是疎、宛似
 數_二隣宝_一。於_二此類_一、既捨_二雜行_一、未_レ入_二專修_一、二行全無_一。准_二
 彼瑜伽論所說_一、可_レ名_二最極無者_一矣。

*36上

問曰、汝若依_二善導意_一、為_レ成_二念心堅固行_一者、許_レ止_二學文等縁_一
 務_一者、我欲_レ勸_二人從_一生年七八歲、一向_レ教_二稱名行_一、不_レ令_二好_一學
 文等業_一、此条如何。答。病患巨多、方藥非_一。根機万差、教門多
 種。或愚鈍不足_二聞思等_一、或雖_レ非_二愚鈍_一天性好_二一行_一。對_二如此
 類_一、可_レ勸_二進稱名一行_一、不_レ可_レ必勸_二余行_一。不然唯授_二一行_一、設
 雖_レ授、其心不_レ必相応。積尊十弟子十種根行各別。授_二十法_一化_二導
 之_一、十人尚不_レ守_二一行_一、況_二一切有情乎_一。若其藥病不_レ相府_一〔仁本・
 活本「符」、底本・仁本附訓「カナハ」得道難_レ期。如_二彼目連尊者_一二
 人弟子因縁_一。但如_二上所_一出_二善導解積并止觀_一等者、善導約_二一
 類機_一、止觀等示_二修念位方法_一、未_レ防_二修念前後慧學_一。慧學者遍_二万
 行_一為_二其主_一。若不_レ知_二其方法_一者、万行難_レ成。是故文殊般若、明_二
 一行三昧_一、先令_二學_一般若。善導云、若欲_レ學_二解_一、從_二凡至_一聖、一
 切無_レ礙、乃至_二仏果_一、皆得_二學也_一。良以若無_二所_一知_二解_一、依_二何_一修_二道_一。
 若不_レ修行_一、慧學亦無_レ用、解行必具足、有_二所_一成_二辨_一。但如_二越_一〔仁

心若し純利ならずば、恐らくは百即百生の憑なきか。若し爾れば、念仏一行に限らず、設い『法華』の
 誦誦を為すと雖も、真言の修行を為すと雖も、若し一行を勸むるは、未だ機縁の生熟を知らず。若し自
 ら好む所を許さば、自ずから有縁の妙行に遇うべし。若し然れば、是れ有縁の故に、修心自ら明らかに
 利する。若し往生を望むるは、是れ千中五三の類と為すべし、或いは此の中において、恒河沙大劫を経
 て、三世諸仏の如き修行の大菩薩あるべきなり。是の故に善導は如法念仏軌儀を設けて、百即百生等と
 云えり。不如法雜行を輕んじて、千得五三と云い、千中無一等と云うなり。若し雜行において如説を許
 さば、前の説の如し、百即百生等と云うべし、此に置いて論ぜざるなり。是の故に善導、千得五三等の
 所由を出して云く、「貪瞋諸見煩惱來たり間斷する故に、慚愧懺悔の心あることなき故に」等と。專修、
 若し此の過あらば、當に雜行の人にしかざるべし。若し同じく如法ならざれば、汝は有縁の余行を止め
 て、何の益かあらんや。唯、益なきにあらず、倍うるに當根の仏法を滅す。此の過は諸論の説の如し、
 具さに出すに違あらず。然れば汝等、聖道を惡むは、己心の癖の猶し敵人に對するが如し。念仏を修す
 るに、念心是れ疎し、宛かも隣宝を數えるに似たり。此の類において、既に雜行を捨て、未だ專修に
 入らずして、二行全くなし。彼の『瑜伽論』の所説に准じて、最極無者と名くべし。

問うて曰く、汝、若し善導の意に依りて、念心堅固の行を成ずるは、學文等の縁務を止むを許さば、
 我れ人に勸めて生年七八歳より、一向に稱名の行を教え、學文等の業を好ましめざらんと欲す。此の条
 はいかん。答う。病患は巨多にして、方藥は一にあらず。根機は万差にして、教門は多種なり。或いは
 愚鈍にして聞思等足らず、或いは愚鈍にあらずと雖も天性にして一行を好む。此の如きの類に對して、
 稱名の一行を勸進すべし、必ずしも余行を勸むべからず。然らざるに、唯、一行を授くは、設い授くと
 雖も、其の心必ずしも相応せず。積尊十大弟子の十種の根行各別なり。十法を授けて之を化導するに、
 十人尚お一行を守らず、況んや一切有情をや。若し其の藥の病に相い府〔仁本・活本「符」、
 底本・仁本附訓「かなは」わざれば、得道期し難し。彼の目連尊者の二人の弟子の因縁の如し。但し
 上に出す所の善導の解積並びに『止觀』の積等の如き、善導は一類の機に約す、『止觀』等は修念位の
 方法を示し、未だ修念前後の慧學を防がず。慧學者は万行に遍じて其の主と為す。若し其の方法を知
 らずば、万行成じ難し。是の故に『文殊般若』に、一行三昧を明して、先ず般若を學ばしむ。善導の云
 く、「若し解を學ばんと欲せば、凡より聖に至るまで、一切礙りなし、乃至仏果まで、皆學することを
 得るなり」と。良以て若し知解する所なくば、何に依りて道を修せん。若し修行せずば、慧學亦用な
 からん、解行必ず具足して、成弁する所あり。但し世路を越〔越〕の字、仁本・活本〔趁〕えるの隙

本・活本「趁」乎世路之隙、纔称「仏号」、倦於習学之輩、直修一行者、若有「誠心」者、雖「未」可必為「過失」、若復有「類念仏者」、為「翻」無始癡心、有「学」性相者、非「唯」不於「專修」為「障礙」、反相「成念仏行」也。是故說「称名」之經文、先勸「慧学」、立「專修」之善導、既許「学解」。良有「所由」乎。若不「然」者、善導和尚等、若無「慧解」、豈「達」一行「發」三昧「耶」。

問曰、不法過、實可「避」之。我勸「如法念仏行」、令「諸人皆廢」余行「者」、汝何不「許」之乎、如何。答。設如「於」日本國「有」幾爾衆生、多分皆契「合称名根機」、若「三人不」相「當其機」者、押而勸「進」之者、於「汝可」為「過」。況「二十人以上」乎。是故設雖「授」如說「行」、若守「一門」者、有「藥病乖角失」。若「然」者、唯「可」待「有緣諸行」、不「然」者、順次出離難「期」。若「又同見」結緣益「者」、積功運勞善以為「重」。如「菩薩所修万行」等、何「必易」行道為「勝」乎。著如「汝所」言者、諸宗各抄「出高祖积文」、以勸「一行」、豈「可有」勝劣「乎」。諸宗高祖、未「必劣」於善導。如「彼天台智者靈山聽衆、華嚴杜順文殊化身」、一一靈相備「于伝記」。是故各守「一行」人、可「仰」其本祖遺訓。輒「莫」執「一義」疑「請門」。此名「魔説」、諸教所「誠」也。現見、當今男子女人中、強有「好」説「經修觀」等行、其類甚多。是宿善之余習、来果之前相也。設雖「不」往「生浄土」、処「生死中」、得「不退益」。如「彼智月夫人」、一「發心」後、於「須弥山極微塵數劫」、不「墮」惡趣、不「生」惡世、「其身遍」不可説不可説「仏利極微塵數世界」、亦親「近彼世界中一切如来」、聽「聞妙法」、受「持憶念」、亦知「彼如来諸本事海諸大願海嚴浄仏利海」、亦知「一切衆生心性根機種種不同」、隨「其所」施「設方便」、令「解」脱生死大苦「悟」入寂靜涅槃。如「此業用、充滿法界」、無「有」窮尽。比等大士、其所居如「浄利」、華池宝閣、莊嚴奇麗、其眷属皆宿世同行大菩薩衆也。或宝柱中現「無尽仏境」、或重閣中間「因果功德」、皆是生死中大益也。若有「深愛」樂「仏法」心「上」者、順次即「有」此益。若「然」者、設雖「漏」汝勸進、為「有」何損「乎」。莫「下」憑「汝小心」疑「無」大「姓人」。大綱是足。得「一察」万。此義若「迄」委細、汝謂「破」念仏「敷」。小心之至、不可説不可説也。

*356下

に、纔かに仏号を称して、習学に倦むの輩にして、直ちに一行を修する如きは、若し誠心あらば、未だ過失と為すべからずと雖も、若し復一類の念仏者ありて、無始の癡心を翻さん為に、性相を学すことある者は、唯、專修において障碍と為さざるにあらず、反りて念仏の行を相い成ずるなり。是の故に称名を説くの經文は、先ず慧学を勸む、專修を立つるの善導も、既に学解を許せり。良に所由あるか。若し然らずば、善導和尚等、若し慧解なくば、豈に一行に達し三昧を發さんや。

問うて曰く、不法の過、實に之を避くべし。我れ如法の念仏行を勸めて、諸人をして皆余行を廢せしむるは、汝何ぞ之を許さざらんや、いかん。答う。設い日本国において幾爾の衆生ありて、多分に皆称名の根機に契合するも、若し二三人其の機に相当せざるが如きに、押して之を勸進せば、汝において過と為すべし。況んや二十人以上をや。是の故に設い如説の行を授くと雖も、若し一門を守らば、藥病乖角の失あり。若し然れば、唯、有縁の諸行を待つべし、然らずば、順次の出離期し難し。若し又同じく結縁の益を見る者は、積功運勞の善以て重しと為す。菩薩所修の万行の如し、何ぞ必ず易行道を勝ると為んや。若し汝の言う所の如くならば、諸宗各の高祖の积文を抄出するに、以て一行を勸む、豈に勝劣あるべきや。諸宗の高祖、未だ必ずしも善導に劣らず。彼天台智者は靈山の聽衆、華嚴の杜順は文殊の化身、一一の靈相は伝記に備う。是の故に各の一行を守る人、其の本祖の遺訓を仰ぐべし。輒ち一義を執して諸門を疑うことなかれ。此れを魔説と名く、諸教の誠むる所なり。現に見るに、當今の男子女人の中に、強ちに説「經修觀」等の行を好むあり、其の類甚だ多し。是れ宿善之余習にして、来果の前相なり。設い浄土に往生せずと雖も、生死の中に処して、不退の益を得。彼の智月夫人の如し、一たび發心の後、須弥山の極微塵數劫において、惡趣に墮せず、惡世に生ぜず、其の身は不可説不可説「仏利極微塵數世界」に遍じて、亦彼の世界の中的一切如来に親近し、妙法を聽聞し、受「持憶念」、亦彼の如来の諸の本事海・大願海・嚴浄「仏利海」を知り、亦一切衆生の心性・根器の種種の不同を知り、其の所應に隨いて方便を施設し、生死の大苦を解脱せしめ寂靜涅槃に悟入せしむ。此の如き業用、法界に充滿して、窮尽あることなし。此れ等の大士、其所居は浄利の如し、華池宝閣、莊嚴奇麗にして、其の眷属皆宿世同行の大菩薩衆なり。或いは宝柱の中に無尽の仏境を現じ、或いは重閣の中に因果の功德を聞く、皆是れ生死の中の大益なり。若し深く仏法を愛樂する心あらば、順次に即ち此の益あり。若し然れば、設い汝の勸進に漏ると雖も、何の損ありとせんや。汝が小心を憑みて大姓人なしと疑うことなかれ。大綱は是に足れり。一を得て万を察す。此の義、若し委細に迄るに、汝は念仏を破すと謂うか。小心の至り、不可説なり、不可説なり。

*356上

問曰、念仏三昧行儀、皆為下如善導所積一切廢中余行乎。答。此亦為二類稱名行者、善導示一途也。惣不兼修余行者、約二類行人加行位、作此說也。約一切念仏者行儀者、未二必然。或於念仏行中、有兼讀誦大乘等余行。如觀仏三昧經第十云。仏告阿難、此念仏三昧、若成就者、有五因縁。何等為五。一者持戒不犯、二者不起邪見、三者不生憍慢、四者不悲不嫉、五者勇猛精進、如救頭燃。行此五事、正念諸仏微妙色身、令心不遠。亦當讀誦大乘經典。以此功德念仏力故、疾疾得見無量諸仏云云。如此經說非一。凡於諸行得意可為本。莫下向一文偏執而已。

問曰、汝依別經論文別立念仏義者、置而不可論之也。更莫引善導釈作此会釈。如先所出証文。善導宗義、永為異汝所存。重重所成立、更不可用之、如何。答。汝若不許此等会釈者、令善導有偏執邪見過。夫諸論異諍、其理莫一二。色即是空、清辨義立。空即是色、護法義存。二義鎔融、拳体全摂。諸義皆如是。且如説縁生実有破自性因、甘露門是初開。〈小乗也〉縁生故、畢竟皆空。真空中二辺不立、是為中道。〈三論宗也〉此中道義中、有依他法相、八識三性等無辺法相、是得成立、〈法相宗也〉此法有空仮中三義。即不離一心、即空即仮即中也。〈天台宗也〉具此諸義事法、有十玄六相徳。事事無礙義、是得成立。〈華嚴宗也〉此諸義遍法界而無辺。即不離我三業、転依成三密門。遍法界身業、即身密也。遍法界語業、即語密也。遍法界意業、即意密也。俱遍法界故、身等語、語等意、三業皆平等。三平等義是得成立。〈真言宗也〉淺深絞絡、成一大法門海。堅論有重重淺深差別、横観為一味平等法門。若云善導念仏義不撰此中者、豈得成往生正因乎。若云撰者、汝何可不用此会釈乎。若云与諸教終有差別者、汝謂勸力立善導宗義、還不顧壞其宗義也。例如下彼執情謂空有人、還壞空有義。是故若許此等会釈者、善導宗義、為甘露妙門。苦二門和会者、愛浄土門人、何憎聖道門乎。若無此過、

*32下

問うて曰く、念仏三昧の行儀、皆善導の所積の如く一切余行を廢すると為るや。答う。此れ亦一類の稱名の行者の為に、善導は一途を示すなり。総じて余行を兼行せざる者の、一類の行人の加行の位に約して、此の説を為すなり。一切の念仏者の行儀に約せば、未だ必ずしも然らず。或いは念仏行の中において、讀誦大乘等の余行を兼ねることあり。『觀仏三昧經』の第十に云うが如し、「仏、阿難に告げたまわく、此の念仏三昧、若し成就するに、五の因縁あり。何等をか五と為す。一には持戒不犯、二には邪見を起さず、三には慢を生ぜず、四には不悲不嫉、五には勇猛精進にして、頭燃を救うが如くす。此の五事を行じ、正しく諸仏の微妙の色身を念じ、心退かざらしむ。亦当に大乘經典を讀誦すべし。此の功德念仏力を以ての故に、疾く疾く無量の諸仏を見るを得ん」と云云。此の如く經説一にあらざる諸行において意を得て本と為すべし。一文に向いて偏執することなかれとならなくのみ。

問うて曰く、汝、別の經論に依りて別して念仏の義を立つるは、置きて之を論ずべからず。更に善導の積を引きて此の会釈を作すなかれ。先に出す所の証文の如し。善導の宗義、永く汝が所存と異なりを為せり。重重に成立する所、更に之を用うべからず、いかん。答う。汝、若し此れ等の会釈を許さずば、善導をして偏執邪見の過あらしめん。夫れ諸論の諍を異にするも、其の理は二なし。色即是空、清弁の義を立つ。空即是色、護法の義を存す。二義鎔融し、拳体全摂す。諸の義は皆是の如し。且く縁生の実有を説きて自性の因を破すが如し、甘露の門は是れ初開なり。〈小乗なり〉縁生の故に、畢竟じて皆空なり。真空中に二辺を立てず、是れを中道と為す。〈三論宗なり〉此の中道の義の中に、依他法性あり、八識三性等の無辺の法相、是れ成立を得、〈法相宗なり〉此の法に空・仮・中の三義あり。即ち一心を離れず、即空・即仮・即中なり。〈天台宗なり〉此の諸義を具す事法、十玄六相の徳あり。事事無礙の義、是れ成立を得。〈華嚴宗なり〉此の諸の義は法界に遍じて無辺なり。即ち我が三業を離れず、転依して三密門を成ず。遍法界の身業、即ち身密なり。遍法界の語業、即ち語密なり。遍法界の意業、即ち意密なり。俱に法界に遍する故に、身語と等しく、語意と等しく、三業皆平等なり。三平等の義、是れ成立を得。〈真言宗なり〉淺深絞絡して、一大法門海を成ず。堅に論ずれば重重淺深の差別あり、横に観ずれば一味平等の法門と為す。若し善導の念仏義は此の中に撰せずと云わば、豈に往生の正因を得んや。若し撰すと云わば、汝は何ぞ此の会釈を用いざるべきや。若し諸教と終に差別ありと云わば、汝は力を勵んで善導の宗義を立つと謂いて、還りて其の宗義を壞すを顧みざるか。例えば彼の情謂空有を執する人、還りて空有の義を壞すが如し。是の故に若し此れ等の会釈を許さば、善導の宗義、甘露の妙門と為ん。若し二門和会せば、浄土門を愛するの人、何ぞ聖道門を憎まんや。若し此の過なくば、諸仏出現の樂しみあり、演説正法の樂しみあり、僧衆和合の樂しみあり、同修勇進の樂しみあり。大樂此に極まる、豈に快しみにあらずや。

有「諸仏出現樂」、有「演說正法樂」、有「僧衆和合樂」、有「同修勇進樂」。大業此極、豈不「快乎」。

次正料「簡觀經疏文」、成「称名下有「菩提心」義者、疏言、上来雖「說」定散兩門之益、望「仏本願」、意在「衆生一向専「称弥陀仏名」者、泛言一向「通三業」。即如「疏云」、札札「弥陀」、称「称弥陀」、觀「弥陀」等、此中取「称名」故、除「身業」。於「語意」可「有一向義」。如「迦才浄土論」所說口念義也。何者謂勸「万行」、必對「有根位有情類」、不「對」木石、非「所化」故、不「對」死人、諸根斷滅故、不「可」見聞覺知、不「可」起行修道故也。若對「有情有根身者」、必以「心念」為「本故」、是故此中一向言、必有「語一向意一向義」。先就「三業一向義」、設雖「有」身語一向行、若無「意一向義者」、不「得」往生。設雖「身語不」一向、若有「意一向義者」、必「可」得「往生」。此中取「語意一向義」也。若汝言「下文一向称名」外全無「意業義」者、我問「汝、一向称名元意、為「依」何義利乎」。若汝答曰、為「往生浄土」也。我又難「汝曰、一向専「称解釈外、全無」往生浄土之語」。汝何作「此說」乎。若汝言「雖無」文理必「可」然者、我又作「此說」。雖「文無」意業義、理必有「之」也。若有「此義者」、意業一向義、即是以「菩提心」可「為」先。是故若約「称名置「散善門」義者、可「謂雖」不「修」別別定散諸善、發「菩提心」一向称名、必「得」往生」。(為言)汝何引「此文」、簡「往生正因菩提心」乎。

次約「置」定善門「義」者、十三定觀中第九觀、是為「根本」。余觀是伴定、亦此諸定方便根本、各各差別。一一「修」之、日數隔別、心想疲勞。称名三昧、是惣定、又是根本、与「第九觀」無「別体」。然就「此根本三昧」、亦有「方便根本」。謂口称者、是方便也。三昧成就者、是根本也。是故今所說十余定觀、皆為「往生浄土業因」。其中雖「不」修「別別諸定」、若口称三昧成就者、往生浄土無疑。亦於「自余諸定」、可「得」成就也。又与「第九真身觀」無「別体」故、十余春「仁本・活本「眷」」属諸定皆可「得」成就。是故云「一向専「称」等」。經文云「持無量寿仏名」、亦如此「可」准知。如「善導釈云」、必「可」具「足三心」。若隨「一闕」、不「往生」。(取意)汝又所「許」也。然者善導釈兼「心

*238上

次に正しく『觀經疏』の文を料簡して、称名の下に菩提心あるの義を成せば、『疏』に言わく、「上来定散兩門の益を説くと雖も、仏の本願に望まば、意、衆生をして一向に弥陀仏の名を専称せしむるにあり」とは、泛く一向と言うは三業に通ず。即ち『疏』に云うが如し、礼せば弥陀を礼し、称せば弥陀を称し、觀せば弥陀を觀する等、此の中に称名を取る故に、身業を除く。語意において一向の義あるべし。迦才の『浄土論』所說の口念の義の如し。何者か謂く万行を勸めて、必ず有根の位、有情の類に對す、木石に對せず、所化にあらざる故に、死人に對せず、諸根斷滅するが故に、見聞覺知すべからず、起行修道すべからざる故なり。若し有情・有根の身に對せば、必ず心念を以て本と為す故に、是の故に此の一向の言、必ず語一向の意・一向の義あり。先ず三業の一向の義に就いて、設い身語一向の行ありと雖も、若し意一向の義なくば、往生を得ず。設い身語一向ならずと雖も、若し意一向の義あらば、必ず往生を得べし。此の中に語一向の義を取れり。若し汝、文に一向称名を云いて外に全く意業の義なしと言わば、我れ汝に問う、一向称名の元意、何の義利に依らんとするや。若し汝、答えて曰わば、往生浄土の為なりと。我れ又汝を難じて曰く、一向専「称」の解釈の外に、全く往生浄土の語なし。汝は何ぞ此の説を作すや。若し汝、文なしと雖も理必ず然るべしと言わば、我れ又此の説を作す。文に意業の義なしと雖も、理必ずあるなりと。若し此の義あらば、意業一向の義、即ち是れ菩提心を以て先と為すべし。是の故に若し称名を散善門に置く義に約さば、謂うべし、別別に定散の諸善を修せずと雖も、菩提心を發して一向に称名すれば、必ず往生を得。(為言)汝、何ぞ此の文を引きて、往生の正因の菩提心を簡わんや。

次に定善門を置く義に約せば、十三定觀中の第九觀、是れを根本と為す。余觀は是れ伴の定にして、亦此れ諸の定、方便・根本、各各に差別す。一一に之を修して、日數隔別にして、心想疲勞す。称名三昧、是れ總の定、又是れ根本にして、第九觀と別の体なし。然れば此の根本の三昧に就いて、亦方便・根本あり。謂く口称は、方便なり。三昧成就は、是れ根本なり。是の故に今の所說の十余定觀は、皆往生浄土の業因と為す。其の中に別別の諸定を修せずと雖も、若し口称三昧の成就せば、往生浄土は疑いなし。亦自余の諸定において、成就を得べきなり。又、第九真身觀と別の体なきが故に、十余春「仁本・活本「眷」」属の諸定は皆成就を得べし。是の故に「一向専「称」等」と云えり。經文に「持無量寿仏名」と云うは、亦此の如く准知すべし。善導の『釈』に云うが如し、「必ず三心を具足すべし」と。「若し隨いて一欠れば、往生せず」と。(取意)汝、又許す所なり。然れば善導の釈に心念を兼ねる義、明らかし。其の旨第一門に成ずるが如し。汎く釈文の方軌に依りて、此の文義の分齊を解す、善導

*238下

念義明矣。其旨如「第一門成」。汎依「積文方軌」、解此文義分齊、就「善導解釈中」、於「淨土諸行中」、或有「唯出」体声為声二句、如「云」同發菩提心（体声也）、「往生安樂國（為声也）」等。此於「發菩提心」之体声中、「撰」一向專念之業声也。或有「唯出」一向專念之業声、「撰」發菩提心之体声往生極樂之為声上。即如此一向專稱解釈也。如「此例非」一。是故捨「菩提心」立「称名業」、如「捨」樹求「影」、何其可得乎。又於「淨土諸行中」、發菩提心是男声也、称名等諸行是女声也。如「男女和合有」生子。若無「菩提心丈夫」、以「誰」為「父成」淨土真子乎。當「知今所」言一向專称文、出「女声」一行、必撰「男声菩提心」也。依「此男女二行」、為「弥陀真子」、必可立「往生行」也。是故就「此文」判「宗趣」者、（當部所崇曰宗、宗之所歸曰趣、如常。）有「二重」。一「語意相對」、称「仏名」為「宗」、心念成就為「趣」。二「因果相對」、以「心念成就」為「宗」、以「往生淨土」為「趣」。若不爾者、持無量壽仏名之經文、專称弥陀仏名之疏釈、只為「空動」口舌「無」所「歸趣」乎、如何。若言「文外有」往生淨土之大益者、必有「此宗趣」也。苦言「可」具「三心」者、必先以「菩提心」可為「本」。善導既云「同發菩提心等」、道綽懷感等又同之。若言「下文云」仏名「故不」取「心念」者、既違「三心具足」之文。又簡「菩提心」者、三「性心」都「不」取「之乎」。若言「取」非「菩提心」之「善心」者、既同取「善心」。簡「菩提心」為「有」何用乎。又都簡「善心」者、可「取」不「善無記心」乎。爾者、不「善心者、惡趣之正因也。無記心者、不「感果」。若言「三性心」都「不」取「之者、設雖」称「仏号」、如「風林河等音声」。何云「持仏名」、云「專称仏名」乎。

*329上

問。若爾者何故、准「善導釈」、第十八願中以「称名」為「先乎」。答。如「前説」、言「至心信樂」、即是真心相応之称名也。汝亦許「三心具足義」、爾者是念仏三昧也。若不「与」此「心」相「応」者、念仏三昧義不「成」。若失「此義」、唯守「持無量壽仏名」之文字者、何故疏第一卷釈云、「此經觀仏三昧為「宗」、亦念仏三昧為「宗」云云。可「相」違此釈一。何者以「称名与」心念「相「応」故、設雖」非「修慧」、可「得」聞思相応念仏三昧」。又設雖「不」發「聞惠」、（仁本・活本「思」）於「生得善心中」、

の積文の中に就いて、淨土の諸行の中において、或いは唯、体声・為声の二句を出すことあり、「同發菩提心」（体声なり）。「往生安樂國」（為声なり）等と云うが如し。此れ發菩提心の体声の中において、一向專念の業声を撰するなり。或いは唯、一向專念の業声を出して、發菩提心の体声・往生極樂の為声を撰するあり。即ち此の「一向專称」の解釈の如し。此の如き例は一に「あらず」。是の故に菩提心の体を捨てて称名の業を立つること、樹を捨てて影を求むるが如し、何ぞ其れ得べきや。又淨土の諸行の中において、發菩提心は是れ男声なり、称名等の諸行は是れ女声なり。男女和合して子を生むことあるがごとし。若し菩提心の丈夫なくば、誰を以てか父と為し、淨土の真子を成ぜんや。當に知るべし、今、言う所の「一向專称」の文、女声の一行を出して、必ず男声の菩提心を撰するなり。此の男女二行に依りて、弥陀の真子を為して、必ず往生の行を立つべきなり。是の故に此の文に就いて宗趣を判ぜば、二重あり。一には語意の相對、仏名を称うるを宗と為し、心念の成就するを趣と為す。二には因果の相對、心念の成就を以て宗と為し、往生淨土を以て趣と為す。若し爾らずば、「持無量壽仏名」の經文、「專称弥陀仏名」の疏釈、只、空しく口舌を動かして歸趣する所なしと為ん、いかん。若し文外に往生淨土の大益ありと言わば、必ず此の宗趣あるなり。若し三心具すべしと言わば、必ず先ず菩提心を以て本と為すべし。善導既に「同發菩提心」等と云えり、道綽・懷感等も又之に同じ。若し文に「仏名」と云う故に心念を取らずと言わば、既に三心具足の文に違せり。又菩提心を簡うは、三性の心、都て應に之を取らざるべきや。若し菩提心にあらざるの善心を取ると言わば、既に同じく善心を取れり。菩提心を簡いて何の用あるとやせん。又都て善心を簡わば、不善・無記心を取らざるべきや。爾れば、不善心は、惡趣の正因なり。無記心は、感果せず。若し三性の心、都て之を取らずと言わば、設い仏号を称すと雖も、風林河等の音声のごとし。何ぞ「持仏名」と云い、「專称仏名」と云うや。

問う。若し爾れば何の故か、善導の釈に准じて、第十八願の中に称名を以て先と為すや。答う。前説の如し、「至心信樂」と言う、即ち是れ真心相応の称名なり。汝は亦三心具足の義を許せり、爾れば是れ念仏三昧なり。若し此の心と相応せずば、念仏三昧の義は成ぜず。若し此の義を失いて、唯、「持無量壽仏名」の文字を守らば、何が故に「疏」の第一卷に釈して、「此の經は觀仏三昧を宗と為し、亦念仏三昧を宗と為す」云云とするや。此の釈と相違すべきや。何者か称名は心念と相応するを以ての故に、設い修慧にあらずと雖も、聞思相応の念仏三昧を得べし。又設い聞惠（惠）の字、仁本・活本「思」を發さずと雖も、生得の善心の中において、「俱舍」等の四惠相応の義に准じて、今、生得を出す。知

《准俱舍等四惠相生義、今出生得。可知。》生甚深愛敬念。以此念是三昧方便故、於因立果名、名念仏三昧也。此義亦如前成。或有於稱名位随分撰散心故、故假立定名。或師於稱名立斂心定名是也。今述大綱、不可違諸門也。是故付属称名、即是付属念仏三昧也。付属念仏三昧、即是付属觀仏三昧也。宗旨属累相成、無違也。然菩提心者、志求仏果心故、於定散二善、皆通有之。惣言之、從因向果、一切心慈悲願行等、皆無不与菩提心相応故。

今念仏三昧觀仏三昧者、正觀念仏菩提果故、即是三昧菩提心也。凡六度行、皆以菩提心為本。其中諸三昧善、設雖非念仏三昧、其心順法無我理、所修三昧、皆以名菩提行、其所依心、菩提心也。是故第三地菩薩修四禪等、皆是菩提行也。其所依心、是菩提心也。依之菩提行經、云菩提心静慮波羅密等。蓮華戒菩薩広積菩提心論、広明菩提心義、亦引諸經、多説三昧善、即此意也。又非唯限三昧善、自余諸行、皆以如是。是故羅什所訳二卷菩提心論、明菩提心義、広説六度行。又菩提行經、名菩提心忍辱波羅密菩提心精進波羅密等。又菩提資糧論、説六度名菩提資糧。彼論云、菩提者一切智智故、資糧者能滿菩提法故等云云。彼所依心、是菩提心也。又華嚴十行十廻向十地品等意、皆是同之。此等文義不能具出。是故念仏善根、若散若定。離菩提心、以何為所依乎。就中善導和尚、既引功德雲比丘念仏三昧文、証成万行中一行義。然此比丘善財知識中、為初發心住善友。發心者、即發菩提心也。此比丘以為念仏三昧主故、善財初對文殊入法界信位、依文殊指示、次値此比丘。比丘説念仏三昧法、善財聞之、種姓〔仁本・活本〔性〕〕顯發、即入發菩提心住。香象大師釈發心住名云、於大菩提起決定心、人位不退故、云初發心等云云。又釈行本義云、謂發菩提心為十住之本、但轉此心漸增勝故、成後諸住故也。〔已上〕当知非唯成後九住、十行十向十地、皆依此初住成也。是故其名義通十地自体真無漏道、尚有為初義。謂此云發心住、彼云歡喜

るべし。〕甚深の愛敬の念を生ぜり。此の念は是れ三昧の方便なるを以ての故に、因において果の名を立てて、念仏三昧と名くなり。此の義は亦前に成ぜざるが如し。或いは称名の位において随分に散心を撰する故に定の名を仮立することあり。或る師は称名において斂心定名を立つる是れなり。今、大綱を述ぶるに、諸門に違すべからざるなり。是の故に称名を付属するは、即ち是れ念仏三昧を付属するなり。念仏三昧を付属するは、即ち是れ觀仏三昧を付属するなり。宗旨の属累相い成じて、違なきなり。然れば菩提心は、仏果を志求する心なるが故に、定散の二善において、皆通じて之あり。惣じて之を言わば、因より果に向う、一切の心・慈悲の願行等は、皆菩提心と相応せざるることなき故にと。

今、念仏三昧・觀仏三昧は、正しく仏菩提の果を觀念するが故に、即ち是れ三昧の菩提心なり。凡そ六度の行は、皆菩提心を以て本と為す。其の中の諸三昧の善、設い念仏三昧にあらずと雖も、其の心は法無我の理に順じ、修する所の三昧、皆以て菩提行と名け、其所依の心を、菩提心と名けるなり。是の故に第三地の菩薩の四禪等を修する、皆是れ菩提の行なり。其所依の心、是れ菩提心なり。之に依りて『菩提心經』を、「菩提心静慮波羅密」等と云う。『蓮華戒菩薩広積菩提心論』に、広く菩提心の義を明かし、亦諸經を引き、多く三昧の善を説きたまう、即ち此の意なり。又、三昧の善に限るにあらず、自余の諸行、皆以て是の如し。是の故に羅什所訳の二卷『菩提心論』に、菩提心の義を明かして、広く六度の行を説けり。又『菩提行經』を、「菩提心忍辱波羅密菩提心精進波羅密」等と名く。又『菩提資糧論』に、六度を説きて「菩提資糧」と名く。彼の『論』に云く、「菩提は一切智智の故に、資糧は能く菩提を満つる法の故に」と等云云。彼の所依の心、是れ菩提心なり。又『華嚴』の十行・十廻向・十地品等の意、皆是れ之と同じ。此れ等の文義、具さに出す能わす。是の故に念仏の善根、若しくは定、若しくは散なり。菩提心を離れて、何を以てか所依と為んや。中に就いて善導和尚、既に功德雲比丘の念仏三昧の文を引き、万行の中の一行の義を証成せり。然れば此の比丘は善財知識の中、初發心住に善友と為る。發心は、即ち是れ發菩提心なり。此の比丘は念仏三昧の主為るを以ての故に、善財初めて文殊に対するに法界の信位に入り、文殊の指示に依りて、次に此の比丘に値えり。比丘は念仏三昧の法を説く、善財之を聞きて、種姓〔姓〕の字、仁本・活本〔性〕顯發し、即ち發菩提心住に入る。香象大師、發心住の名を釈して云く、「大菩提において決定心を起す、人位不退なるが故に、初發心と云う」等と云云。又行本義を釈して云く、「謂く發菩提心を十住の本と為す、但し此の心を轉じて漸く増勝する故に、後の諸住を成ずる故なり」と。〔已上〕当に知るべし、唯、後の九住を成じ、十行・十向・十地、皆此の初住に依りて成ずるなり。是の故に其の名義は十地自体の眞の無漏道に通ず、尚お初めの為の義あり。謂く此に發心住と云い、彼に歡喜地と云うは、此れ能發の心を挙げて、彼の所發の歡喜を出す。十地尚お爾かなり、況んや十行・十廻向をや。此の義は具さに慧光法師の『華嚴義記』を

地者、此举能發之心、彼出所發之歡喜。十地尚爾、況十行十廻向乎。此義具可見慧光法師華嚴義記。經中說入住行云、諸仏子、何等是菩薩摩訶薩初發心住、比菩薩見三十二相八十種好、妙色具足、尊重難遇。或觀神變、或聞說法、或聽教誡、或見衆生受無量苦、或聞如來廣說佛法、發菩提心求一切智、一向不廻。文。探玄記第五、有一釈云、初六句發心所依縁。私云、從見三十二相至或聞如來廣說佛法是也。次一句明所發心体。私云、發菩提心一句也。次一句明發心所求。私云、求一切智一句也。後一句明不退還。私云、一向不廻一句也。解曰、九句經文中、初六句發心所依縁、第八所求一切智、第九明發心不退義。第七發菩提心一句、此住体也。說彼所依縁中、縁仏身相好等、念尊重難遇德、即是念仏義也。以此為因、發菩提心。

然汝云菩提心抑念仏、何其相翻乎。若爾者、功德雲比丘對善財、涌無礙智雲、振大雷音、耀甚深念仏三昧大電光。爾時善財菩提心水、何不枯竭乎。若云念仏三昧為初發心解脫門者、撥去菩提心之汝者、可為念仏行人耶、如何。又功德雲比丘、既為發心住知識。十地論云、此三昧是法体云云。此三昧者、大乘光明三昧也。十地法門、以此三昧為体也。准此宗家釈云、十住法門、以菩薩無量方便三昧為体。十行法門、以善伏三昧為体。十廻向法門、以明智三昧為体。准知寶藏如來、入不失菩提心三昧、示仏刹。淨土行立、以此為根本。明知淨土諸行皆以不失菩提心三昧為体也。汝何号淨土宗行人、撥去菩提心乎。又念仏三昧名字、有離合二釈。先約離門有三法。一念二仏三三昧也。初念者、即正念也。如前言觀察正念諸仏三昧。然正念者、正在菩提心也。如離相論云。菩提心者、大乘中景勝。我於此心安住正念。文。是故念言即菩提心也。如同論云、菩提心者、住等引心。文。此所言等引者、非唯限定心也。諸行若順菩提、有寂靜義故、云等引。如同論上文云。所有諸仏三世事業、一切皆住菩提界中、之所撰藏、雖所撰藏彼一切法、而常寂靜文。者、即此義也。即仏法諸行、通定散二善、

*30上

*30下

見るべし。『經』の中に入住行を説きて云く、「諸仏の子、何等をか是れ菩薩摩訶薩の初發心住とせん、此の菩薩は仏の三十二相八十種好、妙色具足、尊重にして遇い難きを見たてまつる、或いは神變を觀たてまつる、或いは説法を聞く、或いは教誡を聞く、或いは衆生の無量の苦を受くるを見る、或いは如來広く仏法を説きたまえるを聞く、菩提心を發し一切智を求め、一向に廻さず」と。文。『探玄記』の第五に、一釈ありて云く、「初めの六句は發心の所依の縁を挙ぐ。私に云く、見三十二相より或聞如來廣説仏法に至る是れなり。」。次の一句は所發心の体を明かす。私に云く、發菩提心の一句なり。」。次の一句は發心の所求を明かす。私に云く、求一切智の一句なり。」。後の一句は退還せざることを明かす。私に云く、一向不廻の一句なり。」と。九句の經文の中に、初めの六句は發心の所依の縁、第八所求一切智、第九發心不退の義を明かす。第七發菩提心の一句、此の住の体なり。彼の所依の縁を説く中に、仏身相好等を縁じて、尊重難遇の徳を念す、即ち是れ念仏の義なり。此を以て因と為し、菩提心を發す。

然るに汝、菩提心は念仏を抑うと云う、何ぞ其れ相い翻すや。若し爾れば、功德雲比丘、善財に對して、無碍智の雲を涌かし、大雷音を振るい、甚深の念仏三昧の電光を輝かせり。爾の時に善財の菩提の心水、何ぞ枯竭せずや。若し念仏三昧を初發心の解脫門と為すと云わば、菩提心を撥去するの汝は、念仏の行人と為すべきや、いかん。又功德雲比丘、既に發心住の知識と為す。『十地論』に云く、「此の三昧は是れ法体なり」と云云。此の三昧は、大乘の光明三昧なり。十地の法門、此の三昧を以て体と為すなり。准じて知る、寶藏如來、不失菩提心三昧に入りて、仏刹を示したまう。淨土の行を立つるに、此れを以て根本と為す。明らかに知んぬ、淨土の諸行は皆不失の菩提心三昧を以て体と為すなり。汝は何ぞ淨土宗の行人と号して、菩提心を撥去するや。又念仏三昧の名字に、離合の二釈あり。先に離門に約して三法あり。一には念、二には仏、三には三昧なり。初念は、即ち是れ正念なり。前に觀察正念諸仏三昧と言ふが如し。然れば正念は、正しく菩提心にあるなり。『離相論』に云うが如し。「菩提心は、大乘の中に最勝なり。我れ此の心において正念に安住す」と。文。是の故に念の言は即ち菩提心なり。同じき『論』に云うが如し、「菩提心は、等引に住する心なり」と。文。此に言う所の「等引」は、唯、定心に限るにあらざるなり。諸行の若し菩提に順ぜば、寂滅の義ある故に、「等引」と云う。同じき『論』の上の文に云うが如し。「所有諸仏の三世の事業、一切皆菩提界の中に撰藏せらる、彼の一切法に撰藏せらるると雖も、而も常に寂靜なり」文とは、即ち此の義なり。即ち仏法の諸行、定散二善に通ず、皆此の義あり。此を以て言わく、外道の所有の三昧、是れ定と為すと雖も、菩提心に順ぜず、寂靜の義なきが故に、此れ「等引」の義なし。散善等に尚お此の義あり、況んや定善をや。是の故に三昧の言、亦是れ菩提心なり。次に中間の仏の言は、具さに仏陀を云う。此の音に八轉聲の差別あり、第四轉聲を菩

皆有「此義」。以此而言、外道所有三昧、是雖為定、不順「菩提心」、無「寂靜義」故、無「此等引義」。散善等尚有「此義」、況於「定善」乎。是故三昧之言、亦是菩提心也。次中間仏之「言者」、具云「仏陀」。此音有「八轉聲差別」、第四轉聲云「菩提」。是故具云「阿彌陀仏陀」、或云「阿彌陀菩提」。馬鳴莊嚴論中、呼「迦葉仏」、或云「迦葉三藐三仏陀」、或云「迦葉三藐三菩提」。即是也。常途言「仏者」、以「陀音」撰「仏字入声」云「仏」。此呼「梵語」例法也。是故云「念仏三昧者」、即是言「念菩提三昧」也。言「觀仏三昧者」、即是言「歡菩提三昧」也。然者念仏三昧名言、未有一字非「菩提心」也。次約「合門者」、其名義即是為「菩提心」也。何者梵語上下連続呼之、順「漢土風俗」翻「文字」置之。若順「梵文者」、可有「云「仏念」。然仏者菩提也、念義在「心」也。即菩提者一切智智、心者念一切智智「心」也。三昧者是定也。雖然念仏三昧者、是約「人」也。如彼云「不失菩提心三昧者」、是約「法」也。如「大日經疏」云。約「菩提義」、即有「無量無辺金剛印」、約「仏陀義」、即有「無量無辺持金剛者」。文。如「次上法下人、可知」。通説雖為「一義」、別説有「人法差別」。今為「顯」念仏三昧以「菩提心」為「體」故、約「通相門」積「名字」也。例如「彼三身四智分」差別者別説門、四智撰「三身」者是通相門上。是又人法同異也。是故念仏三昧者、名字体用、都不離「菩提心」也。然汝執「念仏三昧」而撥「菩提心」者、宛麤「食念仏名字」也。按「苾苾生宗義」也、可「咲可」咲。

問曰、如「我所」知者、言「觀仏三昧者、觀「仏色身等」、即如「觀經第九觀等」也。言「念仏三昧者、唯是称「念名号」也。既有「此不同」、若爾者、何云「付「属念仏」、即為「付「属觀仏三昧」乎。若亦一体者、何故疏重言出「觀仏三昧」外、亦云「念仏三昧為「宗」乎、如何。答。其大綱雖「前成」、汝被「封」妄見、本執尚難「改」。仍被「纏」此疑網。今引「經疏文」、重可「成」彼義、謂觀經説「第八像觀」終云、作「是觀」者、除「無量億劫生死之罪」、於「現身中」、得「念仏三昧」。疏第三釈云、從「作是觀者」、下至「得念仏三昧」已來、正明「剋念修觀」、現蒙「利益」云云。解曰、剋念修觀者、是觀仏義、現蒙利益者、指「

* 同上

提と云う。是の故に具さに阿彌陀仏陀と云う、或いは阿彌陀菩提と云う。馬鳴の『莊嚴論』の中に、迦葉仏を呼びて、或いは迦葉三藐三仏陀と云い、或いは迦葉三藐三菩提と云う。即ち是れなり。常途に仏と云うは、陀の音を以て仏の字の入声に撰して仏と云う。此れ梵語を呼ぶ例法なり。是の故に念仏三昧と云うは、即ち是れ念菩提三昧と云うなり。觀仏三昧と云うは、即ち是れ觀菩提三昧と云うなり。然れば念仏三昧の名言は、未だ一字も菩提心にあらざるにあらざるなり。次に合門に約せば、其の名義即ち是れ一菩提心と為すなり。何となれば梵語は上下連続して之を呼び、漢土の風俗に順じ文字を翻じて之を置く。若し梵文に順ぜば、仏念と云うことあるべし。然れば仏は菩提なり、念の義は心にあるなり。即ち菩提は一切智智、心は一切智智を念ずる心なり。三昧は是れ定なり。然りと雖も念仏三昧は、是れ人に約するなり。彼の不失菩提心三昧と云うが如きは、是れ法に約するなり。『大日經疏』に云うが如し。「菩提の義に約すに、即ち無量無辺金剛の印あり、仏陀の義に約すに、即ち無量無辺持金剛者あり」と。文。次の如き上法下人、知るべし。通じて説くに「一義と為すと雖も、別して説くに人法の差別あり。今、念仏三昧は菩提心を以て体と為すと為すを顯わす為の故に、通相の門に約して名字を積するなり。例えば彼の三身・四智に差別を分かつは別説門、四智に三身を撰するは是れ通相門の如し。是れ又人法の同異なり。是の故に念仏三昧は、名字体用、都て菩提心を離れざるなり。然れば汝が念仏三昧に執して而も菩提心を撥去するは、宛かも念仏の名字を飴食するなり。往生の宗義を按菴するなり、咲うべし、咲うべし。

問うて曰く、我が知る所の如きは、觀仏三昧と云うは、仏の色身等を觀ずる、即ち『觀經』第九觀等の如きなり。念仏三昧と云うは、唯、是れ名号を称念するなり。既に此の不同あり、若し爾れば、何ぞ念仏を付属して、即ち觀仏三昧を付属すると為すと云うや。若し亦一体ならば、何の故に『疏』に重ねて言いて、觀仏三昧を出す外に、亦念仏三昧を宗と為すと云うや、いかん。答う。其の大綱は前に成すと雖も、汝は妄見に封ぜられて、本執尚改め難し。仍お此の疑網に纏わるる。今、『經疏』の文を引き、重ねて彼の義を成すべし、謂く『觀經』に第八像觀を説きたまう終わりに云く、「是の觀を作す者は、無量億劫生死の罪を除き、現身の中において、念仏三昧を得」と。『疏』の第三の釈に云く、「作是觀者より、下も得念仏三昧に至る已來は、正しく剋念の修觀、現に利益を蒙ることを明かす」と云云。解して曰く、剋念修觀は、是れ觀仏の義、現蒙利益は、『經』の「得念仏三昧」の文を指すなり。下の

經得念仏三昧文也。下結句念言、即指觀義言念仏也云云。(是二)又說第九真身觀經文云、但當憶想令心眼見、見此事者、即見十方一切諸仏。以見諸仏故、名念仏三昧、作是觀者、名觀一切仏身等云云。疏云、一明因觀得見十方諸仏、二明以見諸仏故結成念仏三昧、三明但觀一仏即觀一切仏身也云云。解曰、經文言令心眼見乃至作是觀者等者、是觀仏也。言名念仏三昧者、即是念仏也。疏中言因觀得見乃至但觀一仏等者、是觀仏也。言以見諸仏故結成念仏三昧者、即是念仏三昧也。(是二)又當卷疏中、釈念仏衆生撰取不捨經文、出三義中、釈第二近縁疏文云、衆生願見仏、仏即応念現在目前。解曰、即衆生願見仏者、是念仏也。言現在目前等者、是觀仏也。(是三)如此作法已、次文出專念名号利益、乃至結云、広頭念仏三昧竟云云。比則觀仏三昧与念仏三昧、更無異体也。但至善導重言釈者、惣說雖為一体、加行有差別故、名義亦不同。

依此義觀仏三昧經立二名。彼經第十云、仏告阿難、此經名繫想不動、如是受持。亦名觀仏白毫相、如是受持。亦名逆順觀如來身分、亦名一一毛孔分別如來分、亦名觀三十二相八十隨形好諸智慧光明、亦名觀仏三昧海、亦名念仏三昧門、亦名諸仏妙華莊嚴色身、亦名說戒定慧解脫解脫知見十力四無所畏十八不共法果報所得微妙色身經、汝好受持、慎勿妄(活本「忘」)失。(已上)此中多約広略惣別等義立名。其中觀念二種名言、亦就觀見憶念為不同。言其差別者、謂觀念二義、雖俱在心、觀者寄眼見。以心眼觀見仏身等、如對眼見故。如俱舍論云、見謂眼根觀照色故云云。此即眼根取境云觀照也。今觀義、准此立名、謂心実雖非眼、以慧心所、簡択仏身相好等位、如對面見草木等。是云觀見也。言念者、雖不觀照色相等、於心有明記用。是故一往之、觀約色相、念広通諸法。有此不同也。其言同義者、觀見是寄頭門。且以心寄眼根故、理実觀与念俱是一心也。於一心上立此二義故、唯是一念仏三昧也、亦是一觀仏三昧也、是故觀仏三昧經第九云、念仏三昧

*301下

結句の「念」の言は、即ち「觀」の義を指して念仏と言ふなりと云云。(是れ一なり)又第九真身觀を説きたまふ經文に云く、「但當に憶想をして心眼に見せしめたまふ、此の事を見たてまつる者は、即ち十方一切の諸仏を見たてまつる。諸仏を見たてまつるを以ての故に、念仏三昧と名く、是の觀を作す者は、觀一切仏身と名く」と等云云。『疏』に云く、「一には觀に因りて十方の諸仏を見たてまつることを得ることを明かす、二には諸仏を見たてまつるを以ての故に念仏三昧の結成することを明かす、三には但一仏を觀ずるは即ち一切の仏身を觀することを明かすなり」と云云。解して曰く、經文に「令心眼見乃至作是觀者」等と言ふは、是れ觀仏なり。「以見諸仏故結成念仏三昧」と言ふは、即ち是れ念仏三昧なり。(是れ二なり)又當卷の『疏』の中に、「念仏衆生撰取不捨」の經文を釈して、三義を出す中に、第二の近縁を釈する『疏』の文に云く、「衆生、仏を見たてまつらんと願せば、仏即ち念に應じて現に目の前にいます如し」と。解して曰く、即ち「衆生願見仏」は、是れ念仏なり。「現在目前」等と言ふは、是れ觀仏なり。(是れ三なり)此の如き作法已りて、次の文に名号を專念する利益を出して、乃至結して云く、「広く念仏三昧を願わし竟んぬ」と云云。此れ則ち觀仏三昧と念仏三昧と、更に異なる体なし。但し善導の重言の釈に至らば、惣じて説くに一体と為すと雖も、加行に差別あるが故に、名義亦不同なり。

此の義に依りて『觀仏三昧經』に二名を立つ。彼の『經』の第十に云く、「一、仏、阿難に告げたまわく、此の經を繫想不動と名く、是の如く受持せよ。亦觀仏白毫相と名く、是の如く受持せよ。亦逆順觀如來身分と名く、亦一一毛孔分別如來分と名く、亦觀三十二相八十隨形好諸智慧光明と名く、亦觀仏三昧海と名く、亦念仏三昧門と名く、亦諸仏妙華莊嚴色身と名く、亦說戒定慧解脫解脫知見十力四無所畏十八不共法果報所得微妙色身經と名く、汝好く受持し、慎んで妄(妄)の字、活本(忘)失することなかれ」と。(已上)此の中に多く広略惣別等の義に約して名を立つ。其の中に觀念・念の二種の名言、亦觀見憶念に就いて不同と為す。其の差別と言ふは、謂く觀・念の二義、俱に心にありと雖も、觀は眼見に寄せる。心眼を以て仏身等を觀見する、眼に對して見るが如きの故に。『俱舍論』に云うが如し、「見は謂く眼根の色を觀照する故に」と云云。此れ即ち眼根の境を取るを觀照と云うなり。今の觀の義は、此れに准じて名を立つ、謂く心実に見にあらざると雖も、慧の心所を以て、仏身相好等を簡択する位、面對して草木等を見るが如し。是れを觀見と云うなり。念と言ふは、色相等を觀照せずと雖も、心に對して明記の用あり。是の故に一往之を云わば、觀は色相に約し、念は廣く諸法に通ず。此の異なるなり。其の同義と言ふは、觀見はれ寄頭門なり。且く心を以て眼根に寄せる故に、理実觀、念と俱に是れ一心なり。一心の上において此の二義を立つる故に、唯、是れ一念仏三昧なり、亦是れ一觀仏三昧なり、是の故に『觀仏三昧經』の第九に云く、「念仏三昧は、仏の色身を見たてまつること、了了分明なり」と云云。但し加行の差別に約して、其の不同を論ずる時、念仏は觀念にあらざることあり。謂く愚鈍の

者、見_レ「仏色身」、了_レ了分明云云。但約_二「加行差別」、論_一其不同_二時、有_二「念仏非觀仏」。謂如_二「愚鈍女人等称名念仏」、不_レ觀_二「仏色相等」故、非_レ觀_二「仏」、有_二「称念義」故、立_二「念仏名」。是故念_二「仏義寛」、通_レ觀_二「仏」故。觀_二「仏三昧経等」、以_レ觀_二「仏身色相等」、名_二「念仏三昧」。此例諸經論非_レ一。觀_二「仏義狭」、有_二「不通」觀_二「仏称名念仏義」故。約_二此寛狭不同_一言_二「差別」者、謂觀_二者觀見_一、是慧心所業、念者念持、是念心所業也。此念慧心所、雖_二必俱起_一、隨_二所縁境_一、隱_二劣顯_一勝得_レ名。謂欲_レ觀_二「仏色身等」者、先對_二師範_一披_二「教文」、可_レ學_二「三十二相八十随好等」。知_二此相_一已、專_二注心_一於_二相好等_一不_レ異縁。先知_二「仏身等」、以_レ慧用勝_二故_一、立_二「觀名」、非_レ無_レ念也。唯稱_二「仏名位」、雖_レ不知_二相好等_一、有_二「愛敬念」、以_レ念用勝_二故_一、立_二「念名」。或有_二「合二種立一名」。如_二「世云觀念等是也」。

問。就_二此不同_一、於_二「觀仏与念仏」、為_レ有_二「勝劣」乎。答。若以_二「念仏」為_レ念_二「仏者」、二名俱無_二「勝劣」。依_二此義_一、或有_二「單以觀仏為念」上、或有_二「單以念仏為觀」上。如_二「觀仏三昧経等」。或有_二「有別義」觀_二「念」二字各有_二「其用」故、合_二「二種立一名」。上所_レ出_二「念仏名字」、具名_二「普門光明觀察正念諸仏三昧」。此中觀察者、是觀也。正念者、是念也。此等皆、或單拳、或双明、皆無_二「勝劣」也。若約_二以_レ「称名」為_レ「念仏」義_上者、以_レ「觀仏」為_レ「勝」、意業内門転故、以_レ「称名行」為_レ「劣」、語業外門転故。

問。爾者何故、文殊般若経、不_レ觀_二「相貌」、唯令_レ專_二「称名字」乎。答。此亦示_二「一行三昧方便」也。即說_二其根本成就_一中云、即於_二「念中」得_レ見_二「彼阿弥陀仏及一切仏等」云云。既以_二「心念見仏」為_レ「根本」。明知_二称名_一是加行也。是又可_レ以_二「称名」為_レ「淺」、以_二「定心」為_レ「深」。

問。如_二「善導解釈」者、唯以_二「称名」名_二「念仏」、深讚_二「嘆之」。全不_レ論_二「淺探勝劣之不同」。今立_二此義_一、有_二「何証」乎。答。善導觀経疏云、雖_レ言_二「未証」、是万行中_一一行云云。又觀念法門、成_二「口称三昧」見_二「浄土」云云。〈取意〉此等解釋、指_二「三昧成就」。此即為_レ「深」。其前加行称名為_レ「淺」。豈非_レ無_二「勝劣」乎。是故群疑論第五云、又念仏法門、或深或淺、通_レ定通散、大根小行咸得_二「修行」。定即始_二於凡

女人の称名念仏の如し、仏の色相等を觀ぜざる故に、觀仏にあらず、称名の義あるが故に、念仏の名を立つ。是の故に念仏の義は寛し、觀仏に通ずるが故に。『觀仏三昧経』等、仏身の色相等を觀ずるを以て、念仏三昧と名く。此の例は諸經論に一にあらず。觀仏の義は狭し、觀仏に通ぜざる称名念仏の義あるが故に。此の寛狭の不同に約して差別を言わば、謂く觀は觀見、是れ智慧の所業なり、念は念持、是れ念心の所業なり。此の念慧の心所、必ず俱に起ると雖も、所縁の境に隨いて、劣を隱して勝を顯わして名を得。謂く仏の色身等を觀せんと欲わば、先ず師範に對して教文を披き、三十二相八十随形好等を學すべし。此の相を知り已りて、心を相好等に專注して異縁せざれ。先ず仏身等を知る、慧用勝れたるを以ての故に、觀の名を立つ、念なきにあらざるなり。唯、仏名を稱する位、相好等を知らずと雖も、愛敬の念あらば、念用勝れたるを以ての故に、念の名を立つ。或いは二種を合して一名を立つるあり。世に觀念と云うが如き等は是れなり。

問う。此の不同に就いて、觀仏と念仏に、勝劣ありと為んや。答う。若し觀仏を以て念仏と為さば、二名俱に勝劣なし。此の義に依りて、或いは單に觀仏を以て念仏と為すあり、或いは單に念仏を以て觀仏と為すあり。『觀仏三昧経』等の如し。或いは別義ありて觀・念の二字に各の其の用あるが故に、二種を合して一名を立つることあり。上に出す所の念仏の名字は、具さに普門光明觀察正念諸仏三昧と名く。此の中の觀察は、是れ觀なり。正念は、是れ念なり。此れ等は皆、或いは單として挙げ、或いは双べて明す、皆勝劣なきなり。若し称名を以て念仏と為す義に約さば、觀仏を以て勝と為す、意業内門転の故に、称名の行を以て劣と為す、語業外門転の故に。

問う。爾れば何の故に、『文殊般若経』に、相貌を觀せず、唯、名字を專稱せしむるや。答う。此れ亦一行三昧の方便を示すなり。即ち其の根本の成就を説く中に云く、「即ち念中において彼の阿弥陀仏および一切仏を見るを得」等と云云。既に心念見仏を以て根本と為す。明らかに知んぬ、称名は是れ加行なり。是れ又称名を以て淺と為し、定心を以て深と為すべし。

問う。善導の解釋の如きは、唯、称名を以て念仏と名け、深く之を讚嘆す。全く淺深勝劣の不同を論ぜず。今、此の義を立つるは、何の証拠かあるや。答う。善導の『觀経疏』に云く、「未だ証せずと雖も、是れ万行の中の一行なり」と云云。又『觀念法門』に、「口称三昧を成じて浄土を見たてまつる」と云云。〈取意〉此れ等の解釋は、三昧の成就を指す。此れを即ち深と為す。其の前の加行は称名を淺と為す。豈に勝劣なきにあらずや。是の故に『群疑論』の第五に云く、「又念仏の法門、或いは深、或いは淺、定に通じ散に通じ、大根小行は咸く修行を得。定は即ち凡夫に始まり十地に終わる、念仏三昧

*50下

夫「終」于十地、行「念」三昧甚深微妙。華嚴涅槃文殊般若大集賢護觀三昧、咸共稱讚不可思議、如「善財童子」於「功德雲比丘」所請「修菩薩之行」、功德雲比丘唯教「念三昧之法」。此即甚深之法也。散即一切衆生、苦行若坐、一切時處皆得「念」三昧、不妨「諸務」、乃至命終亦成「其行」云云。此即與「善導雖言未証之積」玄會。甚深念「定」、稱名行者未「証得」故、云「未証」。稱名即為「比定加行善」也。豈無「淺深」乎。雖有「如此不同」、稱名是通「諸念三昧」為「惣方便」故、於「稱名」撰「諸念三昧」也。依有「此惣別定散寬狹等差別」故、善導出「二重名字」也。依「觀三昧經」言之者、即可謂「出」異名。何者如「彼經第十先標」品次云。念七仏品第十正說段云、仏告「阿難」、若有「衆生」、觀像心成、次當「復觀」過去七仏像等云云。又云、觀三昧海經念十方仏品第十一正說段云、仏告「阿難」、云何行者、觀「十方仏」等云云。雖「如此無差別」、彼經處亦重言、出「二名非一」、是約「加行等差別」也。今善導和尚觀念法門、多引此經成「念」三昧、所積亦准此可知。就「中今所」出經宗、文義全例同彼經文、更不可有「差異」也。是故設疏現文有「作」如此說。今經宗有二種。一以「觀三昧」為「宗」、二以「念三昧」為「宗」。雖有「如此比二分」、依「前不同門」、可「存」此會積。勿謂「實有」二種三昧別體。何況不「云有」二種、唯置「亦字」。若言「以」觀三昧「為」宗時、此外不「立」念三昧「為」別宗、若言「以」念三昧「為」宗時、此外不「立」觀三昧「為」別宗也。能可「得」文意、莫驚「于亦字」矣。

問、我就「觀經」并疏、成「二種三昧各別義」。汝引「余經」難之、我不「可」依「用之」、如何。答。若爾者、觀經何處、十三定觀中、像觀真身觀等外、有「說」念三昧「文」乎。若言「指」下品生中稱名文「為」念三昧者、疏既判為「散善」、何云「三昧」乎。若從「常途」、云「下」稱名是為「念三昧」加行「故言」三昧、言「指」此為「念三昧」者、尚惟為「散善」。今經中為「不說」念三昧「根本定」乎。若言「不說」者、今經是往生宗秘要也。何不「說」之乎。若汝言「念」三昧者始終唯「散善非」定善、是故說「稱名」是為「說」念三昧者、念三昧所「引

*363上

甚深微妙を行す。『華嚴』・『涅槃』・『文殊般若』・『大集』・『賢護』・『觀三昧』、咸く共に不可思議を稱讚す、善財童子は功德雲比丘の所において菩薩の行を修するを請うて、功德雲比丘、唯、念三昧の法を教うるが如し。此れ即ち甚深の法なり。散は即ち一切の衆生、若しは行、若しは坐、一切の時處に皆念三昧を得るに、諸務を妨げず、乃至命終に亦其の行を成ず」と云云。此れ即ち善導の「雖言未証」の積と玄會す。甚深の念三昧の定を、念三昧の行者未だ証得せざる故に未証と云う。稱名は即ち此の定の加行の善と為すなり。豈に淺深なからんや。此の如きの不同ありと雖も、稱名は是れ諸の念三昧に通じての總方便と為す故に、稱名において諸の念三昧を撰するなり。此の惣別・定散・寬狹等の差別あるに依るが故に、善導は二重の名字を出すなり。『觀三昧經』に依りて之を言わば、即ち異名を出すと謂うべし。何んとならば、彼の『經』の第十に先ず品次を標して云うが如し。念七仏品第十正說段に云く、「仏、阿難に告げたまわく、若し衆生ありて、觀像の心成ず、次に當に復過去七仏の像を觀ずべし」等と云云。又云く、『觀三昧海經』念十方仏品第十一の正說段に云く、「仏、阿難に告げたまわく、云何が行者、十方の仏を觀ぜん」等と云云。此の如く差別なしと雖も、彼の『經』の處に亦重ねて言えり、二名を出すこと一にあらず、是れ加行等の差別に約するなり。今、善導和尚の『觀念法門』に、多く此の經を引きて念三昧の義を成ず、所積亦これに准じて知るべし。中に就いて今、出す所の經宗、文義全く彼の經文と例同す、更に差異あるべからざるなり。是の故に設けて『疏』の現文に此の如き説を作すとあり。今、經の宗に二種あり。一には觀三昧を以て宗と為し、二には念三昧を以て宗と為す。此の如き一二の分別ありと雖も、前の不同の門に依りて、此の會積を存すべし。實に二種三昧の別の体ありと謂うことなかれ。何に況んや二種ありと云わず、唯、「亦」の字を置く。若し觀三昧を以て宗と為すと云う時は、此の外に念三昧を立てて別の宗とは為さざるなり。能く文意を得べし、「亦」の字に驚くことなかれ。

問う。我れ『觀經』並びに『疏』に就いて、二種三昧各別の義を立つ。汝は余經を引きて之を難ず、我れ之を依用すべからず、いかん。答う。若し爾れば、『觀經』の何處に、十三定觀の中に、像觀・真身觀等の外、念三昧を説く文あるや。若し下品生の中の稱名の文を指して念三昧と為さば、『疏』に既に判じて散善と為す、何に三昧と云うや。若し常途に隨いて、稱名は是れ念三昧の加行と為す故に三昧と言ふと云い、此れを指して念三昧と為すと言わば、尚お惟れ散善と為す。今經の中に念三昧の根本の定を説かずと為んや。若し説かずと言わば、今經は是れ往生宗の秘要なり。何ぞ之を説かざらんや。若し汝、念三昧は始終唯、散善にして定善にあらず、是の故に稱名を説きて是れ念三昧を説くと為すと言わば、念三昧に引く所の多種甚深の念三昧の文、皆以て証拠を成ぜず、又念三昧の名を

*363下

多種甚深念仏三昧文、皆以不成証拠、又不可立念仏三昧名。若汝立三昧名者、唯言名於聞思相應者、思慧純熟、修慧相生。豈三昧善、唯留于聞思可不生修慧乎。又善導和尚、以称名為行可發三昧乎。無此理故、此觀經於往生宗為「秘要」、最可說念仏三昧。其三昧者、即像觀真身觀等也。是故如前出經疏文、俱以像觀真身觀等、名念仏三昧。然汝集言樂觀仏者乖、彌陀本願、違「積尊付屬」、甚以不可也。既題言「觀無量壽經」、不言「念無量壽經」。爾者令「經題目相違彌陀本願」也。立「題目」起者、阿難對世尊問受持法要時、仏告阿難、此經名「觀極樂國土無量壽仏觀世音菩薩大勢至菩薩」等云云。爾者令「積尊有雖說彌陀本願、而違彌陀本願之過」。若如汝所「言者、經言持無量壽仏名」、疏言「一向專稱」唯限「口稱」不取「心念」乎。若言「取心念者、念仏觀仏終無違也」。是故、經家說相、疏家解「積、終不成」梓楯也。然汝何於「二種三昧」終可「存取捨」乎。是故當「知、付屬称名者、即付屬念仏三昧也」。若云「付屬三昧者、此三昧以「菩提心」為「体性」也。何者、謂菩提心者、此云「智心」。香象大師「念仏三昧名」、云「慧定」。然智与慧雖有「別義」、通論即是為「智」也。即言「智者是心所、心者是心王也。謂著生死一位、一聚心心所法、皆以「無明」為主故、云「不覺心」。欣涅槃位、一聚心心所法、皆以「智」為主故、云「智心」也。如云「大円鏡心平等性心等」也。今所言念仏三昧、雖以「菩提心」為「体性」、於「三昧位」念心有「勝用」故、云「念仏」也。若爾者、何向「一向專称文」、可「捨菩提心」。是豈非「迷念仏名字」乎。若作「此見者、設雖「称仏名」、譬如「断命根」好「美容」、何其愚乎。華嚴經中、善財知識不動「優婆夷」說「自行」中云、爾所劫中所見衆生、無一衆生我不勸發「阿耨多羅三藐三菩提心」云云。汝之所行相「翻此」。將「抑一切衆生發菩提心」。是知汝是一切衆生大惡知識也。又同經中、春和夜神說「重罪」中云、安住「邪法」、毀「謗如来」、壞「正法輪」、於「諸菩薩」皆「辱傷害、輕「大乘道」、断「菩提心」。《乃至》不「久当」墮「三惡道」中云云。汝之断菩提心邪見、豈非「三惡道業因」乎。可「恐可」恐、可

※上

立つべからず。若し汝、三昧の名を立てば、唯、聞思相應に名くと書いて、思慧純熟して、修慧相い生ず。豈に三昧の善、聞思に留まりて修慧を生ずべからざるや。又善導和尚、称名を以て行と為して三昧を發すべきや。此の理なき故に、此の『觀經』を往生宗において秘要と為す、最も念仏三昧を説くべし。其三昧は、即ち像觀・真身觀等なり。是の故に前出の『經疏』の文のごとく、俱に像觀・真身觀等を以て念仏三昧と名く。然るに汝が『集』は、觀仏を樂う者は彌陀の本願に乖く、積尊の付屬に違すと云うは、甚だ以て不可なり。既に題に「觀無量壽經」と云う、「念無量壽經」と言わず。爾れば經の題目をして彌陀の本願に相違せしむるなり。題目を立て起すは、阿難の世尊に対して受持法の要を問う時、「仏の阿難に告げたまわく、此の經を觀極樂國土無量壽仏觀世音菩薩大勢至菩薩と名く」等と云云。爾れば積尊をして彌陀の本願を説くと雖も、而も彌陀の本願に違するの過あらしめん。若し汝が言う所の如くならば、『經』に「持無量壽仏名」と言い、『疏』に「一向專称」と云うは唯、口稱に限りて心念を取らざるや。若し心念を取ると言わば、念仏・觀仏終に違なし。是の故に、經家の說相、疏家の解釈、終に梓楯せざるなり。然るに汝は何ぞ「二種三昧」において終に取捨を存すべきや。是の故に當に知るべし、称名を付屬するは、即ち念仏三昧を付屬するなり。若し三昧を付屬すると云わば、此の三昧は菩提心を以て体性と為すなり。何となれば、謂く菩提心は、此に智心と云う。香象大師、念仏三昧の名を積して、「慧定」と云う。然るに智と慧と別義ありと雖も、通じて論ずるに即ち是れ智と為すなり。即ち智と云うは是れ心所、心は是れ心王なり。謂く生死に著する位、一聚の心・心所法、皆無明を以て主と為す故に、不覺心と云う。涅槃を欣う位、一聚の心・心所法、皆智を以て主と為す故に、智心と云うなり。大円鏡心・平等性心等と云うが如し。今、言う所の念仏三昧は、菩提心を以て体性と為すと雖も、三昧の位において念心勝れたる用ある故に、念仏と云うなり。若し爾れば、何ぞ「一向專称」の文に向いて、菩提心を捨つべきや。是れ豈に念仏の名字に迷うにあらずや。若し此の見を作す者は、設い仏名を称すと雖も、譬えば命根を断ち美容を好むが如し、何ぞ其れ愚ならんや。『華嚴經』の中に、善財知識が不動優婆夷に自行を説く中に云く、「爾じが所劫中の所見の衆生、一衆生として我れ勸めて阿耨多羅三藐三菩提心を發さざるはなし」と云云。汝の所行は此れを相い翻さん。將に一切衆生の發菩提心を抑うべし。是に知んぬ、汝は是れ一切衆生の大惡知識なり。又同『經』の中に、春和夜神の重罪を説く中に云く、「邪法に安住し、如来を毀謗し、正法輪を壞し、諸の菩薩において皆辱傷害し、大乘の道を輕んじ、菩提心を断つ。《乃至》久しからずして當に三惡道の中に墮すべし」と云云。汝の断菩提心の邪見、豈に三惡道の業因にあらずや。恐るべし、恐るべし、悲しむべし、悲しむべし。

悲可_レ悲矣。

問。爾者可_レ付_二屬菩提心_一。何故付_二屬稱名_一乎。答。爾者一切諸經、唯可_レ說_二菩提心名字_一乎。菩提心者、一切仏道の体性也。一切詩經所說諸行、是菩提心所起諸行也。若約_二菩提心為_レ体者、諸經所_レ付屬者、皆是菩提行也。若得_二此意_一已者、當_レ知不_レ說_二菩提名字_一者、理在絶_レ言之道理也。譬如_二世人臨_レ終以_二金銀等財宝_一付_中屬諸子_上、依_レ不_レ云_二付_二屬諸子之命根_一、貴_二財宝_一輕_二命根_一乎。當_レ知付_二屬財宝_一者、依_レ重_二子息之命根_一也。若得_二此意_一已者、不_レ云_二付_二屬命根_一者、理在絶_レ言之道理也。此一往拳_二相似同喻_一、法譬不_二全同_一。此財宝与_二命根_一有_二差別_一。彼念仏_二三昧等_一、以_二菩提心_一為_二体性_一也、能_レ能_レ可_レ思量_二矣_一。然汝以_二菩提心_一為_二念仏障礙_一、甚以_二不可思議不可思議_一、奇異奇特、言語道斷、心行処滅、不可說未曾有也。

選択集中摧邪輪卷中

*_下

問う。爾れば菩提心を付属すべし。何の故に称名を付属するや。答う。爾れば、一切諸經に、唯、菩提心の名字を説くべきや。菩提心は、一切仏道の体性なり。一切諸經の所説の諸行は、是れ菩提心所起の諸行なり。若し菩提心を体と爲るに約さば、諸經に付属するところは、皆是れ菩提の行なり。若し此の意を得已れば、當に知るべし、菩提の名字を説かざることは、理ありて言を絶するの道理なり。譬えば世の人の終りに臨みて金銀等の財宝を以て諸子に付属するが如し。諸子の命根を付属すると云わざるに依りて、財宝を貴び命根を輕んずるや。當に知るべし、財宝を付属するは、子息の命根を重くするに依りてなり。若し此の意を得已れば、命根を付属すと云わざるは、理在絶言の道理なり。此れ一往、相似の同喻を挙げて、法喩に全く同じからず。此の財宝と命根は差別あり。彼の念仏三昧等、菩提心を以て体性と爲す、能く能く思量すべし。然るに汝は菩提心を以て念仏の障礙と爲す、甚だ以て不可思議、不可思議なり、奇異奇特なり、言語道斷、心行処滅、不可説、未曾有なり。